
魔導戦記リリカルなのはAnother world

イブニングゼロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔導戦記リリカルなのはAnother world

【Nコード】

N82260

【作者名】

イブニングゼロ

【あらすじ】

次元の海の何処かに存在する、地球によく似ている全く別の世界。そこに住まう赤髪の姫君はその世界の歪みの中に何を見るか・・・※駄文&中二病（多分）注意！二次創作が苦手な人はUターン推奨です。

また、予告無しに加筆修正することもあります。

プロローグ（前書き）

始めまして、イブニングゼロです。

このたびは私の小説にアクセス頂き、本当にありがとうございます。
至らない所もありますが、よろしく願います。

プロローグ

遙かなる次元の海を中心『ミッドチルダ』で発生した『ジェイル・スカリエッティ事件』を解決に導いた部隊『機動六課』の解散から4年経ったある時・

それぞれの道へ進んでいったかつての六課メンバー達はある時、その中心人物であった不屈のエース・オブ・エース・高町なのはによって召集をかけられ、現在、共にある次元世界へ向かっていた。

　とある時空航行艦の船内

「・・・『あの子』、元気にしてるかな、フェイトちゃん」

「・・・大丈夫。きっと元気にしてるよ」

「相変わらず『あの子』が気になるんやな？」

栗色の長髪を後ろで束ねた女性、高町なのはの問いにフェイトと呼ばれた金髪のロングヘアーの女性が答え、そこに濃い茶色の髪の間西弁の女性、八神はやてが言葉を返す。

「『あの子』って誰ですか？」

後ろの席から声をかけてきたのはかつてのなのはの教え子であった青い髪の少女『スバル・ナカジマ』。

その横にはスバルと共に戦場を駆け抜けた仲間達、オレンジ色の長髪の少女『ティアナ・ランスター』、赤髪の少年『エリオ・モンデリアル』、桜色の髪で横に小さな白き飛龍、『フリードリヒ』を連

れている少女『キャロ・ル・ルシエ』の三人の姿があった。

「僕達も何度かフェイトさん達と一緒に『アナザー・アース』には行ったことはありませんけど・・・」

「私達って、その『あの子』のいる『フォルティス・レイン王国』には行ったことはないですね？」

「そういえば私とフリードも気になってました」

「キュクル」

「あれ、そうやったっけ？それじゃヴィータ、説明頼むで」

「え、あたし!？」

ヴィータと呼ばれた10歳ぐらいの少女はいきなり話を振られて少々戸惑うがすぐに落ち着き、そして話し初めた。

ここでエリオの口から語られた『アナザー・アース』について。『アナザー・アース』とは高町なのはの出身世界である第97管理外世界『地球』に限りなく近い、次元のずれた所にある、その名の通り『もう一つの地球』であり、『第97・5中立世界』と呼ばれている。一番の違いはミッドやベルカとは異なる独自の魔法文明が発達していることであった。

こちらでは大きな戦争によって一部の国や大陸が人が住めないほどに荒れはてており、他の次元世界からやって来た国々がそこを開拓して移住。近隣諸国と平和を誓い合っていた。
ティアナが発言した『フォルティス・レイン王国』もその一つである。

ではそろそろヴィータによる本題へ戻る。

「昔々って程じゃないけど、その『アナザー・アース』にある『フォルティス・レイン王国』には、姉の『フェンリイ・リオ・フォルティス・レイン』と、妹の『エリー・ミスト・フォルティス・レイン』の、それはそれは美しい双子のお姫様がいたんだ。生まれつき強い力を持っていて、それを平和のため使おうと考えていたとても心優しい二人は、ある事件によって引き裂かれたんだ・・・」

「ある事件？」

「話は変わるんだけどよ、今、アナザー・アースには、管理局によるあっちへの干渉に反対している『スターラルガ』と賛成している『ミネルヴァ』の二つの勢力があって、元々は互いに管理局に対する考え方を平和的に話し合う組織だったんだ」

「・・・？だった？」

キャロの問いに答えたのは、濃い桜色の長髪で凜とした顔立ちの女性、シグナムだった。

「七年前、管理局を妄信するミネルヴァの一部の人間達がフォルティス・レインで大規模なクーデターを起こした。しかもその裏では管理局が手を回していたのだ」

「「「「！？」」」」」

驚く四人を見つつ、シグナムの後ろの席にいる短い金髪の女性、シヤマルがその続きを語る。

「管理局のごく一部の人間が二人の力を狙っていて、二人の身柄を交換条件にクーデターに加担していたの」

「そ、そんなことって・・・！」

「・・・残念だけど、紛れも無い事実なの。そして二人はこの国にひ

そかに作られていた違法研究所に連れ去られた。何らかの実験台にするために」

「ひ、酷い・・・」

「それで、二人はどうなったんですか・・・？」

不安げに聞くスバルに対し、なのはが答える・・・。

「なんとかクーデターは鎮静化したし、ちょうどこの世界のこの国にいた私とフェイトちゃん、はやてちゃんの三人で研究所も摘発した。だけど・・・」

フェンリィ王女は姿をくらまし、エリー王女は記憶をなくしていた」

「・・・！」

「そして、この事件によってスターラルガとミネルヴァの紛争が世界各地で始まり、今も続いているわけや」

「私達はエリー王女のお姉さんを助けられなかった。同じ管理局員の凶行を止めることができなかったの。・・・だけど、彼女が私達や管理局のことを憎むことは無かった」

「本当は悲しいはずなのに、辛くて仕方がないはずなのに、それを隠して健気に頑張ってるの。自分のような存在が二度と生まれないように、争いを止めるために・・・うわっ！？み、みんな、どうしたの！？」

ティアナとエリオは物凄く涙目になり、キャロはフリードを頭に乗せてぼろぼろと涙を流していた。その横では約30センチぐらいの大きさの『ユニゾンデバイス』の少女、リインフォース・ツヴァイとアギトがスバルと一緒に滝のように涙を流している。

「・・・私、王女の気持ち、わかります・・・」

「僕達の知らない所でそんな悲しいことがあったなんて・・・」

「ぐすっ・・・そんなの・・・お姫様、かわいそう・・・えぐっ、ひっく」

「キュク・・・」

「「「うわああああああああああああん!!!!」（大号泣&アギトが涙で飛んで天井に頭をぶつけた）」」

「泣くなよ、お前ら・・・あたしまで悲しくなってきたじゃねえかよおおおおおおおっ!」（号泣）」

六人と一匹、もらい泣きしたヴィータが泣き止むのは30分後のことであった。

「もう大丈夫だね? さあ、もう目の前だよ! アナザー・アースの魔法大国、フォルティス・レイン王国は!」

「・・・あの、『あの子』ってまさか・・・」

なのはは「その通り」と言いたげに笑顔を見せた。

「フォルティス・レイン城の屋上」

大国の中心となる城。

長い赤髪をなびかせ、少女その屋上に佇んでいた。

その瞳には遠くに見える、なのは達を乗せた時空航行艦が映っていた。

「・・・すぐにおもてなしの準備をお願い」
「はっ！」

大臣と思われる男が答える。

男が去った後、少女は何処から取り出した黒いローブを纏い、飛び立った。

——その背中に、人間から見れば異形ともとれる——

——白き翼を背負って。

プロローグ（後書き）

次回から本編スタートですが、まだ主人公はまともに出ません。リインとアギトは大号泣するシーンまで存在を忘れてました・・リインはともかくアギトのキャラが、というか実はリリカルなのはシリーズはNOSでしかわからないので原作と違う所があるかもしれません。あらかじめご了承ください。

御意見・御感想お待ちしております。

STAGE 1 宵闇の邂逅（前書き）

生暖かい目で見てくだされば幸いです。

STAGE 1 宵闇の邂逅

スバル達が号泣している間に、船はフォルテイス・レイン王国に到着した。

現在、アナザー・アースは管理局に対し、この世界の事件やロストログアにはよほどのことが無い限り過度に干渉しないことを条件に、次空航行艦の駐留や技術の提供を認めるという条約を結んでいる。なのは一行を乗せた船が着陸した場所はアナザー・アース中に設置されている次元世界の港のような施設の一つである。

船を降りた一行が最初に目にしたのは広大で近代的な都市には似つかわしくないような、まるでゲームに出てきそうな古城が遠くに見える光景。一行はその城を目指し、徒歩で移動することになった。足を進める一行の一番後ろには、シグナム・ヴィータ・シャマルの三人と合わせて『ヴォルケンリッター』と呼ばれている、はやてを守る四人の戦士の一人、ザフィーラの姿があった。人型と狼型の二つの姿を持つ彼は、今は狼型になって付いて来ていた。

この国に着いたときにはすでに夜の7時ぐらいになっており、街灯が夜道を照らしている。一行はいくつもの街灯が並ぶ広場に着き、そこら辺のベンチで一休みすることにした。

「相変わらずお城までが遠いな・・・」

「休憩がてらおやつにしますか、はやてちゃん」

「そうやな、ヴィータ、シャマル、頼むで」

「OK! じゃ、いくぞ! ほいっ!」

ポンッ

突然ヴィータの手から飛び出す氷の塊。シャルが準備をしている間にいくつかの塊を出してジャグリングをしている。

そしてシャルが指を回すと、そこに小さな風が吹く。

ヴィータが氷を風に投げ入れると氷はすぐに削り取られ、いつの間にもやら用意されていた皿の上に山を作った。人数分の皿がいっぱいになるまでこれは繰り返しされ、最後はスプーンとシロップを添えて一同に配られた。

「ほれ、かき氷の完成だぞ〜」

かき氷を食べ始める一行。因みに、アナザー・アースは現在夏まっさかりであった。

「やっぱりアナザー・アース式魔術は便利だね」

「確かに、シャリシャリ、これが、シャリシャリ、リンカーコア無しで、シャリシャリ、できるなんて、シャリシャリ、すごいですね・
・うう、頭痛い〜」

「喋るときぐらい食べるのやめなさいよ・・・」

この世界の魔術にはミッドチルダ式やベルカ式の魔法の力の源、リンカーコアを必要としない。

必要なのは少しの気力と簡単な術式、それを習得しようという努力のみ。それさえあれば先程のようなこともお手のもの。最も、ヴィータ達が使ったのはその真の力の一端に過ぎないのであるが。

前述の条約に課せられた厳しい条件を管理局が認めた理由や、この世界が『中立世界』と呼ばれた理由の一つに、この力を危険視していることがある。

なにしろリンカーコア有りでも素質が必要である魔力の火や雷などへの物質変換をいとも簡単にこなしてしまうような術式なのだ。管理局は全面戦争になればまず勝てないと判断したのだろう。

しかし一行は、そんなことは関係ないと言わんばかりに夢中でかき氷を食べていたのだった。（待て）

―その時だった。

―クスクス・・

「・・・!？」

「どうしたのティア？」

「今、何か聞こえなかった!？」

「えー？」

―クスクス・・

「・・・！誰がいる！」

「え？どこどこ？」

「クスクス・・・」

「あ、あれ！」

フェイトが指差す先に視線を向けると、そこには黒いローブに身を包む人物が街灯の上に立って一行を見下ろしていた。
フードで隠されていてはつきりとは見えないが、少女のような顔のようだ。

しかし、驚くべき事は別にあつた。

「人に・・・翼が・・・！？」

その少女の背中には美しい純白の翼が生えていたのだ。

思わず目を奪われるフォワード陣。

「何奴!？」

「なんか危険な香りがするですう」

「なんだお前は!」

シグナム、リイン、アギトがその翼持つ少女に向かって言い放つ。

「あ、あなたは？」

少女はシャルの問いに対して、ただクスクスと笑いながら手招きをするだけだった。

「・・・こっちへ来いって言うてるのか？」

ヴィータが呟くと、少女はその翼で高く浮き上がり、ローブを翻して飛び去っていく。一同はかき氷を持ったまま慌てて少女を追いかけて初めた。

（街中の図書館付近）

「か、完全に見失った・・・」

「はあ、はあ、な、なんだっतんですか・・・？」

一行はしばらく走り続けたために息切れを起こしている。何人かは食べかけのかき氷を食べて体力を回復しようとしていた。

―クスクス・・・

「あ、あそこだ！」

スバルが図書館の屋根の上に乗っていた少女の声をいち早く聞き取り、なのは達に伝える。全員がその向きに振り向くと、少女はまた手招きをしながら飛び去っていった。

・・・こうした追いかけてこが10分ぐらい続き、一行はへとへとになっっていた。

「ぜえ、ぜえ、も、もう動けない・・・」

「ぼ、僕達もです・・・はあ、はあ・・・」

「クスクス・・・」

「あ、いた！あいつ、なんで逃げるんだよ！？」

「ちよっと待ってヴィータちゃん！ここっでもしかして・・・」

少女を追いかけているうちに、一行はいつの間にかあの城にたどり着いていた。少女がその巨大な正門の上でクスクスと笑っている。

「もしかして、シャリシャリ、あたし達、このお城に誘われてたのかな、シャリシャリ」

「アンタまだ食べ終わってなかったんかい！」

ゴゴゴゴゴ・・・

その時、音を立てて門が開き、執事のような服装の白髪の男が歩いてくる。

「お待ちしておりました、元機動六課の皆様。私はこの国の國務大臣のローリングでございます」

フォワード陣はローリングとは初対面なので、少し緊張していた。

「始めまして、フォワード陣の皆様。ここへの道はなのは殿にお聞きになられたのでしょうか？」

「あ、いえ、変な人を追いかけていたらここに・・・」

「・・・と言いますと？」

「黒いフードで、羽がある女の子で・・・あ、ちょうどあそこに・・・」

——こつぜん。

「あるえ？ いなくなってもーた・・・」

「結局、なんだったんだろう、シャリシャリ」

「アンタはさっさと食べ終わらんかい！」

「・・・では、そろそろご案内しましょう」

ローリングの後に続き、一行は城の中へ入って行き、スバルも急いでかき氷を口の中に流しこんでついて行った。その後、全員入ったことを確認した門番らしき二人組によって門は閉ざされた。

（玉座の間）

「フォワード陣の皆様、こちらの方が我等がフォルティス・レイン王国の主、クラウス・バルト・フォルティス・レイン国王様であります」

「え、えーと・・・時空管理局・港湾特別救助隊のスバル・ナカジマです！」

「お、同じく、航空執務官補佐のティアナ・ランスターです！」

「お、同じく自然保護隊のエリオ・モンディアルと・・・」

「キャロ・ル・ルシエでありますっ！」

「よく来てくれた。元機動六課フォワード陣の諸君。我々フォルティス・レイン王家は君達を大いに歓迎する」

その姿と言葉には王としての威厳と同時に、全ての人を愛そうとする深い優しさが感じられた。

「あ、あの・・・私達、エリー王女を探しているのですが・・・」

「む？エリーか？そうだな・・・今ごろ屋上で星空を眺めているのではないか？幼き時より空を見るのが好きだったからな」

―クスクス・・・

「!?!?!?!?!」

いつの間にか先程の黒いローブの少女が一同の後ろにいた。全員が驚いている間に少女は玉座の間の扉を開き、走り去っていく。

「待てえ、待つんやあゝ！」

はやての叫びと共に少女との追いかっこが再び初まった。全員が一斉に出て行つたと思いきや、ティアナがUターンしてこちらを向き、「ありがとうございました!」と一礼して出て行く。

クラウドはそれを小さく微笑みながら見送つた。

（屋上より一階下の階層）

しばらく続いた追いかっこもいよいよ大詰め。
 どんどん上の階層に登っていく少女とそれを追うなのは達。

「フェイトさん、あそこ！」

「あの階段の先は屋上のはず！」

「確か屋上にはエリー王女が居るはずですよね？」

「もう逃がしはしないのです」

視界の先には階段を登る少女の姿。

それを追うのは達も急いで登っていった。

そして、屋上に出て最初に見たものは・・

「・・・綺麗」

満天の星空と明るい満月。

「クスクス・・・」

ミッドチルダとは違う空にフォワード陣が見とれているその時、聞こえて来るのはあの笑い声。

しかし、自分達の目の前にはその笑い声の主のみ。

エリー王女がいるはずの屋上には彼女の姿しか無かった。

「ティア、さっき王様は確かに屋上にエリー王女がいるって言った

よね？」

「ええ、その筈だけど」

「ただ単に屋上と言っても、ここじゃなくて、別の所なのかな？」

「じゃあ、王女はそこに・・・？」

その時、フォワード陣をよそに、なのはが一步前出る。

「追いかけては十分楽しかったよ。だから・・・」

そろそろみんなに姿を見せてくれないかな、エリィ」

「「「え!?!」」」

「それも・・・そうだね」

少女がその身に纏う黒いローブを脱ぎ捨て、背中から翼を広げる。

そこにあっただのは優しそうな少女の顔。

美しい緋色の長髪が夜風を受けてなびく。

月明かりに照らされ、純白のドレスを纏うその姿に、その場に居た全ての者は一瞬だけ何も考える事ができなくなった。

少女はくるとその場で回り、ドレスの裾を両手で持って小さく頭を下げる。

そのとき一瞬だけ、大きく露出した背中に翼が直に生えているのが見えた。

「フォルティス・レイン王国へようこそ」

彼女こそがこの物語の主人公。

その名は、エリー・ミスト・フォルティス・レイン。

——彼女を中心に、今、物語は紡ぎ出される——

——魔導戦記リリカルなのはAnother world——

始まります。

STAGE 1 宵闇の邂逅（後書き）

次回から主人公がぬるぬる喋りますよ？

なのは「なぜ疑問形？」

STAGE 2 翼の姫君（前書き）

一話と二話のこの長さの違いはいい・

スバル「今回は主役も私達もぬるぬる喋るよ？」

なのは「だからなぜ疑問形？」

STAGE 2 翼の姫君

緋色の髪をなびかせた姿にフォワード陣は見とれていた。

髪とは対照的な白い色をした、膝ぐらいの長さの短いドレスが気品を引き立てている。逆光で見えにくいのが、頭にはドレスと同じ色の髪飾りが光る。

エリーが口を開く。

「あなたがあのジェイル・スカリエツティと闘った、元機動六課・フォワードチームのスバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター、エリオ・モンディアル、キャロ・ル・ルシエなのね？ 私はあなた達にずっと会いたいと思っていた」

「私達をご存じなんですか？」

「なのはからあなた達の話は聞いていたわ。あなたが私と同じように・・・辛いことを乗り越えて来たこともね・・・」

そう、スバル達にも悲しい過去があった。

エリーと同じく血の繋がった家族を失ったスバルとティアナ。

クローンであった為に、フェイトと出会うまでずっと非人道的な仕打ちを受け続けてきたエリオ。

内に秘めたる力の為に一族から追放されたキャロ。

機動六課に入隊した後も、闘いの中で様々な苦悩を抱えていた四人。

そんな四人には目の前の少女の姿がより美しく見えた。悲しみを清楚な振る舞いで押さえ付けて今を健気に、必死に生きている・・・そんな印象だった。

「いくら一国の王女の私が相手だからって日頃から敬語使ってたら色々と窮屈でしょ? 『一国の王女』清楚で礼儀正しい』なんて作り物のイメージでしか自分をアピールできないようじゃ王女なんてやってらんないわ!」

「そ、そんなものなんですか?」

「そんなものなの! という訳で、これから私に対して敬語禁止!」

「「ええええええええええええええええ!」?」

「あと、王女じゃなくて名前で呼んでもらうよ?」

「じゃ、これから私達のことよろしくね、エリー」

「順応早っ!? ・・まあいいわ、よろしく」

「僕達、この国やエリーさんのことを詳しく知りたいです!」

「私もですっ!」

「いや、だから敬語は・・・」

「だ、だって、その、僕とキャラはどう見ても年下ですし・・・」

「まあ、確かにキャラはちょっとちっちゃいけど」

「なんですと!? 四年前から1・5センチも伸びたのに! (涙目)」

「おーおー、もう仲良くなってるじゃねーか」

「あれ、ブルース居たんだ?」

「誰ですか?」

SPのような服だがなんだか軽そうな黒髪の男がいつの間にか話に入っていた。

「俺はブルース・ファルガス。この小生意気なお姫様の護衛役を7年前からさせてもらっている」

「ついでに私の兄貴分にもなってもらっているわ」

「ど、どうも・・・」

ブルースを加えて話を進める中で、四人はあることを感じていた。

今、エリーのすぐ近くにはブルースやなのは達という、絆で結ばれた『友達』がいる。自分達も『彼女と友達になりたい』と思い初めている。

四人はふと、フェイトが「彼女が私達を憎むことは無かった」と言っていたことを思い出した。

自分の大切な人を同じ人の手で奪われた時、憎しみを持たぬ者はいないだろう。組織が相手ならば組織全体の人間に憎みが向くだろう。

だが、エリーは違う。

なのはのことを「自分の姉を奪った管理局の人間」ではなく、「自分を助けようとした『高町なのは』という一人の人間」として見ている。フェイトとはやてに対しても同じだった。

これは、かつてスカリエッティによって作り出され、六課の前に立ちはだかった『ナンバーズ』達に対して、「スカリエッティに加担していたから問答無用で軌道拘置所行き」とは言わずに、更正する意思のある者にはそのための教育を受けさせたことと同じであると言える。

そんな事を考えていた時だった。

わしゃっ。

「ひゃっ!?! は、はやて!?!」

「何難しい話してんのや？それより相変わらずエリーの羽は柔らかくて気持ちええなあ」

「あつ、そ、そんな触り方……あう……気持ちいい……／＼／」

突然はやてが背後からエリーの翼を掴み、優しく愛撫し始めた。（乳を揉む要領で）

「で、でも……こんな……みんなの目の前で……あつ、ひゃんっ」

washi yawashi yawashi yawashi yawashi yawa (ry)

[illegible]

エリーが顔を赤くして悶える姿に目を合わせ辛くなった四人が目を背けようとした時。

そこに居るはずのない赤髪に黄色の目の存在がスバルの目に写った。

「お、あつたけ」

わしやわしやわしやわしやわしやわしやわしやわしや

「うあ、ひゃあああああああああああ・・・・・」

「ノ、ノーヴェええええええええええ！？なんでここにいいいいいいいいいい！！？」

「へへ、ついて来ちゃったZ E ♪」

「ZE♪じゃないわよー!!」

ノーヴェ・ナカジマ。

前述の『ナンバーズ』の一人である彼女はスカリエッツィ逮捕後に受けた更正プログラムの後、ナカジマ家に迎え入れられた。彼女の他に、チンク、ディエチ、ウエンディの三人が『ナカジマ』の性をもらい、スバルの実の父と姉であるゲンヤ・ナカジマとギンガ・ナカジマ、そしてスバルと共に暮らしている。

・
なのは達が出払っている今はスバルの実家で留守番中の、なのはの養女である少女、高町ヴィヴィオの面倒を見ていたはずのだが・

ミッドチルダ・ナカジマ亭

「あああああああああああああああ！」

「ど、どうしたっスか、ヴィヴィオ!？」

「ウ、ウエンディ・・・ノーヴェがあ、ノーヴェがああああああー!?!」

ノーヴェが居るはずの布団の中には、ヴィータと同じぐらいの大きさのウサギのぬいぐるみがあった。

フォルティス・レイン城屋上

「ちょっと待てー！ーい！この前お前があれ貸してくれって言ったのはこの為かー！ー！あれけっこう高かったんだぞ！」

ヴィータの持ち物だったようだ。

「なんでノーヴェがここに居るわけ！？」

「あ、ウチが連れて来たんやで。こっちの格闘家相手に一暴れした
いって言うから。因みに、ここのメイドさんは戦うメイドさんで、
日夜戦闘訓練に励んでるみたいや」

「何してるんですか！それって密航ですよね！？」

「あ、ちゃんと手続きはしてきたからご安心」

「そういう問題じゃないと思うよ、ノーヴェ？」

「まったく、フェイトちゃんは固いな」

「あれ、なんかエリーさん達が空気・・・」

「・・・OTL」

ぐぎゅるるるる・・・

「・・・やはは、お腹すいたね」

「こうなるまで私達を走り回らせたのはエリーさんでしたよね？」

「ごめ〜ん（一・一；）」

「そういえばあの時ノーヴェは何処にいたの？」

「こっさり後ろからついて来た」

「ブルース、調理室のみんなに夕食の用意をするように伝えてきて
くれる？」

「了解っと！」

一同は食堂へ向かって歩いていった。

―数時間後

（エリーの部屋）

豪華な晩餐の後、スバル達四人とノーヴェはエリーのアルバムを共に覗いていた。

エリーが記憶をなくしていることを思い出し、少し悲しくなった。

しかし、なくした思い出の中に居るフェンリイや二人を産んですぐ亡くなった母親の写真を見せる姿を見てそれを言うのをやめた。

そんな時、一枚の写真が目にとまる。

それはアルバムの最初にあった頭の赤い雛鳥の写真。

「なんか、色がエリーに似てるな」

ノーヴェに対するエリーの答えはエリオとキャロ以外を驚愕の渦へとたたき落とした。

「あ、それ生まれたばかりの私みたい。記憶がないからよくわかんないけど」

.....

「ええええええええええええ！？これがお前なのかあああああああ
！？」

「あ、やっぱりエリーさんって『神鳥族』だったんですね」

「正確には人間とのハーフなんだけどね。亡くなった母が神鳥族だったの、ほら（母の写真を見せる）」

「あ、本当だ、お母さんにも羽がある！」

「いや、羽がある時点で普通の人間ではないと思いなさいよ・・・」

この世界には他の世界から移り住んできた、神鳥族を初めとした『異種族』が存在している。作者の表現ミスのせいでエリーが普通でないように思えた読者もいるだろうが、人間と異種族の間に生まれたハーフだってこの世界にはたくさんいるのである。

因みにエリオとキャロは、自然保護隊として様々な次元世界の生き物や人々を見てきた中で神鳥族も見たことがあったため、エリーの翼を見て一目でわかっていたのだった。

二人によれば、神鳥族は卵から雛鳥の姿で生まれ、年月を重ねることで今のエリーのような人の形になるとのこと。

アルバムを読み進めていくと、雛の姿だったエリーは急速に成長しつつ、身体を人の形に近づけていた。

やがて身体はすっかり人型になり、翼だった部分は腕となり、かわりに背中に翼が生えていた。

余談だが、神鳥族と人間のハーフが翼を引っ込めると背中には何もなくなったように見えるが、仕組みはミッドの科学では解明されていない。

「実は私、見た目より年食ってるのよ。人型になるまでで7年、それからが17年だから、実年齢は24歳なんだよね」

「そうだったの!？」

「神鳥族とのハーフで女の子ってことは、エリーも卵を生むようになるってことかな？」

「いや、人間の血が混じった時点でお腹で子供を育てるようになるみたい。つまりは胎性に・・・もう、けっこう恥ずかしいんだからねっ／＼／＼／」

そんな話が夜の12時ぐらいまで続いたそうなの。

この後六人は一つの大きなベッドで寝ることになったのだが、翌朝、端にいたキャロとノーヴェが落っこちていたのはまた別の話。

＼突然ですが、作者のオススメ小説紹介＼

この世界に、世界一スケールの大きな鬼ごっこがあった。

その鬼ごっこの名は・・・

r u n f o r m o n e y 逃走中

逃げた時間に応じて賞金を獲得できるゲーム。

但し、ハンターに捕まれば・・・賞金はゼロ！

欲望と恐怖が渦巻く逃走劇を描く、NOS期待のユーザー達を人は、
『逃走中同盟』と呼んだ。

アニメやゲームのキャラクター達による、熾烈を極める逃走劇。果たして、逃げ切る者は、現れるのか！？

スバル「気になった方は今すぐ・・・」

ティアナ「逃走中同盟リーダーの『ワグナー』さんのページへアクセス！」

キャロ「私達も参加したい・・・」

エリオ「でも、それじゃリリカルショーバイさんの僕達へのイメージが・・・」

※リリカルショーバイさんごめんなさい

ゴゴゴゴゴ・・・（城の正門が開く）

四人「あ、あれは！！！！！！」

（ハンターの服とサングラスのエリー、なのは、フェイト、はやてが無表情でのBGMをバックに四人を追いかけて来る）

四人「うわあああああああああああ~~~~~！！（逃走）」

くCM終わりく

翌朝の早い時間。

なのは、フェイト、はやては城内の大会議場でフォルティス・レイ
ンの重鎮達との会議に参加していた。

主な議題は、スターラルガとミネルヴァの過激派の暴動への対策や、
この国の空港に管理局の船の駐留を認める契約を延長するか否かで
あった。

会議が終わった後、三人はエリーがいつも居ると思われる屋上へ向
かう。

「エリー、おはむぐぐうう!？」

「しーっ、静かにしろ。今二人は集中してんだから」

口を塞がれながらなのはがブルースの後ろを見ると、エリーとシグ
ナムが正座で向かい合っている。

シグナムは騎士甲冑で、横には愛刀の『レヴァンティン』が置かれ
ている。エリーの横にはそのドレスには不釣り合いとも言える立派
な日本刀。

二人は刀を持って立ち上がり、一礼する。

エリーから見て右横、シグナムから見て左横にはそれぞれ10本の
ゴザが立てられており、一番奥のゴザは、エリー側は白、シグナム
側は赤い色に染め上げられていた。

スバル達がゴザを挟んで見守る中、二人は鞘から刀とレヴァンティンを抜く。

後ろには何故か和太鼓があり、ヴィータがばちを持っている。

そして、太鼓が鳴らされた。

「でややややあっ！」

「はああああああっ！」

二人は目の前のゴザを一本、また一本と素早く斬り倒していく。

そして、一番奥の紅白のゴザがほぼ同時に斬り倒された。

「引き分け・・・かな」

「うむ。そちらも見事な腕だった」

どうやら速斬り勝負だったようだ。

二人が握手を交わすと、なのは達から盛大な拍手があがった。

その後、全員で斬られたゴザや刀、太鼓を片付けて屋上に戻った一同はエリーの剣術に改めて感心していた。

「シグナムさんに追い付くなんて、かなりの腕前ですね」

「なのはさん達が来る前はノーヴェとあんなに激しく殴り合ってた

のほとんど息切れもしてない・・・」

「ああ、ミッドにもこんなタフな奴はそう居ない」

「ふふっ、こう見えて私って結構アグレッシブなのよ」

「あたし達をあんだけ連れ回しただけでも十分アグレッシブだと思うぞ」

しばらくすると、階段からローリングが登ってやって来る。

「エリー様、そろそろお時間ですぞ」

「あ、もうこんな時間？ 時が経つのは速いわ」

「え、どうしたの？」

なのはが聞く。

「今日はあの広場でスターラルガの穏便派の幹部が演説をする予定なんだけど、ミネルヴァの過激派の襲撃が無いとも限らないから、近衛兵達を連れて警備をする事になっていたの」

「良かったら、お前達も協力してくれないか？」

「分かりました！ みんな、準備して！」

なのは達全員はミッドの魔導師の武器であるデバイスをいつでも起動できるようにした。

「ではエリー様、お送りしましょうか？」

「いや、必要無いわ」

そう言うと、エリーは平然と背中から飛び降りた。

慌ててなのは達が駆け寄るが、エリーはすぐに翼を広げて自力で広場へ向かった。その広場は先日の追いかけっこが始まった場所で、

高層ビルの近くにある。

「・・・護衛なんていらなんじゃ？」

「うるせーな、チクショー」

ブルースとなのは達もすぐに広場へ向かっていった。（徒歩で）

（広場）

演説はすでに始まっており、エリーの後から来たなのは達もすぐに警備を始めた。

空は雲一つ無い快晴で、熱い太陽が照りつけている。

《こちらスバル、怪しい物は無いみたいです》

《こちらティアナ、特に不信な人物も見当たりません》

《こちらエリオ、ここの警備も万全です》

《こちらキャロ、異常ありません！》

《うん、でも油断は禁物だよ？しっかりね》

《《《了解！》》》》

念話で連絡を取り合い、辺りを警戒するなのはとフォワード陣。

なのははエリーと一緒に幹部のすぐ後ろについて警備をしている。

暑さを我慢しつつ、フェイト、はやて、ヴォルケンリッターの四人（今は三人と一匹）、ラインとアギト、そしてブルースが周囲を警戒する。

（何も起きなければいいけど・・・）

エリーはそう思いつつ、ふと近くの高層ビルを見上げる。

—キラッ・・

—バシユンツ！

エリーが光に気づくのと、それが幹部に向かって放たれたのはほぼ同時。ビルの上から何者かがロケットランチャーを撃ったのだ。

なのは達は発射音の後、すぐに上を見上げる。

しかしそれはあまりにも遅すぎた。

気づいた時には弾頭はもうすぐそこにあった。

直撃は免れないと誰もが思った時だった。

バリバリッ！

ドゴーン！

突如として閃く紅い雷が弾頭を撃ち抜き、弾頭は爆散した。

「・・・ギリギリだった」

そこには腕に緋色の電気を纏わせたエリーが居た。
雷はエリーが放ったものだったのだ。

「い、今のは！？」

「彼女の希少技能、破滅の雷（ルインズ・ボルテックス）よ。使い道を誤れば、その名の通り全ての破滅を呼ぶとされているわ」

フェイトが説明している間に、武器を持った多数の市民がそろそろとやって来る。この演説会を潰すためにミネルヴァ派の過激派が本当に来てしまったのだ。

「・・・エリー？」

エリーは幹部をなののはに任せ、市民達の前に出る。

「エリー、下がって！ここはあたし達が何とかするから！」

ティアナが静止するのも聞かずに、言い放った。

「まさか、争いを望まない人々にまで刃を向けるなんてね・・・」

これは本気で私にお仕置きされたいということかしら？」

エリーが髪飾りを外す。

「な、何する気!？」

「あ、そういえばこれをなのは達に見せるのは始めてだね。

・・そうだったよね？」

語りかけた相手はその髪飾り。

当然、髪飾りが答える筈がない。

—ただの髪飾りならば。

『確かにそうでしたね』

「エリオ君！今の！」

「確かに、あの髪飾りから声が！」

「ティ、ティア・・・あの髪飾りってまさか！？」

「・・・デバイス・・・！」

『いやはや、ちょっと黙っているだけ気づかれないとは、私って目

立たない相棒ですね』

「まあ、内緒にしたのは私だけだね。

じゃ、お披露目と行こうじゃないの!」

『システム、オールグリーン。私はいつでもよろしいですよ?』

「上出来よ!」

エリーは白い羽の髪飾りの形をした『相棒』を天空へと掲げる。

——その名は。

「『エンシェントブレイバー』、セットアップ!」

『stand by ready.』

その声と共に、エリーに向かって紅き雷が降り注ぐ。

轟音が辺りに轟き、緋色の光が全てを包む。

光が晴れるとそこには。

トレードマークの緋色と、対照的な空色と白色が入り交じったバリ
アジャケットに身を包み、その翼を広げるエリーの姿。

その手には、柄の中心に純白の宝玉がはめ込まれた、紅い刀身の剣
が握られていた。

STAGE 2 翼の姫君（後書き）

もしかしたら今後もちょくちょくCMが入るかも？

あくまで個人的ですが、そちらも素晴らしい小説ですよ！

STAGE 3 古よりの勇氣と始祖の蒼窮（前書き）

もつと書こうと思った。

だが作者は・・・・・・・・力尽きたorz

この小説のイメージソングは、初音ミクオリジナル曲です。

OPは、「命の翼 listen to my soul」

記憶が無くても強く生きるエリーのイメージにピッタリ、でもガンダム臭120%な曲です。

水樹奈々が歌っていると思います。

STAGE 3 古よりの勇氣と始祖の蒼窮

一同は先日よりも驚いた目でエリーを見ていた。

突如として、エリーの姿は物凄く赤かったり青かったり、そして美しいものに変貌した。

上半身は東洋の巫女に似た形の、深紅と純白に彩られたデザイン。袖は本体にはなく、両肘から両手首にかけて独立したものが括り着けられており、腋が大きく露出している。

下半身では上の緋色ばかりが目立ちすぎないような色合いの、空色のエプロンドレスのようなスカート。

そして極めつけは、刀身の緋色と宝玉の白が特徴的な両刃の剣、『エンシェントブレイバー』と背中 of 巨大な翼の輝き。

「か・・・か・・・かっこいい〜!!」

スバルの叫びと共にフォワード陣となのはがエリーに近づく。

「エリー、こんなの持ってたの!？」

「すごいすごいすごい!カッコ良すぎるよ!」

「落ち着け!」

「あれ、どうしたのエリオ君?エリーさんの腋なんか見て」

「うえ!?!そ、そんなじゃないよ!?!」

子供のようにはしゃぐ(?)なのは達の姿に、市民とフェイト達はあっけに取られていた。

「・・・そういえば、それはどこで手に入れたの?」

「そうね、いずれは見せるつもりだったからね・・・そう、エンシェントブレイバーとの出会ったのは、なのはに助けられた日の夜だったわ・・・」

エリーの表情がしんみりしたものになる。

「知っての通り、私の記憶はあの事件の時に無くなった。だけど、あの日、姉様から17歳(人型になってから10年)のプレゼントをもらったことだけははっきり覚えていた」

「え、それって・・・」

「・・・その日は、最悪のバースデイになったっていうことなの」

『マイロードが私と出会ったのは、マイロードがなのはに助け出された後。マイロードが記憶を無くした後でした。』

マイロードはその時、「今の自分は空っぽの存在だ」と言っていました。

しかし、空っぽなのは起動したばかりの私も同じ事。

当時の私には、フェンリイ様の思いをマイロードに伝える事、マイロードを守る事以外の思考は持っていませんでしたから』

「こうして、私とエンシェントブレイバーは空っぽ同士、共に雨の日も、風の日も頑張って・・・」

『マイロード、どうやら四人には聞こえてないようですよ?』

「「「「・・・（四人とも涙目）」」」」

「にやはは・・・来る途中でエリーの話をした時も泣いてたんだよね」
「ねえ、私は大丈夫だからね!? ああ、今は泣いてる場合じゃ無いのに・・・」

「そろそろよろしいですか、エリー王女」

声をかけたのは武装集団のリーダーと思われる男。
律義に待っていたのだった。

「こんな蛮族どもの味方をするとは、エリー様も元・機動六課も落ちぶれたものよ・・・」

「・・・刃を捨て、ミネルヴァや管理局と話し合いをしようとしている者達を相手にあんな物騒な物を出すなんて、蛮族はどっちよ」

「まさに狼藉者だな。どうする? 必要とあらば、この漢^{おとこ}ブルース、いくらでも手を貸すぜ!」

ブルースが取り出したのは、旗印を模したエンブレム。

「ま、まさか、ブルースさんも!？」

「そのまさかだぜ。エンシェントブレイバーほどの性能や人格は無いがな・・・『アンセスターブルー』、起動!」

直後、ブルースを青い光が包む。

再び姿を現したブルースは、某海賊映画の大海賊のようなバリアジヤケットを纏い、両腕には手の甲に十字の刃を装備した手袋をはめ込んでいた。

「報酬はビールの割引券でどう? 大臣達はあの店のビールが気に入っているんだって」

「身分の低い俺にはそれで十分だぜ!」

二人は改めて目の前の集団のリーダーに向き直る。

「どんな高性能なデバイスであろうと、その技術を伝えた管理局に仇を為すならば、そんな物はガラクタ同然! 温室育ちで世間知らずな王女様にはお似合いですな」

「言ってくれるじゃないの・・・」

「全くだぜ・・・」

『全くですね』

二人はデバイスを構え直す。

「『でも、それは私達に（俺達に）勝ってから言うものよ（だぜ）
《です》！』」

そして、舞踏会は始まる。

——続く——作者のオススメ小説——

幻想の樂園が生まれたその日……

「博麗」は二つに別れた。

自由気ままな幻想の博麗。

テレビっ子でドリル大好きな現実の世界の博麗。

二つの博麗が重なりし時、新たな物語が生まれる。

東方project二次創作

＼外の世界からHAKUREI＼

「想造者」さんのページへ今すぐアクセス！

STAGE 3 古よりの勇氣と始祖の蒼窮（後書き）

EDは、「黒のツバサ」

なんかダークな感じの曲にしようとしたらこの小説のテーマとはあまり関係ないこの曲を選んでしまった・・・

「望むのなら 悪魔にさえもなって 闇に堕ちていく」という歌詞があります、エリーはいずれ、いい意味で闇に堕ちていく予定です。

歌うのは、エリーのイメージボイスの、坂本真綾さんです。
ルナマリア・ホークみたいな感じかな？

エリー「フォルティス・レインの赤は伊達じゃないのよ！」

STAGE 4 紅き天使との輪舞 Aパート（前書き）

ここからは長くなりそうな話はパート毎に分けることにします。

よりイメージソングに合うと思う初音ミクオリジナル曲があったら教えてください。

STAGE 4 紅き天使との輪舞 Aパート

「行くよ、ブルース！」

「御意のままに、ってな！」

始まりの合図は、二人が駆け出すその瞬間。

ざっと見ても、相手は50人以上もの武装市民。

対して、こちらはエリーとブルースの二人。

一見すると二人のほうが圧倒的に不利な状況。

しかし、数での力押しで止められるほどエリーは甘くない事を、ブルースが一番よく知っており、生半可な度胸ではブルースに傷一つつけるどころか、刃を向けることすらままならないということをし、エリーは知っていた。

10人ほどの敵が剣や槍を手に向かって来るが、エリーは怯むこと無く、四方八方からの攻撃を捌き、反撃に移る。

ある者には非殺傷設定にしたエンシェントブレイバーでの一太刀を浴びせ、ある者には鮮やかな体術を利用した攻撃で応戦し、またある者には翼で思い切り殴りつける。確実に敵を一人ずつ、その実力の前にひざまずかせていく。

そして向かって来る残り三人の敵に刃を構え、

「えいっ！やあ！でやあああああっ！」

左下から右上、右下から左上、両手でエンシェントブレイバーを持つての上段からの振り下ろしの三段の攻撃で最後の三人を蹴散らし、それでもまだ余力を残した様子を見せた。

敵の一部は手斧やナイフを持ってブルースを襲う。迫り来る敵達に對してブルースは構え、叫ぶ。

「おらああああ！行くぞおおおっ！！」

その叫びに怯んだ一瞬の隙を突いて懷に入り込み、まずは正面の二人を蹴り倒し、慌てて振り下ろされる斧やナイフを十字の刃で受け止める。

ブルースが拳を握ると、勢いよく回転する刃が斧とナイフを弾き、その隙に体を回転させながら両手の刃で敵を薙ぎ倒す。それをかわした一人も直後にブルースの回し蹴りの餌食となった。

当の本人はこの一連の中で、アンセスターブルーが非殺傷設定になっているかをチラチラ確認するという余裕っぷり。

二人が敵を数多く倒したにもかかわらず、新たな敵がぞろぞろとやって来る。

「まったく、どれだけ居るのかしらねえ？」

「何人居ても、ただ俺達は薙ぎ倒すのみだ！」

二人は敵に向けて刃を構え直し、駆け出そうとする。

「私達を忘れないで欲しいんだけど？」

直後、背後からの桜色の光が正面の敵を吹き飛ばす。

白いバリアジャケットに身を包み、彼女の相棒である杖型のデバイス『レイジングハート・エクセリオン』を構えたのはそこに居た。

「なのは!？」

「私達も一度頼まれた以上、黙って見ている訳にはいけないからね？」

「それでこそエース・オブ・エースだぜ!でも、ここではエリーがリーダーだ。分かってるな？」

「少なくともビル券全員分だけ働いてもらうわ!」

三人は再び身構える。

「よし、私達も見とれてないで行くぞ!」

はやての号令と共に、残りのメンバー（十ノーヴエ）は各々のデバイスを起動させる。

色とりどりの光が溢れ出しその姿をバリアジャケット姿へと変える。

「役者が揃ったって感じになってきたな」

エリーは力強くうなずき、エンシェントブレイバーを掲げる。

「さあ、開戦と行きましようか！」

後半へ続く

〈作者のオススメ小説〉

高町なのはの出身世界ともアナザー・アースとも違う次元の地球。

その世界は、毛の自由と平和を守る一人の男とその愉快的仲間達によって支配から解放された。

その名は、『ボボボーボ・ボーボボ』

「ハジケるぜー！ー！」

彼等がやって来たのは、リリカルでマジカルな世界？
ティアナ「どっちいいいいいいいいいい！？」

ハジケリスト達が世界を破壊する！

ビュティ「ええええええええええええええええええ！？」

ボケが炸裂し、ツツコミが火花を散らし、ミッドチルダを染め上げるハジケの波は、スカリエッティの欲望をも侵食していく・・・！

まさに『バカサバイバー』！

生き残るのは、誰だ！？

『SFロボットアクション』超大作

劇場版『エナジー・バスター』

この冬、公開！

シグナム「違あああああああああああああああああああああ
ああう！」

本当のタイトルはこっち♪

くりりカルボーボ 爆闘！ハジケ大戦く

く 完 く

なのは「終わっちゃったあああああああああ！」

※現在好評連載中です

『sibugaki』さんのページへ今すぐアクセス！

STAGE 4 紅き天使との輪舞 Aパート（後書き）

ティアナ「逃走中同盟の皆様のおCMで走り回ったからどっと疲れた・
・・」

どこで確保されたかは『感想を読む』の、ワグナーさんの感想を
どうぞ。

STAGE 4 Bパート（前書き）

後半になり、戦いはさらに激化！果たして、どうなる！？

そして、5000アクセス突破！

THANK YOU ！

STAGE 4 Bパート

エリーの開戦宣言と共に全員がデバイスを構え、敵に向かおうとする。

しかし、エリーに静止された。

「ここは私に任せて！」

一歩前が出る。

「なのは、フェイト、はやては市民達と怪我人の避難をお願い！ ヴィータ、シグナム、ザフィーラはなのは達の援護を！ 怪我人をその場で治療できるシャルルを中心に動いて！」

「え、私が中心！？」

「シャルル、ここはエリーの言う通りにするぞ」

「あたしらがりっかり守ってやるからな！」

「私も盾の守護獣として、全力を尽くそう！」

「あたしとリインを忘れんな！」

「ですうー！」

「ど、どないしよー？」

「なのは？」

「・・・分かった。正面は任せたよ！」

「・・・ありがとう。フォワードチームとノーヴェは私の所へ！ 奴らを正面から迎え撃つ！」

「だってよ！ほれ、早く早く！」

五人はエリーの高い指揮能力に驚きながら、エリーの元に集まった。

「まず、エリオは左、ノーヴェは右からの敵に備えて！」

「分かりました！」

「ふふ、思いつ切り暴れさせてもらうぜ！」

「キャラは後方からのバックアップを！後ろには十分気をつけてね！」

「は、はい！」

「ティアナは私達の中心で援護を頼むわ！いざとなったらお願いね？」

「できる限りやってみるわ！」

「スバルは私やブルースと一緒に正面からの敵を迎え撃ちに行くわよ！」

「俺達に付いてついて来れるか？」

「当然です！」

「よし・・・行くよ！」

合図と共に、彼女達と敵達がぶつかり合う。

「受けよ、しょうらいせん招雷閃！」

「くらえ！コバルト・スラッシュ！」

「リボルバー・シュートっ！」

エリーの一閃からの雷撃とブルースの青い衝撃波が正面の敵を怯ま

せ、その隙にスバルがローラースケート型の『マッハキャリバー』で懐に入り、右腕の『リボルバーナックル』からの魔力弾を撃ち込む。

「サンダー・レイジ！」

「リボルバー・スパイク！」

エリー達の左右では、エリオの槍『ストラーダ』から地面を伝わるように放たれる電撃と、マッハキャリバーに似たノーヴェのデバイス『ジェットエッジ』によるノーヴェの強烈な飛び蹴りが次々に敵を薙ぎ倒していく。

「キャロ！後ろ！」

「フリードっ！」

「キュークー！ゴゴゴゴゴ（火炎放射）」

二丁拳銃型の『クロスミラージュ』で多方向の敵を攻撃していたティアナはキャロの背後からの敵に気づき、声を掛ける。

ブルースと同じ手袋型の『ケリユケイオン』を使って味方を助けていたキャロはそれを受けてフリードの火炎放射で応戦し、倒したのを確認するとすぐにサポートに戻った。

「どうやら、戦況は私達の方が有利・・・っ！」

ズドドドドド！

「うわわわわ！？危ないっ！」

鳴り響くサブマシンガンの銃声と弾丸が突如としてエリー達を襲う。スバル達は防御魔法を展開し、エリーとブルースもその中に避難した。

「質量兵器・・・この世界にもあったのね」

「そりゃこの世界は地球と似た世界だからな。それに、あれは只のマシンガンじゃない。弾そのものが魔力で覆われていて、ヘタな防御では防ぎ切れない」

「どうするんですか？このままでは・・・」

「大丈夫、あれで纏めて一掃するから！」

『了解。クラッシュャーモードに移行します』

電子音声と共に放たれる光と同時に、エンシェントブレイバーは先端に真っ赤な鉄球をつけた、エリーの身長ほどの長さの棒へ変化した。

「な、なんか強そう」

『見た目だけではないですよ？』

それに答えるように、エリーは大きく振りかぶり、

「でえええええやあああああああああ！」

思い切り振り抜くと、鉄球が先端から外れ、電撃の紐で本体と繋がって敵を薙ぎ払う。

直撃を受けた者はもちろん、電撃の紐に触れた者もビリビリと痺れ、昏倒。

「……ふう」

この一撃により、敵はほぼ壊滅状態になった。

「なのはー！こっちは片付いたよー♪」

「こっちも避難完了だよ！」

「ホント、色んな意味ですごい戦いでした」

「なんだかしばらく見ない間にすごく強くなってる……」

「テストロッサの言う通り、本当に彼女は強い」

「ホンマにビックリや」

「一応、あれから七年くらい修行を重ねてきたからね。それじゃ、後は衛兵達に任せて、私達はお城に帰るとしますか。報酬のビール券は必ず用意するわ」

「ま、またビール券かよ……」

「……あれ！？」

「ノーヴェ？どうしたの？」

「あいつが居ない！エリーの事を世間知らずだとかぬかしたあの野郎だ！」

ノーヴェの言う通り、リーダーの姿がない。

エリーの鉄球攻撃に巻き込まれたのなら、そこに転がっている筈なのだが、その姿が見当たらない。

「まあ、怖じけづいて一人で逃げたんだろうな」

しかし、奴はただ逃げたわけではなかった。

―シュバンツ！

「!？」

バリバリッ！

ズガン！

再び放たれるロケットランチャーの弾頭。

すぐさまエリーに撃ち落とされるが、先程とは違い、次々と飛んて来る。

一発ごとの間隔が長いため、なのはとティアナのサポートでなんとか着弾を防いでいる。しかし、砲撃は次第に激しさを増す。

「クッ、メチャクチャ撃って来たわ!」

「いったい何発あるの!? キリが無い!」

「・・・ん?」

ブルースは何処からか双眼鏡を取り出し、ビルの屋上を見る。

そこには・・・

「・・・あいつだ!」

「転移魔法を使って一人だけあそこに逃げたのね。口の割に情けないこと♪」

「じゃあ、下から一気に追い詰めて・・・」

「いや、そんな事をすれば屋上に出た瞬間に撃たれてオダブツね。あるいは社内にいる人を人質にされるかもしれない」

「え、人がいるの!?!」

「下で俺達がこんな戦いをしてる間にも、あの会社では善良なサラリーマン達が働いてるんだ! 清掃員にでもなりすまして侵入したんだろうな」

エリーは少し考え、一つの作戦を閃く。

「私はフォワードチームとノーヴェを連れて直接屋上へ行く。ブルース達は下から登って来て!」

「考えている時間は無いな。それで行こう! お前らも大丈夫だな?」

なのは達は大丈夫だという表情になる。

黒色のデバイス『バルディッシュ・アサルト』を構えるフェイト、ハンマー型の『グラーフアイゼン』を携えるヴィータは特に気合い

の入った顔つきになっていた。

「よし、突撃〜！」

ブルースを筆頭に、なのは達はそのオフィスビルの入り口に向かって走り始めた。同時にロケットランチャーの狙いがそちらへ向くが、弾頭は簡単に撃ち落とされていった。

「私達も今のうちに！」

「おう！」

「ウイングロード！」

「エアライナー！」

スバル、ノーヴェの二人はビルの周りを渦巻くような光の道を作り出し、屋上に向かって一気に駆け上がっていった。

「僕達も行こう！」

「うん！」

エリオとキャロの横には、キャロの力で巨大な白き龍の姿となったフリード。

二人を乗せ、スバル達の後を追う。

「掴まって！」

「！」

エリーは飛行手段を持たないティアナの手を掴み、その翼で飛び立つ。

エリーのもう片方の手にはいつの間にか赤いショットガンのような形に変化したエンシェントブレイバーが握られていた。

「ま、また変わってる・・・」

「この状況ではアサルトモードの出番ね！」

力強く言うと、こちらに向けられた弾頭を一発ずつ、ティアナと力を合わせて撃ち落としていく。

スバル、ノーヴェ、エリオとキャロを乗せたフリード、そしてティアナを運ぶエリーの四つの標的の前に、敵の砲撃はだんだんまばらになり、撃ち落としやすくなる。

そしてエリーとティアナはいち早く屋上に辿り着き、敵が持つロケットランチャーを撃ち抜く。

「く、くそっ！」

「あ！逃げた！」

「エリー、急ぐわよ！」

二人は部下を連れて下に逃げるリーダーの男を追いかけて行く。残りの四人も屋上に着くと、すぐに後に続いて行った。

（地上13階）

「この反応は、エリーとスバル達の！」

「無事に屋上へ行けたようだね」

「シグナム、ヴィータ、準備はええか？」

「もちろんです、主はやて」

「バッチリだ！」

「よっしゃあ！一気に行くぜえええええええ！」

下ではブルースが、多数の兵となのは達を引き連れて階段をひたすら登り、エリー達と合流した時の為に備えていた。

一味が先に遭遇した方に対して人質を取ろうとしようものなら、もう一方が後ろから奴らを捕まえる。

自分達が先に来たらエリー達に任せ、エリー達が先なら自分達が制圧するという作戦であった。

そして、一味が入ったたと思われるオフィスの一室にエリー達が一足先に入り込む。

案の定、リーダーは人質を盾にエリー達を牽制しようとする。

その横に潜む影に全く気づかずに。

――二分後――

ブルース達は後からその部屋の反対側のドアの前で突入のタイミングを見計らう。

「・・・そろそろ行くか」

ブルースは一気にドアを蹴破り突入。なのは達も後に続いて行く。

「ブルース！なのは！」

「エリー、どうした！？そんなにびっくりした顔して？」

「あいつらは！？」

エリーが指差す先には、あっけに取られる五人の姿。

さらにその視線の先には、ボコボコにされて魔法の鎖で縛られたり
ーダーの男と部下達。

そして、彼らを見下ろす深い青色の髪とサーベルを持つ男。

「あ、あなたは？」

「おお、高町なのはは一等空尉。ちょうどどこいつらを引き渡す相手を
探していた所じゃ」

果たして、突如として現れたこの男の正体は！？

STAGE 4 Bパート（後書き）

今回は後半がグダグダすぎだぜ・・・orz

エリー「大丈夫！誰でもたまにはそんな時はあるから！ほら、ファイト！」

次回はサービスシーンありかもしれない。
でも、過度な期待はしないように♪

STAGE 5 王女のお忍び作戦 Aパート（前書き）

一度書いた文章を編集するとなぜか同じ文章が先の方に現れることがある・・・

なぜでしょう？

STAGE 5 王女のお忍び作戦 Aパート

演説会を襲撃した一味を撃退したのは、突然彼女達の前に現れた一人の男。

その後一味は逮捕され、事件は幕を閉じた。

エリー達は現在、夕日に照らされて茜色に染まる広場に集まっている。

当然、男も一緒に居た。

「いやはや、窓拭きのアルバイトをしていたら何やら外でドンパチやっておったから中に避難したら今度は人質事件とは。やっと落ち着けるわい」

「お前には感謝しないとな。ビール券の取り寄せを一枚増やしといてくれ」

「オッケーイ♪」

そんな話で盛り上がるエリーとブルース、男の三人。

「あのー、あなたって・・・リーフ・アストレイ一等陸士ですよね？」
なのはの一言に驚く一同。フォワード陣は初対面なので首を傾げていた。

「よしとくれ、私は七年前に管理局を辞めておるんじゃない」

（ジジ臭せーな、おい）

と、ブルースは感じた。

「私はかつて己の正義を信じて日夜戦い続けていた。しかし、仲間が例のクーデターに手を貸すような事を知った事は管理局に見切りをつけてやった訳だ」

「例のクーデターって、あの事件ですか？」

「その通り。今は聖王教会で働きながら、時々ゲンヤさんから費用をもらってこの世界を見てまわっている所じゃ」

そこまで言った後、リーフはエリーに向き直り、頭を下げた。

「私の仲間がした事に対し、管理局を代表して謝罪する。
・・・本当にすまなかった」

「・・・顔を上げて」

エリーは急に清楚な表情になる。

「自分のした事でもないのにこうして謝ろうとするような人を責める理由なんて何処にあるの？」

あなたは・・・ただ目の前の事を見つめて生きていればそれでいい。

そうやって、私達は、前に進んで行くのだから」

・・・

「まあ、重い話はやめやめ！さあ、あなたも一緒にお城でパーツとやりましょ！（満面の笑顔）」

（あ、ありやりや・・・？なんか・・・イメージが・・・）

「また台無しやないかーーーーー！い！せっかくしみりして、それでいて暖かい雰囲気が出とったのに！」

「は、はやてちゃん・・・雰囲気の問題じゃ・・・」

「いつものエリーだね」

「そうだな」

「シグナムに同じだな」

「にやはは・・そこがエリーのいい所だけど」

「うむ、確かに」

「ありっ？ フォワードとノーヴェとリインとアギトが空気に・・」

『・・・・・OTL』

落ち込む七人が立ち直った10分後、一同は城に帰っていった。

↓フォルティス・レイン城・中庭↓

フォワード陣とノーヴェはまたもや驚きの光景に遭遇していた。

二回目の晩餐の後、エリーは城で飼っている生物達にエサをやり
中庭へ行っていた。

しばらくしてリーフと五人も中庭に向かい、辿り着いた先にそれは
あった。

目の前には美しい女性のような上半身に大蛇の下半身を持つ、なん
だかゲームに出て来そうな生物。

エリオとキャロが仕事で世界を回る中でこの生物も見た事があり、
スバル達も聞いた事があったので、さほどこの生物には驚いていな
い。

驚きの原因はエリーにあった。

「やっほー♪」

エリーの身体はわずか10センチほどの大きさにまで縮み、その生物の頭の上に乗っかっていた。

服はブルースが用意したミニチュアのドレスで、待機状態で髪飾りの形になっているエンシェントブレイバーは輪ゴムでリュックのよう背負っている。

横では小さなエリーをいじろうと迫るはやてと止めようとするなのはとフェイトが居た。

「なんでこんななんちゃってるの!？」

「・・・もしかして、エリーさんって、ラミア種の生き物に魔力を吸われたりしてませんか？」

「というか、私がご飯になってあげてるんだけどね。あと、この子はラミア種の中の『カーミラ』って種類よ？」

この世界には国だけでなく、様々な生物が他の次元世界から持ち込まれ、こちらの生物と共生している。

このラミア種の他にも、中庭には緑色の身体の小人のような『マンドラゴラ種』や、胴体は人間のようだが手足は鳥そのものである『ハーピー種』などが仲良く暮らしていた。

「ラミア種は他の生き物から魔力を吸いにとって栄養源にする事があるんです」

「む、吸われると縮むのか？」

「生き物によりますが、そうです。でも人が縮むなんて聞いたことがないですね・・・」

「種族によってはそうなるみたいね。城のみんなで実験してみた事があったけど、純粋な人間は縮まなかったわ」

「そ、そっか・・・」

ホッとするティアナ。

「でも吸われてる間は体がずっとぐくビクビクして、その後1分くらいは悶えて動けなくなるわね」

「な、なんかいろんな意味で危ない！」

「しかもリンカーコア持ちの魔導士相手だと吸う勢いが強いからヘタすると悶死する一歩手前になるわ。以前ヴィータが一度死にかけた事があったかしら」

「うそーん！？」

「だってこの子、リンカーコア持ちの方がオイシイって言ってたし・・・」

・・・

「え？言ってた？」

「うん。私、なぜかこの子達の言葉が分かるみたいだから」

“パッポー、パッポー”

（間が空く）

「ええええええええええ！？サラツと言うことじゃないってーーーーー
ー！」

「ど、動物と話せるなんて・・・！」

「えーと、動物なのかな、あれは？」

「ほ、本当ですか！？」

信じられないのも無理は無い。

いきなり動物（？）と話せると言われても信じる方が珍しいと思われるのだが・・・

「本当みたいやで？ホンマに言葉を理解しているみたいや。管理局からは希少技能扱いやけど」

「「「「うそーーーーーん！？」「」「」」

はやての一言に愕然とするスバル達。

「まあ、管理局が王女の力を狙うぐらいだから、破滅の雷以外にも何かあると思ったが、これは予想外だった。戦闘能力としては使えなさそうだが」

リーフだけはいたって冷静だった。

スバル、ティアナ、エリオ、ノーヴェがボー然とする中、キャラが遠慮がちに小さなエリーに近寄る。

「あ、あの・・・」

「ん？」

「もしかして、フリードの言葉も・・・」

「もちろん！それじゃフリード、キャラに何か喋ってみて？」

《キャラ、イツモアリガトウ》

※フリードの言葉はエリーにしか分かりません

「いつもありがとう、だって」

「・・・フリードっ！」

「キュークー！」

エリーを通じてフリードの言葉を聞く事ができたキャラはフリードを優しく抱き寄せ、フリードも嬉しそうに鳴き声をあげる。

なのは達やスバル達、途中から入って来たブルースも共にそれを笑い合った。

・・・その時。

「はっ、マズイ！」

突然エリーは小さな身体で浮き上がり、中庭の中央にある噴水に隠れる。

「ど、どうしたの!？」

なのははすぐさま噴水の後ろへ行く。

そこには、元の大きさに戻ったエリーの姿。足元には破れたミニチュアのドレスとエンシェントブレイバー。

エリーは急いで大きめの下着を穿こうとしていた。

当然、その姿は・・・

「・・・・・・・・」

「なんでキャロは腋にこだわるのかな・・・」

「賑やかやな」

「言ってる場合じゃ・・・（オロオロ）」

慌てふためく一同。

（平和じゃな・・・）

リーフはこの賑やかな触れ合いがずっと続くように、小さく祈っていた。

「エリーって以外と小さいんや（ビリビリビリ）ぎよええええええええええ！」

「ああ、今度ははやてさんが犠牲に！」

・・・ちょっとだけ不安であったが。

Bパートへ続く

（作者のオススメ小説）

その存在は問う。

―『罪』とは何か―

闇に堕ちた存在は探す。

―『罰』の意味を―

血に染まりし星は求める。

―何が『正義』で何が『悪』か、その答えを―

堕ちた不屈が辿り着いた世界の名は、

『テルカ・リュミレース』

そこで出会ったのは・・

―同じく、その『答え』を探し求める者達だった。

L y r i c a l V e s p e r i a (堕ちた不屈と凛々の明星達)

砂原さばくさんのページへ今すぐアクセス！

STAGE 5 王女のお忍び作戦 Aパート（後書き）

はやて「作者も私も決して小さいのが好きな訳やないで！（キリッ）」

主人公紹介（前書き）

主人公紹介です。言うまでもなく主人公紹介です。

※大事な事なので二回言いました。

主人公紹介

エリー・ミスト・フォルティス・レイン

CV…坂本真綾

種族…人間と神鳥族のハーフ

年齢…24歳（鳥の姿で7年、人の姿で17年）

血液型…B型

身長…166センチ

体重…女の子のヒミツ♪

ランク…陸戦B+ 空戦A

魔力光…真紅

身体的特徴…赤毛の長髪、赤い瞳、背中の翼

武装…アナザー・アース式アームドデバイス『エンシェントブレイバー』

本作の主人公。言うまでもなくメインヒロイン。
他の世界からアナザー・アースに移り住んだ魔法大国『フォルティス・レイン王国』の王女。

かつてはフェンリイ・リオという双子の姉や多くの城の人々や民と平和に暮らしていたが、管理局が関わっていたクーデターによって姉もろとも連れ去られる。

その後なのは達によって救出されるが、管理局の実験の影響か、記憶喪失に。その際フェンリイも行方不明となり、彼女の運命は大きく狂わされる。

しかし、直前に姉からプレゼントをもらった事だけはなぜかはっきり覚えていた。

そのプレゼントである今の相棒、エンシェントブレイバーと共に、エリーは今の自分なりに強くなろうと決心する。

性格は時には凜として積極的に、時には清楚になり、時には遊び心を持つ。

でも本当はかなりのんびりした性格。

ルインズ・ボルテックス

レフスキル

破滅の雷と呼ばれる希少技能を持ち、静電気程度から自然の雷ぐらいまでの雷を操る事ができる。

また、魔法生物の言葉を解する能力を持ち、STAGE5Aではフリードの言葉をキャロに伝えた。この能力は万能ではなく、魔力を持たない犬や猫などの普通の動物の言葉は分らない。

STAGE 5 Bパート (前書き)

新キャラ登場なのですよ (＞ワ＜)

因みに、吸われても10分ぐらいで元に戻るらしい。

「と、とにかく、まずは朝食の時間よ！腹が減っては何もできないから！」

エリーは開き直り、五人を連れて食堂に行こうとドアに手を掛ける。

ボタン！

ビッタン！

「はぶうううっ！？」

「エリー様〜！おはようございま〜す！」

「だ、大臣！？」

「おお、スバル殿、エリー様はどちらへ？」

スバルは開かれた扉を指差す。

ローリングが扉を戻すと、そこにはエリーが張り付いていた。そして、目を回して床に倒れ込んだ。

「エリー様、お怪我はございませんか？」

「いや、あなたのせいじゃ！？」

「わ、私の事は気にしないで・・・ぐはっ」

エリーは目を回してしばらくの間のびていた。

――二時間後

（大浴場）

朝食の後、エリーは風呂場でメイド達に翼を洗ってもらっていた。初めは自分でやると言って断るが、翼の根本に手が届かず、結局メイドに頼むのはこの城のお約束らしい。

念入りに翼をこすってもらい、エリーは気持ち良さそうは顔になっている。

「いかがですか？」

「ええ、気持ちいいわ。だんだん上手になってきているわね」

「そうですか？ありがとうございます！」

「ふふ、いつも一生懸命ねえ、あなたは」

その時、一人のメイドがやって来る。

「キララの様子はいかがですか、エリー様」

「あ、メイド長！」

「ええ、いつも新人なりに頑張っているわ。たまに失敗もするけどね」

「あう・・・」

新米メイドのキララ。

新米達の中でもエリーのお気に入りである彼女は、メイド長のリン

の元でメイド修行を詰みながら、主であるエリーにご奉仕しているのである。

ここでは多くのメイド達がエリーに気に入ってもらえるように日夜メイドとしての修行と、『戦うメイドさん』としての戦闘訓練に励んでいた。

キララもその一人である。

「ふっふりん、そんなにそのメイドさんがお気に入りにゃな〜?」

「は、はやて!？」

「私となのはもいるよ」

「にゃはは・・・私達も入ってきちゃった」

なのは達三人はいつの間にか大浴場に入り、朝風呂を楽しんでいた。

この時、エリーは浴室の異変に気づいた。

周りには居た数人のメイド達が顔を赤くしてくったりしている。

嫌な予感がして、キララとリンも身構える。

「気がついたみたいやな?」

「あなた、何をしたの」

「ふっふりん・・・ちよつとばかし胸の発達に協力してやっただけや（わきわき）」

「ウチのメイドに何してくれてんのよー!」

「別に死んだるワケやないで?というわけで、

その胸、もらったあー!」

ルパンジャンプではやてが迫る。

狙いはもちろんエリーの大事な胸（貧乳）。

実ははやては自他共に認める『乳揉み魔』。親しい人達は片っ端からはやての乳揉みの餌食になっていたとか。少女時代にはシグナムの寝込みを襲った事もあるらしい（マジで!?!）。

そんな相手に捕まったら最後、エリーもメイド達と同じように揉み尽くされる事になる。

一応親しい仲ということで揉まれても後ではやての事を許していたエリーだが、タダで揉ませるつもりはない。すかさず横のキララを掴む。

「新米メイドガード!」

「ええええええ!?!」

「私の教え子を盾にしないでくださいー!」

きゅむっ。

「ひゃう!?!」

はやての手がキララの胸を捕らえた。

ゆっくりとその手がキララを揉みほぐs

『ピーーーーーーーーー!』

「エンシェントブレイバー、ナイス!」

『ちょっと危ない光景だったので。それより私を風呂場に持ち込むのは遠慮してもらえませんか? デバイスだって錆びたりするんですから』

「あら、ごめんね♪」

きゅむきゅむ。

「や、やめてくださ、あうんっ」

「いやゝさすがエリーのお気に入りのおメイドさんや。ホントにかわえゝなゝ♪地球のウチらの家に連れて帰りたいわゝ」

『私の仕事がムダになりました・・・OTL』

「よしよし、後で最高級のデバイス用機械油あげるから元気出してね♪」

そんな事を言っている間にはやての手は速さを増していく。

そして、遂にキララは崩れ落ちた。

エリーが傍に駆け寄る。

「キララ、大丈夫!？」

「うふふ・・・うふふふ・・・」

「・・・あれ？」

キララの目がエリーを見ていない。

「私・・・エリー様の生贄に・・・」

「い、生贄!？」

「私、幸せですう・・・」

なぜ喜んでいるのか。

そう、キララにはちよっぴりマゾ気質(?)があり、エリーもそこには手を焼いていたのであった。

「このキララのマゾ気質はなんとかならないの？」
「いや、無理です」

（男湯）

「向こうでいったい何があったんじょうか？」
「わからん」

この城の大浴場は壁を隔てて男湯と女湯に分かれている。完全に仕切られていないため、エリー達の声は男湯のブルースとリーフに筒抜けだった。

因みに、城の人々がお風呂に入る時には風呂場でセクハラがないようにエリーが監視しているらしい。

が、はやての前では全く無意味なのだった。

そんな時、一緒に朝風呂に入っていた兵士達が何かを話しているのが聞こえる。

「最近、ターグル防衛大臣の周りで悪い噂がたってるみたいなんだ」
「ああ、森の魔法生物達をミネルヴァに売っているっていうあの噂か」

「エリー様をロストログアの実験台にした奴らだ。生物兵器を作っているもおかしいと思うんだが、どう思う？」

ブルースがその話を聞こうと彼らに近寄ろうとする。

「それってどういう事かな？」

壁の向こうからエリーの声が響く。

「エリー様！入っておられたのですか？」

「ええ。さっきはやてが私の羽根を洗ってくれた子をクタクタにしちゃったからお仕置きをした所よ」

女湯でははやてが目を回して浴槽に浮いていた。

エリーに蹴り飛ばされて浴槽の底に頭をぶつけたらしく、大きなコブができている。

キララも浴槽に放り込まれて目を覚ました模様。

「とにかくその話、詳しく聞かせてもらえるかしら」

——数分後

く玉座の間く

エリーはクラウドの居る玉座の間にブルース、リーフ、なのは達を集め、先程の話を兵士達から詳しく聞いた。

「父様はどう思う？」

「うむ。いくら噂とはいえ、無視できる話ではないな。しかし証拠がなければ何もできん」

「せめてそのターゲット防衛大臣の身の回りを調べられればいいんだ

けど・・・」

「！」

後ろに控えていたキララはティアナの言葉から何かを思い付き、急いで外に出る。

戻って来たキララはエリーの予定表を持ち、必死である一点を指差していた。

「あ！そういえば今日は夕方からローリングと防衛大臣の会談に同席するんだった！」

「なるほど！そこで奴の周りを調べるって訳か！」

「よく思い付いたのう」

「エリー様のご予定を把握するのはメイドとして当然なのですよー」

「この日と重なったのはたまたまだけだね」

その後、会談があるターグルの官邸へ出発する時間帯になる直前まで、エリーとなのは達の作戦会議は続けられる事になった。

そんな中、電話が鳴り響く。最新式の電話なのでデジタル液晶があり、そこには電話の相手の番号が表示されている。

エリーはすぐさま電話を取る。

『もしもし、エリー王女は居るかな？』

「あら、ジェレミイじゃないの！どうしたの、いきなり？」

『おお、本人か！ちょうど良い所に！また私が開発した生活用品のテストを頼みたいのだが』

「ええ、いつでも構わないわ。それより・・・」

『ん？』

「実は、あなたに協力を頼みたい事があるの」

『分かった。すぐに準備する』

「詳しい事は後で連絡するわ。それじゃ」

ガチャン（電話を切った）

「今のは？」

「私の古い友人の『ジェレミィ・クラスター』よ。彼女はクラスター財閥の令嬢で、私とはよく合っていたし、お城に来る事もあったわ。私が記憶をなくした後も今まで通り接してくれていたわ」

「エリーと名前で呼び合う友達なのはやブルースだけじゃないんだな」

「今のなのはとヴィータみたいなものよ」

「んなっ！？なぜあたしなんだ！？フェイトじゃないのか！？」

「・・・／／／／」

なのはとヴィータが落ち着いた後、またもや空気になっているスバル達も会議に参加し、約2時間はそれが続いた。

（タワーグル防衛大臣の官邸前）

「ジェレミイ、どう？」

「少なくとも地上には怪しいものはないようだが、よく警戒しておいたほうがいいかもしれない」

翡翠色の髪を持つエリーの友人、ジェレミイ・クラスターは何かの機械で官邸を調べながら言う。

「それじゃ、手筈通りに頼むわよ」

「わかったよ！」

「任せな！」

「私もできる限り力を貸そう」

なのは、ブルース、リーフが力強く答える。

一方、キララは、

「キララ、エリー様をよろしくね」

「任せてください！」

メイドの仲間達に励まされつつエリーの付き人としてついて行く準備をする。

その時、リンがキララに水色のペンダントを差し出す。

「私からのお守りだよ。持って行きなさい」

「は、はい！」

キララはペンダントを首に掛け、エリーの横につく。

「では、行きましょうか、エリー様」

「一緒に真実を暴きましょう！」

「OK! 行くわよ！」

キララとローリングを連れて、エリーは扉を開く。

王女のお忍び作戦が、今、始まる。

STAGE 5 Bパート（後書き）

警告が来そうでちょっと心配になる今日この頃。

なにせはやてのセクハラ&ちよっぴりマゾなメイドというダブルパンチが今回の話にありましたから。

今の所残酷描写はまだありません。

STAGE 6 襲来! 戦慄の改造ライガー Aパート (前書き)

お待たせしました。第六話です。

目指せ、5万PV!

STAGE 6 襲来！戦慄の改造ライガー Aパート

「ようこそいらっしやいました、エリー様、ローリング國務大臣」

三人を待っていたのは髭を蓄えた男。

彼こそが今疑惑をかけられているターゲット防衛大臣である。

「どうも、本日はよろしくお願いします、ターゲット防衛大臣」

「いえいえ、こちらこそ。さあ、エリー様もおかけになってください」

こうして会談が始まった。

～裏口～

「見張りは一人か・・・」

「どうしますか？」

「まずは私が奴を眠らせる。後からついてくるのじゃ」

タイミングを見計らい、リーフは隠れていた物陰から飛び出し、見張りに向かっていく。

その手にはリーフ愛用のサーベル型のデバイスが握られている。

見張りはリーフに武器を構える間もなくその一撃の前に倒れ伏した。

見張りが気絶したのを確かめ、ブルースとスバルが後に続く。

「ふふ、どうじゃ、我が刃『フォルトレイヤー』の味は？」

「いい腕だぜ。さて、この嚴重な警備をなんとかする事を考えようぜ」

扉を覗くと、中には多数の警備員が見える。

二人は裏口からの侵入を諦め、スバルと共にどうするかを考え始めた。

その時、スバルが扉の上にある物を見つけた。

「あそこなら・・・」

「お？」

「なるほど、そんな道があったか」

三人はスバルが指差す先にあるダクトの入り口から侵入する事となった。

スバル達の動きはすぐさまなのは達に伝えられる。

待機状態のエンシエントブレイバーの点滅によってエリーにも伝えられ、作戦開始の時間が告げられた。

（会談の会場）

「・・・ううっ・・・」

なんの前触れもなく、エリーは頭を押さえる。

「エリー様！？どうなされました!？」

「・・・なんだか、気分が悪いわ」

「今日は夕方になっても蒸し暑い日ですからねえ。誰か、エリー様を医務室へご案内してさしあげなさい」

キララと一人の使用人がエリーに肩を貸し、医務室へと連れて行く。医務室の前に三人が辿り着き、使用人が扉を開けてエリーを中に入れようとした時、

「はい、お疲れ様♪」

ズビシッ！

エリーの手刀が使用人の意識を飛ばす。

キララは倒れた使用人の体を受け止め、エリーと二人で医務室の中へ運ぶ。

医務室に居た医師もその様子に驚いている間にキララの頭突きを受けて昏倒。

他に誰も居ないことを確認し、二人は窓の鍵を開けた。

「ここまではエリーの作戦通りだね」

「ええ。ティアナ、しばらくここは任せたわ!」

「合点!」

幻術魔法によってエリーと同じ紅い髪と瞳になったティアナが窓の

外から医務室に入り、ベッドに入る。

なのはも中に入り込み、バリアジャケットとレイジングハートを準備する。エリーもエンシェントブレイバーとジャケットを展開し、キララとなのはを連れて医務室の外へ。

「さあ、潜入開始よ！もうしてるけど」

ティアナをエリーの身代わりとして残し、三人は官邸の内部の探索に向かった。

（倉庫）

三人が探索を始めてから5分経過した頃。

「エリーさん、なのはさん！」

「エリオ！キャロ！」

「ふう。天井裏から潜入するって大変です」

「お疲れ様ですよ」

エリオとキャロもエリー達と倉庫にて合流。

五人は怪しい物がないか倉庫の中を調べ始める。

そんな中、フリードが何かに気づき、キャロに呼びかける。エリー達も駆け付け、キャロの足元の床を見た。よく見ると一箇所だけ色の違う床があり、手で掴めそうな窪みが目に付く。

「んゝ・どれどれ」

パカッ

「「「!?!」」」」

特に何も考えずに平然とそれを開けるエリー。
その中は空洞になっており階段らしき物が見えた。

『エンシェントブレイバー、そちらの意見を聞きたいのですが、いかがでしょうか?』

『やはり、ここには何かあると思われます。見られると困るものが』
「レイジングハート、すっかりエンシェントブレイバーと仲良くなつたね」

『デバイス同士の付き合いは大切な事です。そういえば、どうしてエリーはエンシェントブレイバーの事をマスターに黙っていたのでしょうか?』

『マイロードが私を手に入れた事が、必要以上に様々な事の中身を知れたがる管理局の連中に知られたらいろいろなさうさう事になりますから。アナザー・アース式デバイスは元々、ミッドチルダの技術の応用でしかないのに』

「まあ、難しい話は後にして、先へ進もう」

そう言ってエリーは先頭に立ち、階段を降りて地下へと進む。

そして、そこで五人が見たのは・・・

・・・ミネルヴァの研究所だった。

自分への忠誠心が強いはずのターグルの官邸の地下にこんな施設があることに驚きを隠せずにいる様子を見せつつも、エリーとなのは達は共にさらに先へ進む。

（とある部屋）

「これは・・・!？」

「こいつはひでーな」

「うむ。正気の沙汰とは思えぬ」

ダクトから地下の研究所に一足先に侵入したブルース、リーフ、スバルがその部屋で見たのは、いくつもの水槽に浮かぶ生き物。

いや、それはもはや生き物とは呼べない形になっている。おそらくは実験台にされた魔法生物達の成れの果てだろう。その中にはまだうめき声のような声を出しているものも居た。

「エリーにはここを見せない方が良からう」

「ああ。きつとエリーにとっては辛いだろうからな」

その時、マツハキヤリバーがスバルに呼びかける。

『この近くに複数の魔力反応を感知。敵ではないようです』

「この反応は・・・なのはさん？」

「あっちもここを見つけたのか！」

「よし。我々も行こうか」

三人はそれぞれのデバイスにこの部屋の中の画像を証拠として保存し、エリー達を探しに向かった。

（メイン実験室）

「グルルルル・・・」

今エリー達の眼前に居るのは、実験台と思われる大きな白い獅子のような生物。エリー達を警戒しているようだ。

そして、獅子は咆哮をあげて威嚇する。

「なんだか、今にも食べられちゃいそう・・・」

「キュゥ・・・」

「なぜこんな所にライガーが・・・」

「エリオ、キヤロ、キララちゃん、気をつけて！」

「はうわ！？私、そんなに子供に見えますか！？」

たじろぐ四人をよそに、エリーはライガーの前を立ち、手を出す。

「・・・もう大丈夫。怖がらなくていいのよ。今私達が助けるから」

「・・・グルル・・・」

獰猛なライガーだったが、エリーが近づくと安心した様子を見せる。

エリーには魔力を持つ生物、魔法生物達の言葉を解する力がある。

ライガーをいとも簡単に静めることができたのも、この力の成せる業である。

「あれっ？なんですか、これ？」

エリーがライガーを手なずけている時、キララはライガーの四つの足と背中に何かの機械が取り付けられているのを見つける。

「なんの機械でしょうか？」

「よくわからないけど、いい物ではなさそうだね」

「ええ。なんとかしてこの子連れて帰って、これはずさないで。」

この機械とこんな狭い場所に居るせいでストレスも溜まっているみたいだし」

「んっふっふ。申し訳ありませんがあなた方をここから逃がす訳にはいきませんな、エリー様」

「!?!? あなたは、ミシヤス教授!?!」

突然、エリーにミシヤス教授と呼ばれた眼鏡の男が実験室の奥から現れる。

「せっかくのいい実験台を勝手に持ち出してもらっては困るんですよ」

「なぜこんな事を!?!? あなたもエリー様と同じくらい魔法生物達が好きだったんじゃないのですか!?!」

「私がいつそんな事を言いましたっけ? 魔法生物など、我々研究者にとってはただの実験台に過ぎないのですよ」

「っ・・・!」

「それにしても防衛大臣は何をやっていたのでしょうかね。よりによってエリー様にここがばれるとは」

この発言にエリーは疑いを持ち始める。

魔法生物をミネルヴァに売っていた疑いをかけられていたターゲットと大学の教授であるミシヤスの間に何らかの繋がりがあったという事は何一つ聞いていない。

だが、それはすぐにミシヤス本人の口から語られた。

「頭の固い奴だったが、私の大学にいる娘を殺すなどというくだらない冗談を真に受けて私に色々協力してくれましたよ。まあ、今となってはもうあの男は用済みですがね」

「まさか、防衛大臣を殺すつもり!？」

「当然です。私の事を感じられるような者はもう必要ありません。それに、奴の死によってこの国の自衛力がガタ落ちになるのは、エリー様の力を未だに狙っている管理局には都合の良い事。そうでしょう? 高町なのは」

ミシヤスはなのはに向かって不敵な笑みを浮かべる。

「ふざけないで! 私達はエリーの力が欲しくてここに来た訳じゃない!」

「そうです! 私達はただ、エリーさんの事を知りたいだけです!」

「キューアー!」

「それに、管理局の全ての人間がエリーさんの力を欲している訳じゃない!」

なのはの怒りを込めた声にエリオとキャロも続く。そしてエリーとキララはそれを聞き、すぐにまたミシヤスを睨みつける。

「さあ、おとなしくお縄についてもらうわ!」

「エリー様の目の黒いうちは悪い事はさせません!」

身構える五人に対し、ミシヤスは依然として不敵な笑みを浮かべる。

「フッフ・・・あなた達は自分の命を心配した方が良いでしょう？」

カチッ

「グガアアアア！」

「うわっ!？」

何かのスイッチが押される音が研究室に響くと、突然ライガーが暴れ出し、エリーに牙を向ける。

「一体何が!？」

「まさか、この機械で・・・」

五人はライガーの足と背中に取り付けられている機械に目を向ける。機械は先程のスイッチによって起動し、ミシャスのリモコンによってライガーの身体を操っているようだ。

「フッフ、ご安心を。防衛大臣にもすぐにあなた達の後を追わせてあげますよ。彼の娘もろともね！」

さあ、行きなさい！コード097号！奴らを皆殺しにしろ！」

コード097号と呼ばれたライガーがエリー達に迫る。一歩ずつ、

確実に五人を追い詰めようと歩いて来る。

「くっ！なのは、一旦退くわよ！」

エリーに呼びかけられ、なのは達は障壁を展開する準備をしつつこの研究室の扉から出ようとする。

だが・・・

「キララ、早く！」

「あ・・・あ・・・」

キララは既に腰が抜けて立てなくなっていた。

しかし、ライガーを操るミシャスはそんな様子のキララにも容赦はしない。

ライガーは操られるがままに飛び掛かり、その爪を振りかぶる。

「キララーーーっ！」

エリーの叫びと共に、無情な爪が振り下ろされようとする。

「あ・あ・あ」

キララの恐怖はその一瞬で限界に達した。

「いやあああああああああああああああああああああああ
あああああああああつ！！！」

— B
パートへ続く

STAGE 6 襲来！戦慄の改造ライガー Aパート（後書き）

悪役の方が台詞が多い気がする今日この頃。

さすがに毎回CMやったら力尽きましたorz

果たして、キララの運命は！？

STAGE 6 Bパート(前書き)

キララ

「リリカルなのはA's SPORTABLE第二弾発売決定なのです
よ〜(＞ワ<)」

ブルース

「＼めでてえ／」

エリー

「なんでStrikersで作らないのよー！」

リーフ

「自力で飛べないのがいるからじゃないか？」

自力で飛べないティアナとエリオ

「・・・OTL」

スバル

「こうなったらマジカルバトルアリーナのはさんで満足する
しかない！」

キャロ

「それ同人ゲーム！」

※サークル『領域ZERO』制作のいろんなアニメやマンガの魔法
少女が戦うゲーム

STAGE 6 Bパート

その瞬間、全てがスローモーションに感じられた。

白い獣がキララに爪を振り下ろそうと飛び掛かる。

キララはただ怯える事しかできない。

なのは達は思わず目を瞑る。

エリーの伸ばした手も、もう届かない。

今、一つの命が露と消えようとしていた。

「いやあああああああああああああああああああああ
あああああああああつ!!!!」

ミシャスの凶手に操られるライガーの爪が、

泣き叫ぶキララの身体を、

容赦なく切り裂いた・・・

・・・かに見えた。

『Emergency.』

「・・・!?」

電子音の音が響き、ペンダントから青く激しい光が放たれる。

同時に、キララの周りに激しい吹雪が巻き起こされ、キララの足元を中心に床が凍り付いていく。

吹雪は激しさを増し、遂には目の前のライガーの体をも氷に包み込んでいった。

「・・・キララ？」

吹雪が止むと、そこには無傷のキララの姿。

その服はいつの間にかメイド服から、ほんのりと青みがかった白色で所々に青いラインが刻まれたドレスに変わっていた。

エリーは傍に駆け寄り、その身体を抱き寄せる。

「キララ・・・！良かった・・・！」

「うう、エリー様、苦しいです」

なのは達は安堵の表情を浮かべ、二人に駆け寄る。

キララがその身に纏うドレスは魔力を宿し、冷たい風がキララを守っていた。

なぜならそのドレスは・・・

「バリアジャケット？」

だったからである。

「ほええええ！？私、デバイスなんてもらった覚えは・・・」

・・・

「・・・ハッ！？」

―潜入前―

『私からのお守りだよ。持って行きなさい』
『は、はい!』

「・・・まさか、メイド長からもらったこのペンダントが!?!」

『お気づきになりましたか』

電子音声はキララのペンダントからだった。

「どうしてメイド長がこれを・・・」

「私が説明するわ」

エリーが答える。

「そのデバイスは元々、リンさんのために作り出されたもののなの。
でも、リンさんはそれを自分の物にしようと思わず、自分が認めた優秀なメイドに与える事にした。そして、リンさんはあなたを選んだ」
「でも、どうして新人の私なんかに?」

「それは、あなたが努力家だったからよ」

「へ?」

「あなたは一人前のメイドになるために人の何倍もの努力をしてき

たでしょう？リンさんはそれを認めたから、キララにそれを渡す事にしたのよ。従順なる従者という名を持つデバイス『ヴァレットミーク』を」

キララは待機状態でペンダントになっているヴァレットミークに目を向ける。

すると、ヴァレットミークがキララに呼びかけてくる。

『私は全力であなたをサポートします。これからよろしく願います、マイロード』

「はい。私こそ、よろしくお願いします」

丁寧に挨拶をしているようだが、今のキララは玩具をもらった子供のような様子だった。

「よし、早速起動です！」

「あらあら、はしゃいじゃって、メイドなのに」

「・・・僕もちっと見てみたいかも」

「キャロも見たいのかな？」

「・・・（コクン）」

エリー達四人が期待する中、キララはヴァレットミークを構える。

「よし、エリー様がいつもやってるみたいに・・・セットアップ！」

『OK. It's work time.（さあ、お仕事の時間です）』

掲げたペンダントが輝き出し、青白い光がキララの手を包み込む。

そして、ヴァレットミークがその姿を現す。

それは、中心に水色の宝石が埋め込まれた、雪のように真っ白な簪だった。

「へえ、とってもステキじゃない!」

「・・・なんだかメイドっぽくていいかも!」

「ホントだ、すごいよ、キララ!」

「わあ・・・綺麗・・・」

「・・・えへへ」

賞賛を浴び、照れるような顔を見せるキララ。

「グガアアアッ!」

が、ライガールの雄叫びがそれを吹き飛ばした。

ライガーは暴れながら少しずつ氷を破っている。

「え、えーっと・・・エリー様、こういう時は・・・?」

“ パッポー、パッポー ”

「逃げろー！ー！ー！」

五人は全速力で扉の外へ走る。

「フッフ、逃がしませんよ、エリー様」

ミシャスの声が響くと同時に、ライガーは遂に氷を完全に砕き、エリー達を追いかけた。

（通路）

「スラッシュスレッド！」

「カラド・ボルグ！」

「これでもっ・・喰らえええええっ！」

一方のブルース組は研究所の通路内で見張りに見つかり、それを蹴散らしながら先に進んでいた。

ブルースは気合いを込めた一撃で圧倒し、リーフは素早い突きの連打で道を開き、スバルは戦闘機人である自分のIS『振動破碎』インヒューレントスキルで敵の武装を破壊しつつ二人をサポートする。

戦いも佳境に近づく中、エリーの心配をするスバル。

「エリー、大丈夫かな」

「平気じゃろう。なんてったってあの高町なのはがついておるんじゃないから」

「そうさ！あいつの事だからきつと、静かにしてなきゃならん状況でも賑やかにやってると思うぜ」

「うわあああああああああー！ー！」

「そうそう、あんな感じで………
………って、なにいいいいいいいい！?」

ブルースの視線の先には、恐怖を表にした表情のなのは達とキララを引き連れて一人だけ冷静な顔で走って来るエリーと、それを追う白い獣がいた。

「なんつーモノを連れて来てんだよ!」

「連れて来たくて連れて来た訳じゃないわよ!」

「いったいどうした事じゃ!？」

「なのはさん、そっちで何があったんですか!？」

「スバル、説明は後!」

「今は僕達と一緒に走ってください!」

「ライガーが、ライガーが襲ってきますー!」

「キュクー、キュー、キュルルー! (完全にパニック状態のフリード)」

すぐさま一同は出口へと走り出す。しかし、ライガーの速さは並大抵のものではなく、次第に距離が縮まっていく。

「これ以上、エリー様には近づけさせません!」

キララは振り向き、大きく息を吸い込む。

そして、吹いた。

ビュオオオオオ・・・

息は冷たい風となり再びライガーを凍り付かせる。

「なっ!？」

「今のうちに逃げましょう!」

キララの行動に驚きつつ、一同はエリー組が入って来た入り口へ急ぐ。

そして地上に戻り、入り口を閉じた。

「さすがにこの小さい入り口までは追ってこれないはずです」

「キララちゃん、あなたはいたい・・・」

「ああ、この子は・・・」

「それより、まずはここに居る連中を避難させないとだぜ」

「うむ。ティアナにも連絡せねば」

〈会議室〉

「・・・であるからして、これを実行に移せばわが国の防衛体勢は非常に強固なものとなるでしょう」

「おお、素晴らしい提案ですな」

ターゲットの命に危険が迫っていることも知らず、会談はまだ続いている。

そこに、ようやくエリー達が駆け付ける。

医務室に居たティアナもすでに合流していた。

「エリー様、もう良いのですか？」

エリーは何も言わず、ブルースのアンセスターブルーからエンシェントブレイバーに転送されていた画像を見せる。

どよめきが起こる中、観念した様子を見せるターゲットにエリーが近づく。

「ミシヤス教授が全部ペラペラと話してくれたわ。あなたを脅迫して、森の生き物達を実験台として売らせていた事もね。でも、もう苦しむ必要はないわ」

「・・・エリー様、私はどうすれば・・・」

「・・・今はここに居る全員を避難させて。奴に皆殺しにされる前に。

この国の人々の命を守るのが防衛大臣の仕事でしょ？」

「・・・畏まりました。私ターゲット防衛大臣、全身全霊をもって、職務を全ういたします！」

ターゲットの姿勢にエリーも微笑みを見せる。

「フッフ、詫びの必要も職務に着く必要もない！」

避難を始めようとした一同の元に、不敵な声が響く。

「ミシヤス！私はもう貴様の思い通りにはならん！」

「だったらどうしたと言うのだ？」

ミシャスの後ろに現れる、白い影・・・

「貴様にはエリー様や高町なのはもろとも、ここで死んでもらう！」

「グガアアアアア！」

「転移魔法で連れて来たのね・・・」

「くっ、早く逃げて！」

エリーとなのははスバル達に言うと、アサルトモードのエンシェントブレイバーとレイジングハートを向け、魔法を起動させる。

くうけつだん
「空結弾！」

「レストリクトロック！」

なのはの力によって発生した輪状の光がライガーの足と胴体を固定し、その上からエリーが放った電撃の網が包み込む。

その隙に二人も官邸の出口から脱出した。

「これで全員ですか？」

「ええ。キララ！」

「はいですっ！」

キララは二人が外に出た事を確認すると、扉に両手を触れる。

ピキピキピキ・・・

扉は一気に凍り付き、さらに分厚い氷の壁が重なった。

キララはこれで一安心という表情で戻って来る。

「さすが氷の妖精。リンさんが認めただけあるわ」

「にへへへ（エリーに頭を撫でられている）」

「・・・・・・あ？」

「よ、妖精!？」

「あれ？　そういえば言ってなかったっけ？」

「キララ、あなたホントに妖精なの!？」

「はい、『ジャック・フロスト』って呼ばれてるんですよ」

「なんか、妖精って手の平に乗るほど小っちゃいイメージがあったけど・・・」

「終わったらかき氷作ってくれない？」

「アンタは色気より食い気って訳なのね」

バゴーン！

キララが妖精であつた事を知って盛り上がる中、それを掻き消すかのように氷が砕かれる。

「なっ！？」

「そんな～！？私の氷の壁がいとも簡単に～！？」

現れたのは狂気の笑みを浮かべるミシャスと、

その操り人形となって咆哮をあげる白い獣だった。

「フハハハハ！一人たりとも生きては帰さんぞ！」

「グガアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

「戦いは黄昏時を迎えた。」

「続く」

STAGE 6 Bパート（後書き）

次回、ミシャスとの決着！

―そして、物語は本当の始まりを迎える。

番外編 エリーとなのはのクリスマス in 海鳴市(前書き)

二日遅れのクリスマス番外編です。

ミシャスとの決着はまた今度 m () m

番外編 エリーとなのはのクリスマス in 海鳴市

〈第97管理外世界『地球』海鳴市〉

「なんだか久しぶりかも」

高町なのはとフォワードチームはある時、なのはの故郷を訪れていた。

こちらはアナザー・アースとは違い、クリスマスを迎えている。

「まさか、こんなに早くクリスマスを経験することになるとはね・・」

「あっちはまだ夏まっさかりだったのに」

「次元がずれていれば季節もずれるという事か」

アナザー・アースの魔法大国の王女エリーとその護衛役のブルース、ある事件でエリーと知り合った元管理局員のリーフもやって来ていた。

「やっぱりなのはさんの故郷は綺麗な所だね」

「ええ、魔法がなくても美しさがあるから」

以前とは違い、任務ではなくプライベートでやってきているために、スバルとティアナはこの冬の空を早くも満喫している。ちなみにスバルは冬だというのに三段重ねのアイスを食べていた。

その横でエリオとキャロはとある格好をしたキララを見ていた。

「似合いますか？」

「腋が寒そう・・・」

「ちよっとキャロ、なんかおかしくない！？エリーさんのバリアジヤケット見てから腋にばかりこだわってない！？」

「私は氷の妖精だから、これくらい平気ですよ」

キララはやや露出のある、サンタクロースの格好をしていた。

クリスマス用に城の倉庫にしまっていたものを持って来たらしい。

キララが凍える様子を見せないのは、キララが怒ると人間一人を凍死させてしまうほどの力を持つといわれる氷の妖精『ジャック・フロスト』だからである。彼女にとっては、冬は天国なのだ。

そんなこんなで、一行はなのはの家族が経営している喫茶店『翠屋』で楽しいひと時を過ごしていた。

店内ではまだサンタ姿のキララが手伝いをしている。

新米とはいえ、彼女は一国の王室のメイド。丁寧な接客で客の視線を独り占めに使っていた。

「いい働きっぷりだ」

「やっぱそう思う？」

「確かに」

「そりゃ、私にいつも尽くしてくれる頑張り屋だからね、キララは」

「是非ウチの正式な店員になってもらいたい所だ」

士郎の一言に反応し、その背後に迫り来る、黒い影……

「うふふ、キララちゃんをどうしたいって? (黒笑)」

「・・・い、いや、なんでもない（汗）」

黒い笑顔で迫るのはなのはの母、高町桃子。

ボディーガードとして世界を飛び回っていた強者である士郎も、女房にはかなわないらしい。

この光景に、アナザー・アース組は高町家の力関係を目の当たりにした。

←こんな感じ

桃子>>>>>>>>>>>>士郎>恭也||美由紀>>>>越えられ
ない壁>>>>>>>>なのは

「うう．．．私、やっぱりエリーにそんな下に見られてるんだ．．．」

「別にそんな訳じゃ・・」

＼高町家の屋根の上＼

その後、一行はなのはの実家で一晚泊することになった。

空を見るのが好きなエリーはなのはとキララを連れて屋根の上に上がっていた。

現在、道場ではリーフと士郎が一戦を交えており、他のメンバーはそれを観戦している。

「私の国の冬もいいけど、こっちの冬もとっても綺麗だわ」

「・・・私の世界の事、気に入ってくれたんだ」

「当たり前じゃない。景色は綺麗だし、人々は暖かいし・・・」

「妖精にとっては最高の環境ですし」

そんな様子のエリーを見て、なのははふとあの事件を思い出した。

あちらの世界でこんな風にクリスマスを過ごしていたであろうエリーの姉は、自分と同じ管理局の人間と、彼らにそそのかされた一部の者によって、行方が分からなくなった。

そしてエリーはその姉と、姉と過ごした思い出までも奪われた。

それでも笑顔を見せようとするエリーの姿を見て、なのはは少し悲

しくなった。

「・・・・・・」

ずいっ（思い切り顔を近づける）

「わ!？」

「また私の事を思い出していたのね？ そんな顔してたら丸分かりよ？」

なのはのその感情はエリーにはお見通しだった。

「私自身も生きていく中で悲しい事はいっぱいあったから、人が悲しんでいる時の感じがよく分かるの」

「・・・・エリーは・・・・辛くないの？」

エリーは首を横に振り、答えた。

「私はあの日から決めた。悲しい事や辛い事があれば、それはできるだけ自分の力で乗り越えるって。」

自分の辛さを他人に伝えて同情してもらっているようでは、結局、何も解決しないまま終わってしまう。

私は自分の運命に潰される程弱い女じゃない。

だからね、なのは・・・」

——私は、大丈夫だよ

それは、小さく、優しい笑顔だった。

「・・・エリー・・・」

すると、エリーがさらに顔を近づけてくる。

なのはも今にも雪に消えてしまいそうな美しさを持ったその表情に
吸い寄せられるように、ゆっくりと顔を近づける。

・キララが横でウツトリしている間に二人の顔はさらに近づき・・・

むにっ

「・・・ふえ？」

「・・・って、私はあなたと違ってガールズラブ趣味なんてないんだからねっ！（超ニッコリ笑顔）」

エリーはなのはの頬をむにむにといじり始める。

「あうゝ、ガールズラブ趣味なんてないのにゝ」

「本気でキスなんてされると思ってたクセに」

どちらが年上か分からないような光景だった。（実際はエリーが鳥の姿だった時を含めて年齢はほぼ同じなのだが）

「うふふ・・・うふふふ・・・」

「ハッ！違うのキララちゃん、そんな訳じゃないから！」

「いや、この反応は・・・」

「なのはさんと・・・エリー様が・・・キス・・・私、氷の妖精だからウツトリしすぎて左手が溶けてしまいました・・・」

「わーーーーー！？どどどどど、どうしよう！？」

「大丈夫よ、妖精だからすぐ元通りになるわ」

「私の生命力は並大抵のものではないのですよゝ」

「身体がバラバラになっても復活するって噂だし」

「ホントに！？」

「おゝゝゝゝゝい！」

三人の耳に、ブルースの声が届く。

「お前らも早くこっち来いよ！」

「エリーもなのはの親父さんと腕試しをしてみてはどうじゃ？」

「ティア、あそこになのはさん達が！」

「分かってるってば」

「そんな所に居たら風邪ひきますよ！」

「早く戻ってください！」

「キュー！」

ブルース、リーフ、フォワードチームの呼びかけに、エリーとなのはは思わず笑みをこぼす。

「それじゃ・・・行こっか、なのは、キララ」

「うん！」

「はいです！」

エリーとなのはは自分達二人が今やるべき事をするために、仲間の元へと戻っていった。

―それは、今、この瞬間を仲間と共に笑い合う事―

―おまけ―

くフォルティス・レイン城・応接室く

「なんで私達は留守番なんやー!」

「主がエリーにセクハラをするからでは？」

「珍しいな、シグナムがはやてにズバツと言うのは」

「私も行きたかった・・・（エリーにはやての見張りを頼まれたフ
イト）」

「せっかく料理の練習をしてきたのに見張りを頼まれちゃった・・・

」

「・・・（獣形態で無言で後ずさるザフィーラ）」

（（（（（それにしても本当に暑い・・・）））））

留守番組は夏まっさかりのこの国で暑さに耐えていた。

のちにはやてがキララのサンタ姿の写真を要求してエリーに雷を落
とされたあげく、キララにヴァレットミークで掃き捨てられたのは
言うまでもない。

おしまい

番外編 エリーとなのはのクリスマス in 海鳴市（後書き）

キララは出発直前にシャルの料理を食べたせいで、一度メイド服を残して完全に溶けました。（メイド服を氷水に浸したら5分で復活）

そのため、シャルはヴォルケンリッターやフェイト、はやて共々留守番になりました。

それでは、よいお年を！

STAGE 7 決意の翼 Aパート（前書き）

今年最後の投稿です。

年内に5000ユニークをとりたかった・・・OTL

STAGE 7 決意の翼 Aパート

最初はただ、自分に仕える一人の人間の周りで流れている悪い噂を確かめに行くだけのつもりだった。

しかし、その先で見たのは自分の知らない所で進められていたおぞましい研究の実体だった。

その黒幕は彼を脅して実験台となる生物を手に入れ、人の道から外れた研究を行っていた。

これが真相である。

そして今、その研究によって生み出された獰猛な獣を操り、狂気の科学者は全ての証人を抹消しようと迫っていた。

「官邸の入り口前の広場」

「あんなのと戦えっていうのかよ・・・」

「そう簡単にはいけそうにないじゃろう。なのは、そちらはどうじや?」

「大丈夫、なんとかします。みんな! 気を引き締めていくよ!」

「ティア、いけそう?」

「・・・ちよっとキツイかも」

「エリオ君、ライガーの弱点とか覚えてない?」

「ごめん、分からない」

「……………」

一瞬エリーは仲間達に目をやり、すぐにミシヤスに向き直った。

その紅い瞳の奥には激しい怒りが渦巻いている。

「……命を弄ぶなんて、絶対に許さない！」

「ふん、たとえばっとうな研究だとしても、生物学の研究をするという事そのものが命を弄ぶという事に他ならないと思うのだがねえ」

エリーに怒りを向けられてもなお、ミシヤスの狂気を秘めた笑みが崩れる事はなく、むしろさらに凶悪なものとなる。

それを見たエリーと仲間達のそれぞれのデバイスを握る手に力が入る。

「さて、どうやら皆さんには私の研究の素晴らしさが分かっていないみたいですし、ムダ話もここまでにしましょうか。

……ゆけ、097号！」

その声の直後にライガーは突進し、爪をエリーに振り下ろす。

とっさにエンシェントブレイバーをクラッシュャーモードに切り替え、

鉄球をぶつけて力でライガーの攻撃を跳ね返そうとするが、クラッシュモードは速さに欠けるため、ライガーの素早い攻撃にだんだんについてこれなくなっていく。

『敵は非常に素早いようです。ランスモードへの変更を推奨します』
「分かったわ!」

エンシェントブレイバーは光に包まれ、雷の刃を先端に持つ槍となる。当然、色は瞳のような紅色。

エリーはそのままライガーに向かってランスモードのエンシェントブレイバーを向けて突撃していく。ブルース、リーフもアンセスタールとフォルトレイヤーを構えてその横から距離を詰める。

(私達の攻撃でなんとか動きを止められれば!)

三人はほぼ同時に攻撃を繰り出す!

「疾駆閃槍!」
しゅくせんそう

「バンクエッジ!」

「マン・ゴーシュ!」

エリーは電撃を纏った鋭い突きを放ち、ブルースは右手の十字の刃を回転させつつパンチを叩き込み、リーフは魔力を刃の先端に集中させての渾身の一撃を繰り出す。

これだけの攻撃を一度に受ければ強靱な身体を持つライガーといえど倒れずにはいられないだろう。

と思われた。

ガキーーーーン！

「えっ!？」

「ぐっ!？」

「何!？」

ガギギギギギッ……バシィッ！

「きゃあっ!」

「うおっ!」

「むうっ!」

三人の攻撃は何かに阻まれ、何が起ったのかも分からないままその身体は吹き飛ばされた。

「っ、アクセルシューター、シュート!」

「クロスファイア、シュートっ!」

三人がライガーから離れた瞬間、なのはとティアナの桜色と茜色の射撃が飛ぶ。

「私もっ……メイド・イン・ヘイル!」

キララはヴァレットミークを力いっぱい振り下ろし、複数の氷塊を放つ。

しかし、それぞれの攻撃はまたしても何かに弾かれてしまった。

「このままじゃ・・・あれ？」

なのはがよく目をこらして見ると、ライガーの周りに赤い光が発生していた。

「あれは・・・AMF!？」
アンチマギングフィールド

「いや、エリー達の物理的な攻撃も防いでいたから、普通の障壁だと思うよ」

「あれをなんとかしないと私達の攻撃が通じないのですよ」

それを聞いたエリーはブルース、リーフと力を合わせ、障壁を破壊しようと再び攻撃を仕掛ける。

だが、力技で魔力の障壁を破る事は非常に難しい。事実、三人の攻撃はまたしても弾かれてしまっている。

エリー達はそれでも諦めず、ライガーの爪をやり過ぎつつこの状況を打開する道を模索していた。

「・・・あっ！」

スバルが何かを閃き、エリオに念話で伝える。

《分かりました。僕も行きます！》
《うん、お願い！》

二人は体勢を立て直し、攻撃を仕掛けようと走り出す。

しかし、その標的は目の前のライガーではない。

二人の狙いはミシヤスの方であった。

スバルはライガーを包む障壁が四つの足と背中についている機械から発生している事に気づいていた。

ライガーをその機械で操っていたとしたら、操る者を無力化すれば障壁も消える。いや、それどころか、ライガーの動きを止め、戦いを終わらせる事もできるとスバルは判断したのだ。

だが、そう甘くはない。

「ガアアアア！」

「「うわっ!？」」

狙いをつけられた事に気づいたミシヤスは制御リモコンを操作し、ライガーの爪を二人に向けさせる。

二人はなんとかかわしたものの、距離が離れてしまう。

「フッフ、考えが甘すぎるのだよ。097号がいる限り、私には指一本も・・・」

ヒューン

「触れる事は・・・ん？」

ズゴーン！

「ぐはぁーっ！っ！？」

突然どこからか飛んで来た巨大な氷の塊がミシャスを押し潰してしまふ。

氷が飛んで来た方向をに目を向けると、そこには城で待っていたはずのフェイト、はやて、ヴィータ、シグナム、ノーヴェの姿があった。

「心配になって来てみたんだけど・・・」

「随分とやっかいな事になってるみたいやな」

「・・・それにしても、なかなか派手な事をするもんだな、ヴィータ」

「これぞ、この世界で身につけたあたしの新しい技、『アイスバー

グアタック』だぜ」

「まんまじゃん」

「よし、間に合ったか」

四人を呼んだのは、戦いの中でライガーをひたすら解析し続けていたジェレミイだった。

「みんな、奴のコントロールを失った今がチャンスだ！」

「よし、フェイト達は教授を抑えてて！」

そう言うときエリーは急におとなしくなったライガーに近づく。

あとは自分が機械を破壊すれば終わる。

そのはずだった。

「グルアアアアア！」

自我を取り戻したライガーは再び暴れだし、周りに見境なく襲いかかってくる。

「あの機械のせいでまだ苦しんでいるんだわ……ブルース、キララ、リーフ、手伝って！」

「おうよ！」

「了解ですっ！」

「任せろ！」

その声と同時に、ブルースとリーフはライガーの左横に、キララは右横に立つ。

「一気にいくぜ！コバルト・スラッシュ！」

「ダインスレイブ！」

「メイド必技・クリーンアップ・コールド！」

ブルースとリーフの放つ二つの衝撃波が左の前脚と後脚の機械を一撃の元に粉碎する。

キララは地面を掃くようにヴァレットミークを振り、そこから放たれた冷氣を受けた右の前脚と後脚の機械は凍り付き、崩れ落ちた。

「・・・残るは背中だけ！」

エリーはライガーの左側に移り、ランスモードのエンシェントブレイバーを大きく振りかぶる。

その狙いは、背中に残る最後の機械。

「砕空・・・飛衝！」

ガシャーン！

全力で投げつけたエンシェントブレイバーは素早く正確に飛び、最後の機械を撃ち貫き、完全に破壊した。

エリーは四人の攻撃による衝撃でおとなしくなったライガーに近づき、呼びかける。

「・・・もう、大丈夫」

ライガーはそれに答えるように、エリーが差し出した手をなめた。

「一件落着きたいだね」

「よし、なのはさん、後でキララにかき氷作ってもらいましょう！」

「やっぱり色気より食い気なのね・・・」

「やっぱり、エリーさんって、凄い」

「そうだね、キャロ」

なのは達の顔を見て、エリー達は緊張の糸が切れたように力が抜ける。

「いやいや、一時はどうなるかと思ったわい」

「さーて、俺達もさっさと片付けて城に戻るか」

「そうね。・・・あれ？キララは？」

「キュ~~~~~・・・」

「わ~~~~！？キララ、大丈夫!？」

エリーが投げたエンシェントブレイバーが頭にザツクリと刺さり、反対側で撃沈していた。

「ふへへ・・・エリーしゃまのお仕置きだったらいつでも大歓迎ですよ・・・ふへへへ・・・」

「あゝ、またいつものマゾっ気が・・・」

「「・・・（苦笑）」」

こうして、一つの噂から始まった戦いは誰も命を落とす事なく無事に幕を閉じた。（約一名ボロボロだが）

しかし、エリーには不安があった。

黒幕のミシャスの事を、自分と同じく魔法生物達を好いている人物
と思い込み、そして、裏切られた。

自分の知らない所で、人は何を考えているか分からないという事を
知った。

そして、自分の視野の狭さに気づいた。

エリーは呟いた。

—ここで呼びかけているだけでは・・・いけない

—B
パートへ続く

STAGE 7 決意の翼 Aパート（後書き）

エリー

「作者は最近、とある美少女ゲームキャラをスペシャルゲストとして出演させようとしているらしいわ」

リーフ

「しかもそれなりに活躍する予定だという噂じゃ」

ブルース

「ニコ動で魅了されたらしいぜ」

キララ

「楽しみですねー！それでは、来年も『魔導戦記リリカルなのはA nother world』をよろしくお願いしまーす！（のワの＊）」

エリー

「顔文字でバレたあああああああああ！」

STAGE7B 旅の始まり（前書き）

新年最初の投稿です。

STAGE 7B 旅の始まり

—翌朝—

「ううん、んんんっっ・・・」

「あ、エリーさん、おはようございます」

「うん、おはよう」

なのは達がここにやって来てから四日。

いつものようにエリーは自分の部屋のベッドで目覚め、パジャマ姿で背伸びをする。

自分を見つめるエリオ、ティアナにイタズラして蹴飛ばされるスバル、またもやベッドから落ちているキャロとノーヴェを見て、今日も一日を過ごすために気合いを入れた。

—中庭—

いつもながら豪華な朝食の後、中庭の魔法生物達に餌をやるエリー。カーミラに自分の魔力を吸わせ、小さくなった状態で他の生物達にも同じように餌をあげている。

先日のライガーも治療がほぼ終わり、エリーが差し出す肉をおいしそうに食べている。

スバル達がエリーに話しかけると、「小さい方がいい時もあるの」と返された。

「あ、そろそろ元に戻る時間だわ。・・・見ないでよ！絶対見ないでよ！」

エリーはすぐさま噴水の後へ隠れる。今回は元に戻る前に服を脱ぎ、戻った後に用意していたドロワーズを穿き始める。

その時、なのはが中庭に入ってくる。

「エリー、居る？」

「!! な、なのはさん、ダメ・・・」

そして、またもやエリーと鉢合わせ。

「世界の数だけ星空があるって事かな？」

「・・・・・・・・」

「なんか、エリーが元気ないわね」

「疲れたんじゃない？昨日はあんなのと戦ったんだし」

「・・・・・・・・みんな、ちょっと聞いてくれる？」

黙りこんでいたエリーは口を開く。

そこから語られたのは思いもよらぬ言葉。

そして、エリーの決意。

「私はこれから、この城を出て、世界を見て回りたいと思う」

[illegible]

「な、何でそんなにいきなりそんな事を!？」

「その目……どうやら本気みたいね」

「でででで、でも、エリーさんが居なくなったら、この国は！」
「そ、そうですよ！」

四人はただ驚くばかり。

しかし、エリーの目は真剣だった。

「私はエンシェントブレイバーと出会ってから、この国で多くの問題に向かってきた。

時には遠出してその実状を見に行ったり、時には自ら刃を手にとりて戦った時もあった。

私は、自分のおかげで多くの人が救われたと、そう思っていた。

だけど、私はいつからか、それをただの自己満足なんだと思うようになった。

私がどんなに頑張っても、本当に解決すべき事が全て終わる訳じゃない。

残された疵跡きずあとは簡単には消えないし、次に誰が悪を働き、誰がその

犠牲になるかも分からない。現に私は、自分に尽くしてくれた一人の人間が一人で苦しんでいた事に気づいてあげられなかったから。

・・・今の私は、視野が狭すぎたのよ」

四人はただ黙って聞いているしかなかった。

四人はエリーを見て、普段は明るくのんびりした顔を見せ、いざ戦いに参加した時には何も恐れる様子もない様子から、彼女の事を常に前向きな女性だと感じていた。

そんな彼女の口からこんな言葉が出る事など、四人は考えた事もなかった。

それ故に、これ以上は何も言わなかった。

いや、言えなかった。

「おいおい、ちょっと待ってくれよ」

その時、背後からブルースの声。
振り向くとリーフとキララもいた。

「何を言い出すかと思ったら、まさか一人で行く気じゃないだろうな？」

「女子に一人旅は辛いじゃろうて」

「私達を置いていくなんて、酷いです・・・」

「・・・」

「「・・・」」

「つまり、あなた達も行くつもり？」

「当たり前だろ？お姫様の護衛が俺のなんだし」

「私も、たまにはゆっくりと世界を眺めてみたいと思った所じゃ」

「エリー様、私もお供させてください！」

三人の目からは何と言われようともついて行く気である事が見てとれた。

エリーは少し悩んだ末に、口を開いた。

「・・・今のうちに必要だと思ふ物を準備して。話はそれから」

―三日後―

（空港）

「しばらくこの国を頼むわね」

「畏まりました」

「たまには私にも手紙をよこしてくれ」

城の住人達や多くの国民の前で、エリーはローリング、ジェレミイと最後の挨拶を交わす。

そして、ブルースとリーフも。

「ブルースさん、護衛役として期待してますよ！」
「任せとけて！」

「いずれまた会いたいものだな」

「私もじゃ、烈火の騎士よ。その時はお望み通り、真剣勝負じゃ！」

「また勝負しかけたのか、シグナムの奴」

「まあまあ、それがシグナムだし」

ブルースは近衛兵達に、リーフはヴォルケンリッターに見送られる。

「エリー様〜〜！遅くなりました〜！」

キャンプに持っていくような巨大なリュックを背負い、メイド服ではなく空色のジャケットを着たキララが息を切らしながらやっと到着した。

「これまた随分とたくさん詰め込んできたのね」

「準備は大事ですから」

『中身は四人の替えの下着にマイロードのメイド服、非常食、簡易テント、寝袋、虫よけスプレー、蠟燭、簡易型デバイス修理キット、ゴミ袋、その他色々です。デバイス用機械油は私にはそれほど必要ないのですが』

「それはそうと、なかなか似合っておるぞ」

「なんか、ボーイッシュだな」

―そして、出発直前

四人が飛行機に乗ろうとした時。

「エリー！」

一人だけ遅れていたなのはがやっと合流。

心配そうにエリーを見つめる。

そこに返ってきたのは、エリーの最高の笑顔だった。

「じゃあね、なのは！」

私、行ってくるわ！」

その言葉を最後にハッチが閉じられた。

「行ってしまったか」

クラウドは寂しげに自分の子を乗せて天空を飛ぶ飛行機を見た。
その横ではなのはがまだ心配そうな顔をしている。

「なのは、大変！」

フェイトが焦った顔をして向かって来る。

その後ろには守護騎士達とノーヴェの姿があった。

「スバル達が、スバル達がどこにも居ないの！」

「え
・
・
・
？」

[illegible]

その飛行機内

フェイト達が必死に探している五人は・・・

「なぜはやてさんまで？」

「なんか、私が守ってやらなアカンと思ってな」

（下心がありそうな気が・・・）

「しーっ、エリーさん達に気づかれますよ」

「ほら、あそこです」

五人はエリーの事を心配するあまり、気づかれないようにこっそりついて来る事にしたのだった。

そして、前の方の席に居るエリー達というと・・・

「「「ZZZ・・・ZZZ・・・」」」

・・・のっけから寝ていた。

それを見たはやて達は思った。

―この四人なら大丈夫だ、と。

「フォルティス・レイン王国・某所」

「とうとうエリー・ミストが動き出したか」

どこかで、白い少年の声が妖しく響く。

「エリー・ミスト、君の力を管理局に渡してはならない。

他にそれを狙う者にも。

それが奴らに渡る事は、

否、君が闇に堕ちる事は、

・・アナザー・アースの破滅を意味するのだから」

|
T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.

STAGE 7B 旅の始まり（後書き）

ここでやっと物語の本当のスタートです。

エリーと愉快的仲間達の活躍にご期待ください！

エリーの仲間達紹介（前書き）

タイトルの通り、エリーの仲間達の紹介です。

エリーの仲間達紹介

ブルース・ファルガス

CV..藤原啓治

種族..人間

年齢..27歳

血液型..O型

身長..186センチ

体重..73キロ

ランク..陸戦A-

魔力光..水色

身体的特徴..黒髪、青目

武装..アナザー・アース式非人格型アームド・ブースト混合デバイス『アンセスターブルー』

エリーの護衛を務める男。

フォルティス・レイン王国の孤児院で育った過去があり、成長した後も七年前までその孤児院の手伝いをしていた。

七年前の例の事件でミネルヴァの暴徒から孤児院の職員や子供達を守っていたらしく、それを聞いたエリーが彼に会いに行った事が二人の出会い。

城に招待されたブルースはのちにアンセスターブルーを与えられ、エリー専属のボディガードとなる。

同時にブルースはエリーと互いを名前で呼び合う最初の人物となった。

エリーによれば仁義に厚いらしく、人と人との繋がりを重んじる性格。

特殊な力はないが、己の身体一つでどんな敵にも立ち向かう強さと度胸を持つ。

海賊風のバリアジャケットは、両親が引退した船乗りと航海士だと孤児院の人から聞かされていた事から、『海の男』をイメージしたんだとか。

声のイメージは基本的に『野原ひろし』に近いが、戦いの時はたまに『アリー・アル・サーシェス』っぽくなる。

リーフ・アストレイ

CV…池田秀一

種族…人間

年齢…27歳

血液型…A型

身長…174センチ

体重…64キロ

ランク…陸戦A+

魔力光…コバルトブルー

身体的特徴…青い短髪

武装…ベルカ式非人格型アームドデバイス『フォルトレイヤー』

ミッドチルダ出身の元時空管理局員。

かつては相棒のフォルトレイヤーや同僚達と共に次元世界の平和のために戦っており、管理局内外で信頼される人物だった。

しかし、アナザー・アースでの例の事件に局が関わっている事を知り、その醜い姿に失望する。

その後は正式な局員を辞め、聖王教会でカリムの手伝いをしつつ、

時々知り合いのゲンヤ・ナカジマから費用をもらってアナザー・アースの各地を見てまわっている。

フォルティス・レインの城下街のとあるオフィスにて窓拭きのアルバイトをしていた時に広場での事件を目撃し、オフィスに逃げ込んだミネルヴァの過激派をエリー達に代わって鎮圧した。その後はエリーに謝罪し、行動を共にする事になった。

声のイメージは『赤井秀一』。
バリアジャケットは『ジユラキュール・ミホーク』の服を濃い青色にしたような感じ。

キララ・フェルトレイヴ

CV..今井麻美

種族..ジャック・フロスト

年齢..14歳

血液型..Unknown

身長..152センチ

体重..37キロ

ランク..Unknown

魔力光…白

身体的特徴…顔の左右に下がった空色の三つ編み・灰色の瞳

武装…アナザー・アース式インテリジェントデバイス

『ヴァレットミーク』

フォルティス・レイン城にてエリーに仕える新米のメイド。見た目は人間の少女だが、実は『ジャック・フロスト』と呼ばれる氷の妖精である。

元々はアナザー・アースの雪国のどこかにある『妖精の隠れ里』で仲間達と平和に暮らしていたが、本編開始の半年前に自然災害によって里の外に放り出されてしまい、行き倒れていた所を慰安旅行に来ていたフォルティス・レインのメイド達に保護された。その後はエリーが身元の引き受け人となり、キララは城にメイドとして迎え入れられる。

メイドになってからまだ日は浅いが、毎日健気に頑張るその姿をエリーやメイド長のリンに気に入られ、のちにヴァレットミークの主に選ばれる事になる。

清純派に見えるが実はややマゾ気質があり、エリーにお仕置きされたり盾にされて喜んでいたりする。

自然から命を得ている妖精であるため、強力な自己再生力を持つ。身体の一部が切断されたり、跡形もなく溶けてしまっても短時間で再生できる。

しかし妖精は絶対に死なないという訳ではなく、妖精と同じく自然

の力を受けている一部の攻撃や自然災害などによって簡単に死んでしまう。寿命もあるし、飢え死にもする。

バリアジャケットのデザインは遊戯王カードの『ブリザード・プリンセス』がモデル。知らない人は漫画版遊戯王GXの7巻を買おう。

エリーの仲間達紹介（後書き）

ルナマリア・ホーク

「ハァーイ、エリー！旅の準備はバッチリかしら？」

野原ひろし

「ブルースの靴下はジャスミンの香り！（何）」

赤井秀一

「管理局など、奴らに比べたらまだマシなモノさ」

如月千早

「私と同じ声であんな恥ずかしいセリフを／＼／＼／＼……くっ」

以上、四人のイメージＣＶの人が演じるキャラクター達のぼやき？でした。

STAGE 8 旅の色と出会い Aパート（前書き）

一話でまとめようと思ったが、作者は力尽きました。

STAGE 8 旅の色と出会い Aパート

くアメリカ・ニューヨークく

突然だが一つ解説。

アナザー・アースはいわば地球の平行世界。そのため、一部を除いて地名もほとんど地球と同じなのである。

そんなこの世界での争いを止めるために自分達が何をすべきなのか。

その答えを探すために祖国を離れ、広い世界に飛び出した一国の王女と愉快的仲間達は、このニューヨークという地で……

「いらっしやいませく！（飛び切りのスマイル）」

「オーダー入ったぜー！12番テーブルにチーズバーガー二つとポテトのM二つ、コーラ二つ！」

「こちらは9番テーブルにフィレオフィッシュにポークバーガーとコーヒーじゃ！」

「ファミリーセットのBコースを一つ、ドライブスルーですよ！」

・・・旅の資金を稼ぐためにハンバーガーショップでアルバイトをしていた。

一応国を出る時にある程度のお金は持ってきていたのだが、世界を旅するとなるとそれ相応の資金が必要となるので、こうして旅先で稼がないとやっていけないのであった。（ブルース談）

ちなみに、キララはメイドとしての経験を活かせるウェイトレスがやりたかったようだ。

「なんか、心配する必要なんてないんじゃない？」

「エリーさん、以外と似合う・・・」

「モグモグ（ハンバーガーを食べているスバル）」

「ハグハグ（ハンバーガーを食べているエリオ）」

「まあ、念のため。それにしてもこの店、どこからどう見てもマ○ドナルドやないか！こっちにもあったんやな」

四人の事が心配になって、見つからないようについて来たはやとフォワードチームも四人の姿を見ながらハンバーガーを堪能していた。ちなみに変装中。

「レジで私達だとバレるかと思いましたよ」

「バレへんバレへん」

— P M 9 .. 0 0 —

「いやゝ今日はご苦労様。世界旅行の途中なのに申し訳ないね」
「いえいえ、こちらこそ」

バイトを終えたエリー達は働いた分のお金をもらい、今日泊まるホテルや宿のようなものを探す事にした。

「アメリカって随分広いんだな」

「私の国はここからしょっちゅう小麦を輸入しているのよ。まったく、今の時代は食糧自給率を増やさないと経済的に厳しいっていうのに」

「・・・国の事をよく考える、良い姫じゃな」

「そりゃ、我等がエリー様ですから」

「あはは・・・ん？」

エリーの視線の先には数人の人影。

よく見ると中心には女性の姿があり、チンピラっぽい男達にからまれている。

「・・・どうします？」

「当然助けるに決まってんでしょ？ コラー！ その男どもー！」

エリーは正面からチンピラ達に突っ込んでいく。

・・・その時。

ヒュンツ、バキツ！

「!？」

割り込んだ一つの人影がチンピラの一人を蹴り飛ばし、そのまま女性を助けた。

雲に隠れていた月が姿を現し、その人影の正体を夜の都会に映し出す。

「・・・町の真ん中でそういう事をする奴がいるのも、アメリカじゃ日常茶飯事か」

それは、闇に光る赤い瞳に銀髪を持つ、少女のような顔つきの人物。

「て、テメー、やりやがったな！」

チンピラ達はその人物に向かって一斉に襲い掛かる。

エリーは思わず足を止めてしまう。

「・・・・・・・・遅い！」

その存在は目にも止まらぬ速さで懐に入り込み、チンピラ達の腹に一発ずつ手刀を叩き込む。

大柄なチンピラ達はその速さの前に一瞬にして地に堕ちた。

その時間、わずか2秒。

「・・・・・・・・」

雲は完全に晴れ、月の光はその存在のはっきりとした姿を照らす。

黒のシャツに短いズボンというシンプルな服装。

そして、ゆらりと揺れる、銀色の毛に包まれた尻尾。

よく目を凝らしてみると、耳も獣のそれであった。

そして、その姿に目を奪われるエリー達に気づき、恐れをなして逃げていったチンピラ達とお礼を言って去っていく女性を見送りながら近づく。

・
・
・
・
・
・

「あ！今日あの店にいたアルバイトの！」

「へ！？」

「いや、僕も何度か来ているうちに店員さんの顔を覚えてしまったからね。見慣れない顔がいるとすぐ分かるんだ」

エリーは今、スバル達が初めて自分の素の性格を見た時と同じ心境だった。

「それはそうと、女子だということのになかなかできるではないか」

「…………え〜と…………」

その人物の表情が雲る。

「まあ、初対面だからしょうがないか」
「ん？」

「こんな顔だけど、僕は一応『男』なんだが」

「えー！ー！？あ、あなた、男なの！？」

「そう、僕は男ですよ、エリー王女」

「ちょっと待て！今さらっと正体見破っただろ！」

「ミネルヴァとスターラルガの争いの引き金になった悲劇のヒロインをこの世界で知らない人はいない。」

「……気分を悪くしたのなら謝る」

「……いや、私は大丈夫よ？それより、今の私はただの旅人なんだから、王女なんて呼ばないで」

「ん、そうか。さて、そろそろ僕も名乗っておかないとだな。」

僕の名は『影原かげはら 剣つるぎ』。

「……ただのしがない警備員の端くれさ」

「影原 剣、か。よい名だ」

「なんか、ちょっとかっこいいです」

「そう言ってもらえるのは悪くないな」

獣の身体の特徴を持つその青年、ツルギは耳をいじりながら微笑みを見せる。

なお、これ以降は彼の名はカタカナで表記する事にする。

「そういえば、さっき警備員って」

「ああ。近くに美術館があつてな、そこで働いてるんだ。給料は平凡だけど仲間もいて充実している」

近くの自販機にお金を入れ、缶コーヒーを買いながら答える。

．．．．．

「っ、．．．．誰だっ！」

ツルギはいきなり近くの看板に向かって買ったばかりの缶コーヒーを未開封のまま投げつける。

(わ、やばっ)

看板には誰かが隠れていた。

その『誰か』は思わず手で缶をキャッチする。

「あ、あちあちあち！」

「」「あ」「」

・
・
・
・
・

「・・・は、はやて!？」

「あ。しもたー！」

もちろん、一人だけではなかった。

「ほら、やっぱりバレたじゃないですか！」

「そもそも僕達五人で尾行って、怪しすぎです」

「モグモグ（ホットドッグを食べるスバル）」

そう呟くツルギの顔は無表情のようだったが、尻尾と耳が垂れ下がっていた。

― B
パートへ続く

STAGE 8 旅の色と出会い Aパート（後書き）

オチはどう見ても手抜きです。本当に（ry

せっかく新キャラを出したのに、大丈夫か？この小説・・・

そう思った方はお口直しに、作者が新たに書き始めたアイマス小説をどうぞ。

エリー

「雪歩にすっかり骨抜きよ、この作者」

だ
ま
れ ♪

STAGE 8 Bパート (前書き)

アイマスの「三浦あずさ」をイメージしたサブキャラが出ます。

STAGE 8 Bパート

「それで、心配になって来てしまった訳ね」

「そ、そうなんや（電撃のせいでアフロヘアー）」

「という訳で、前回のあらすじなのです。

アメリカでオオカミさんと出会い、ストーカーまがいの事をしていたはやて達をエリー様の電撃ビリビリでお仕置きしたのでした。以上！」

「「短い！」」

「大体あってるけどね」

「オオカミさんって僕の事か？」

そんなこんなで一同はツルギの家に泊めてもらう事になった。

「しかし、随分と立派になったな、四人共」

「私も前線に出てなかった訳ではないですから」

「いずれ、修行した僕の強さを見せたいです」

「あれ？知り合い？」

「昔、スバル達がちょっと世話になったんや」

「それより、大丈夫なのか？一度に九人も」

「ああ。なにしろウチは・・・」

くツルギの家？

『おかえりなさい、若旦那！』

彼等を迎えたのは、黒いスーツを着た男達だった。

「まだ日本にいた時に警察官をしていた父に命を救われた『牙影組』の連中と一緒に暮らしてるからな」

『牙影組』。

それはかつてアナザー・アースの日本で名を轟かせた、悪く言えば『極道』、良く言えば『任侠』の組織。

そして、どのような存在をもってしても、決して侵す事のできない仁義の世界に生きる物達。

「なんか凄い・・・」

「『任侠』か。男らしくていい響きだぜ」

「まさか若旦那がここに女を連れて来る時が来ようとは！しかも六人！」

「よく見たら四人は管理局員ですかい！」

「考え直してください！若旦那にはもったいい女が・・・」

組員の一部は何かを勘違いしたのか、涙ながらに言う。

確かに六人も女を連れて来たら何事かと思うだろうが。（エリー、

キララ、はやて、スバル、ティアナ、キャロの六人）

「あのな、彼女達は旅の物なんだ。決してそんな気はない。あと、若旦那はやめてくれ」

「すみません！そいじゃ、ヤイバさん達を・・・」

「もう居るぞ」

その家（と言うより屋敷）の奥から、たくましい印象を持つ髭の男性と、身体の所々に銀色の体毛を持ち、ツルギと同じく銀髪・獣耳に尻尾の女性が現れる。

スーツの男達は全員お辞儀をして二人をエリー達の前に通した。

「ガッハッハ！話はツルギから大体聞いているぞ、旅の嬢ちゃん達にそっちのダンディな二人！」

「ツルギの母のマーズです。こちらは主人のヤイバさんですよ」

男性・ヤイバの豪快な態度とは対照的に、女性・マーズからはおしとやかな印象を受ける。

父と母の性格の違いを目の当たりにしたエリー達と思う。

ツルギは母親似だと。

エリー達は自己紹介を済ませ、屋敷の中へ。

「何から何まで、ありがとうございます」

「いやいや、旅の者と聞いて、ロマンのある連中だと思ったからな。そういう奴らには優しくせんと」

ヤイバとの話で盛り上がる中、ツルギとマーズがやって来る。

「父さん、準備できたよ」

「組長さん達も待ってますよ」

「そうか。では、始めようじゃないか！」

エリー達はヤイバによって半ば無理矢理に屋敷のある一室に連れられていられる。

何が始まるのかわからないまま辿り着いたその部屋には・・・

「来たか、旅のお姫様とその他」

牙影組の組長らしき人物が多数の組員達と共にエリー達を待っていた。

彼等の前には豪華な料理が用意された大きなテーブル。

つまり、宴会の準備ができていた。

「異国の者と仲良くなりたければ、まずは同じ釜のメシを食う事からだ」

「いきなりすぎる気もするけど、父さんなりのもてなしなんだ」

「相変わらずツルギさんのお父さんはやる事がデカすぎる・・・」
「そのツルギさんは母親似で静かな人だけどね」

やる事まで豪快なヤイバの様子に、苦笑いする一同。

しかし、エリーが考えている事は違った。

彼は、自分が望む世界に必要な存在を絵に描いたような男だった。

たとえ異種族だろうと、違う世界の住人だろうと、分け隔てなく接する事。

その考えが世界を平和にするのだ。

しかし、現実はそのようなものばかりではない。

人というのは敵を作りたがる存在。

自分達の憤りを自分で押さえるのが下手な生き物なのだ。

だからこそ人は争う。

奪い合う。

そして、殺し合う。

それをエリーは知っている。

その先にある人の闇を知るために、エリーは仲間を連れて旅立つ事にしたのだ。

自分達は今、何をすべきなのか。

全てを見たその果てに答えがある事を信じて。

「何暗い顔してんだ？」

「ふえ？」

「今は深く考えず、今を楽しめばいいやん！」

「はやてさんの言う通りだよ？」

（・・・そうね。今を生きる事ができなければ、未来なんて見えないわ）

エリーは再び前を向く事にした。

そして、少なくとも今この瞬間を見つめる事にした。

今の仲間達の笑顔が永遠のものとなる事を小さく祈りながら。

「それでは、お姫様達の旅の無事を祈って！」

『カンパニー！』

— A M O . . 2 4 —

ジャゴー・・・

「・・・ふう」

女子トイレからエリーとキララが出てくる。

「そういえば、妖精もトイレ行くのね」

「妖精だって生き物ですから／＼／＼」

二人が布団へ戻ろうとした時。

「・・・」

「エリー様？」

キララに目で合図を送る。

「分かりました！」

二人は不信な気配を感じ、エンシェントブレイバーとヴァレットミークを起動させ、パジャマとメイド服で廊下をゆつくりと進む。

気配の正体も二人の動きに気づき、ゆっくりと近づいて来る。

そして、曲がり角でその距離は最も近くになった。

「・・・・・・・・」

バツ！

エリーとその存在はほぼ同時にお互いの首筋にそれぞれの刃を突き付ける。

「・・・ツ、ツルギ!？」

「ありゃ？なんでこんな時間に？」

その服装は全身を覆い、闇に溶け込む黒装束だった。

— 中途半端だけと続く

STAGE 8 Bパート（後書き）

はやて

「フォワードのセリフがろくにならないな、今回」

キララ

「気にしたら負けですよ」

エリー

「次回『魔導戦記リリカルなのはAnother world』STAGE 9『白銀の人狼は忍者の夢を見るか？』お楽しみに！」

ブルース

「ネタバレ乙」

STAGE 9 白銀の人狼は忍者の夢を見るか？ Aパート（前書き）

ちょっと短いですが、今回はツルギに惚れる回？

STAGE 9 白銀の人狼は忍者の夢を見るか? Aパート

「ツ、ツルギ!？」

「ありゃ? 何でこんな時間に?」

深夜の廊下で鉢合わせた三人は驚きつつ、互いに刃を納める。

「誰かと思ったらエリーとキララか。物音がしたから気になってしまった」

「そうなの・・・それより、その格好は?」

「ああ、こいつは・・・」

「おや? こんな夜中に楽しそうだな?」

ツルギの背後から、低い声が響く。

「若旦那、何があったんですかい!？」

この悲鳴に屋敷中の人々が集まり、ツルギの格好を気にする者はいなくなつた。

――翌朝

「それじゃ、行ってくる」

「行つてらっしゃ……ふわあ」

張り切つて仕事へ向かうツルギとは対照的に、気絶したエリーとキララ以外のメンバーはあの悲鳴のせいでかなり眠そうにしていた。

「まったく、夜中にあんなでかい声出される身にもなつてくれよ」

「しょうがないでしょ! 般若つて結構恐いのよ?」

「そういえば、前になのはちゃんが温泉旅館で般若の面をお土産に買ってきた事があったような」

「あれは恐かった……」

そんな話をしつつ、エリー達はこれからの行動について話し合う。しかし、そもそも旅先で具体的に何をするのかを全く考えていなか

ったため、難航の一途を辿った。

そんな中、組員の一人が声をかける。

「あんた達、もしよかったら、若旦那が働いている美術館へ行ったらどうだい？」

「うーん。このままここに居ても退屈だし・・・」

「では、行かせてもらおうかの。ブルースとキララも良いな？」

「賛成だぜ」

「エリー様が行くと言うのなら私も」

そんな訳で、一同はその美術館で芸術鑑賞をする事になった。

美術館の場所は屋敷から3ブロック離れた場所にあり、ツルギはいつもその距離を乗り物も使わずに行ったり来たりしているらしい。

そんな事が可能なのはやはり彼に流れる異種族の血のおかげか。

ちなみに、『霊獣族』という。

（美術館）

外から見ると、そこは鮮やかな色の屋根がついた立派な建物だった。

外だけでなく中也非常に美しいものであり、美術品の良さを引き立てていた。

そんな感じで楽しむエリー達とはやて達の前に、見覚えのある顔が。

「あ、ツルギー！」

「来ると思ってたよ。父さんから連絡があったから。ところで、僕の警備員の制服を見てくれ。このデザインをどう思う？」

「すごく・・・灰色なのです・・・」

「女の子がそれに答えちゃダメやー！」

「「????」 ↑元ネタが分かっていないエリキヤロ

「「・・・」 ↑元ネタを知らない方がいいと感じたスバティア

とりあえず制服の話で盛り上がる一同。

「そんじゃ、ゆっくりしてってくれ。そうそう、館内は飲食物の持ち込みは厳禁だ。あと、展示品を見る時はロープの内側に入らないように・・・」

「ウオラーー！」

突然響くぶっきらぼうな男の大声。

「な、何だ!？」

「ったく、館内は静かにするもんだろうが」

「やれやれ、どんな国にもマナーの悪い奴は居るって訳ね」

ツルギが先行してその声のする方向へ向かい、エリー達も後に続く。念のため、デバイスをすぐに起動できるように準備していた。

「オラオラー！あの痩せ狼を出しやがれー！」

「出て来いよ、この銀髪野郎！」

館内で大声を出して暴れ回る男達。

その罵声と暴力の中、従業員達は展示品を守るために必死で動き回っている。

「そこまでよ！」

「やれやれ、痩せ狼ってのは僕の事か？」

そこにエリー達が到着。

ツルギは彼等の行動に対してなんとなく挑発的なリアクションで返す。

「テメー、昨日はよくもナメたマネしてくれたな！」

「誰かと思えば昨日のチンピラ共か。入りたいのならチケットを買ってもらおうか。もっとも、お前達のような、他人の迷惑を考えない奴は入場お断りなんだがな」

チンピラ達にいくら睨まれても、ツルギは表情一つ変えない。

普段の温厚な様子とは別人にも見える。

「この野郎・・・おい、テメーら、やっちなえ！」

男達は一斉にナイフや鉄パイプを構える。

それでも、彼には恐怖の色はない。

「・・・お前達が僕に恨みを持つのは勝手だ」

そこには、昨日チンピラ達を撃退した時のような鋭さがあった。

彼はその場で高く跳び上がり、後ろに一回転。

そして、着地した時には・・・

「あっ！あれは！」

その姿は、昨日の黒装束となっていた。

「だが、僕の職場にまで迷惑をかけるとは、褒められたものじゃないな！」

— B パートへ続く

STAGE 9 白銀の人狼は忍者の夢を見るか? Aパート(後書き)

キララ

「カッコ良すぎてゾクゾクします」

エリー

「『ミンゴスは変態淑女』なんて言われたらあなたのせいよ」

キララ

「えー！」

STAGE 9 Bパート(前書き)

戦闘シーンは難しい。

STAGE 9 Bパート

くAパートのあらすじく

アメリカにて、半人半獣の青年ツルギと出会ったエリー一行は、彼が警備員として働いている美術館へ遊びに行く事になった。

しかし、美術館に突如として乱入者が現れる。

美術館を守るべく、謎の黒装束がベールを脱ぐ！

「やっぱりリアルファイトはこの服に限る」

心なしか気合が入っている。

「その格好・・・」

「改めて見てみると、どう見ても忍者です・・・」

「その通り。僕は先祖代々より伝わる『影原一族』の者だ。多分、リーフは最初から知ってたんじゃないか？父さんが昔、スバルの父のゲンヤ・ナカジマと戦った事があるって言ってたし」

「なはは、実はそうなんじゃ」

「忍者って、他人に知られないようにしてるんじゃないのか？」

「そのはずだったんだが、僕が学生時代に通っていた学校ですっかり有名になってしまっただけな……って、今はそんな話をしている暇はなさそうだ」

そう言うのと、チンピラ達に向き直る。

相変わらず怨嗟の念を感じさせる視線を向けられているが、やはり眉一つ動かさない。

むしろその様子が逆に静かなる威圧感を漂わせる。

『忍』とは『刃』で『心』を隠すもの。

それ故に、この程度ではツルギに恐れを与える事などできない。
できるはずがない。

「どこからでもかかってこい！この野蛮人共！」

それが開戦の合図だった。

チンピラ達は怒り狂うように襲い掛かる。

ツルギは冷静に向かってくる一人の足を払い、倒れた所に踵落としを叩き込む。続いて、正面の相手の鉄パイプをかわして裏拳をぶつけ、鉄パイプを拾って他の敵に投げつける。

回転する鉄パイプを喰らって怯んだ敵に、ツルギはさらに追撃を加えようとする。

「クソが！いくらお前でもこいつには勝てまい！」

敵の一人が取り出したのは、リボルバー式の拳銃。

アナザー・アースは地球の平行世界であるため、管理局が規制している質量兵器も数多く出回っているのだ。演説会の事件でロケットランチャーが使われたのもそのためである。銃口が向けられ、引き金がかれようとするが、ツルギはそれを見逃さなかった。

「はあっ！」

ヒュンツ、ザクツ！

「ぐあっ！？」

その手から投げ付けられた手裏剣が拳銃を持つ手に突き刺さる。

その隙に両手の指で印を結び、右手を振る。

「忍法・霞陽炎！」
かすみかげろう

突然、霧が立ち上る。

「うわ、何だ!？」

「あちゃちゃちゃ!」

否、高温の水蒸気だった。

チンピラ達は怯み、更なる隙が生まれる。

そしてそれは、尻尾をなびかせながらのツルギの特攻を許す事になる。

「でやあああああ!」

跳び上がりながらの強烈な回転蹴りが炸裂し、チンピラ達は一気に叩きのめされた。

そのまま銀色の人狼はスタイリッシュに着地する。

そのはずだったが・・・

「こいつめっ!」

「ぐ・・・あっ・・・!？」

背後からの敵に首を絞められる。

身長が低く、重さもないその身体は簡単に足が床から離れた。

「調子に乗るなよ・・・てめえの細い首なんぞ簡単に・・・」

ちよんちよん

「ん？」

ビリビリビリビリビリビリビリビリビリビリビリビリビリ
ビリ！！

「ぎょおおっっっ！」

紅い電撃が男を襲い、ツルギは解放された。

「やれやれ、私達を忘れてもらっては困るわ」

バリアジャケット姿のエリーが得意げな表情で立っていた。

当然、戦闘体勢になっているのは彼女一人だけではない。

「そうだぜ？俺達だって十分戦えるんだからな！」

「私も居るぞ！」

「ですよー！」

ブルース、リーフ、キララもデバイスを起動させ、チンピラをひたすら薙ぎ倒していた。

そのおかげでチンピラ達はすっかり数が減った上に、ヴァレットミークで掃かれて粗大ごみのように捨てられていた。

ちなみに、はやてとフォワードチームはエリーの指示で美術品に被害が出ないように結界を張っている。

「お掃除は私にお任せあれ、ですよ！」

チンピラ達を掃き捨てながら得意げになるメイド妖精の背後に・・・

ヒョイ

「ほえ？」

いきなり現れた大柄な人影にキララの軽い身体が持ち上げられ、

ブンッ！

「ひゃーーーーー！？」

ダコーーーーーン！

投げ飛ばされたキララは見事に壁に突き刺さり、人間ダーツならぬ妖精ダーツにされてしまった。

「おうおうおう、ウチの弟分達が世話になったみたいだな？」

そしてその後ろから、赤紫のモヒカンとマッチョな肉体を持つ男が妙に大きな声を美術館のホールに響かせながら姿を現わす。

「バロンの兄貴！」

「随分派手にやられたもんだな。後は俺にやらせな」

チンピラ達のリーダー格と思われる男の姿の前に、エリー達は思わ

ず手に力が入る。

「次から次へと・・・本気で排除するか」

「おゝ？モヤシくんが俺を排除するだって？そんな細い身体で何ができる？」

チンピラのリーダー、バロンの挑発にもツルギは表情を変える事はない。

「・・・言ってる！」

その一言と同時に、一瞬といってもいい速さの鋭い手刀がバロンの腹に決まる。

「おりゃー！ー！」

エリーも負けじとエンシェントブレイバーの斬撃を浴びせる。

二人の攻撃は確かにその巨体を捕えた。

「・・・効かん」

「何っ・・うわっ！」
「うぐうっ！」

しかし渾身の一撃はバロンの巨体には全く通用せず、逆にその太い腕に捕まる。

「ふんぬりやああー！」
「うわあああああっ!？」
「きゃあああああ!？」

なんと、エリーとツルギはそのまま天井に向かって投げ飛ばされてしまった！

ズゴーン！

「がはっ！」
「あぐあっ！」

二人は天井にぶつかった後、重力に従って落下し始める。
エリーは背中の翼を展開して体勢を整え、ツルギはなんとか床に着地しようと空中で身体の向きを変えようとする。

だが、バロンの方もそう甘くはない。

「ふんっ！」

「ぐはあっ！」

太い腕の一撃をまともにくらって吹き飛ばされたツルギの身体は空中でエリーに衝突し、二人は体勢を整える事もままならず落下していった。

「ぐっ、なんてパワーなの・・・！」

「普通の人間でも鍛練次第で霊獣族を越える实力を持つ事はできるが、このパワーは異常だ・・・」

「さあ、とどめだ！」

なんとか立ち上がる二人に向かって、バロンが突進していく。

彼の力の強さは先程の通り、人二人を軽々と投げ飛ばすほどのもの。大ダメージを受け、体勢も崩れている状態の二人が今そのパワーでの攻撃を受ければひとたまりもない。

だが、それを阻むかのように、リーフが正面から飛び掛かり、バロンの顔面に向けて飛び蹴りを繰り出す。

「そうはさせぬわ!」

「ぬうつ! そんな攻撃が俺に効くかあつ!」

いとも簡単に蹴りは防がれ、反撃の隙を与える。

しかし、それはフェイク。

本命は後ろに回り込んでいたブルースの攻撃だった。

「今じゃ!」

「おっしや、くらえー!」

振りかぶる足からの強烈な蹴り上げが・・・

ゴキ~~~~~ン

「ぎよわあああゝっ!」

バロンの『大変な場所』に見事に直撃した。

それを見たエリオは痛々しい顔になる。

「スバル、あれって本当に痛いのかな？」

「・・・多分ね」

「私達女性にはあの痛みは分かんと思うで」
「??????」

「キュクッ？」

「おによれ、よくも俺の大事な所を！」

「やっぱ効いた！」

「そりゃそうじゃ」

「エリー様も覚えておいたほうがいいですよ？チカン撃退のために
（↑自力で壁から抜け出した）」

「そ、そうね（苦笑）」

そのやり取りを見たツルギはバロンに向き直る。

「さて、今度はこちらの番だ！」

再び印を結び、その手に青白い炎を宿す。

炎は徐々に大きくなり、やがて巨大な十字の形になり、さらに回転し始める。

この光景にはエリー達も、さらには敵であるはずのバロンやチンピラ達、戦いを見守っている従業員達も思わず見入っていた。

「これで終わりだ！忍法・火炎手裏剣！」

大きく振りかぶり、十字の炎が投げ付けられた。

バロンは我に帰り、火炎手裏剣を避けようとするが、痛みと熱で動きが鈍る。

そして火炎手裏剣が直撃すると同時に、炎が弾けた。

「うわっちゃあああああああああ！！！！」

一瞬にしてバロンの身体は火だるまと化した。

そこにエリーが近くにあった消火器を噴射し、火はおさまった。

「ま、まいった・・・」

バロンは服が燃えてパンツ一丁になっていたが、忍者の術にもミッ

ド式・ベルカ式魔術の非殺傷設定のようなものがあるのか、身体には火傷一つなかった。

その時、その近くに何かが落ちているのを見つける。

「なんですか、これ？」

「熱でひん曲がっておるが、注射器のようじゃ」

「やっぱりそうか」

一呼吸置いて、ツルギが話す。

「そいつはおそらく、スターラルガ製の肉体強化薬。一言で言えばドーピングってやつだ。前に父さんが押収してきた事があるから聞いた事がある」

「ミネルヴァは生物兵器で、スターラルガは違法な薬物での肉体強化か。まあ、どっちもどっちだけどね。どちらも殺し合うために作られているのだから」

「エリーの言う通りやな」

「薬物乱用はダメ、ゼッタイ！です！」

その後、エリー達は残りのチンピラ達を適当に片付け、纏めて現地の警察に引き渡す準備をする事となった。

こうして、波乱の美術鑑賞は幕を閉じた。

—さらに翌日—

「気をつけるんだぞ」

「色々とお世話になりました！」

エリー達は旅を再開するため、荷物を纏めていた。

その傍らには、ツルギの姿もある。

「仕事はどうしたの？」

「ああ、それならしばらく長期休暇をとる事にしたんだ」

「え？」

「何と言うか、ちょっとやりたい事ができたんだ。エリーがそんな少ない人数で平和を呼びかけているのを見てな・・・」

しばしの沈黙。

そして、エリーはその意図を理解したのか、手をさし出した。

「長旅になるけど、覚悟と準備はできてる？」
「・・・ああ！」

「いや、賑やかになりそうやな」
「あの人が居れば百人力だね、ねえ、ティア？」
「落ち着け！」
「後で修行した僕を見てもらおうかな・・・」
「ツルギさんって、本当に頼りになりそうだし」
「キュウ〜♪」

その横では、ヤイバが『行ってこい』と言うような顔を見せ、牙影組の組員達は涙ながらに見送りの準備を始めていた。

「あ、そうだ！」
「？」
「出かける前にあいつに挨拶をしておかないと。この際だからエリーにも紹介するぞ」

そう言うツルギは屋敷の窓から外へ飛び出し、建物の上を飛び移

りながらどこかへ向かう。

「あ、待ってよう！」

エリーは翼を広げて窓から飛び立ち、それを追う。

他のメンバーは慌てて玄関から外に出て、必死で走ってついて行った。

— T o B e C o n t i n u e d .

STAGE 9 Bパート（後書き）

という訳で、ツルギが仲間になりました。

果たして、彼はどこへ向かっているのか？
そして、『あいつ』とは？

ツルギ

「次回、『魔導戦記リリカルなのはAnother world』
STAGE 10『学園のツンデレ？スズメバチ』をお楽しみに！」

キララ

「祝、20000アクセス突破&第十話！」

STAGE 10 魔法学園のツンデレ？スズメバチ（前書き）

アイマス×逃走中を執筆していて遅くなりましたが、なんとか完成。

それでは、どうぞ！

STAGE 10 魔法学園のツンデレ？スズメバチ

「や、やっと追いついたぞい・・・」

息を切らす仲間達の目の前には、先行していたエリーとツルギの姿。

その後ろには、とても立派な学校らしき建物があった。

「ここは・・・？」

「僕の学生時代の母校、『アルタイル魔法学園』だ。あいつはここ
の非常勤講師をしているんだ」

「そういえば、はやて。お主はツルギの知り合いなんじゃから、『
あいつ』の事も知っとるんじゃない？」

「そうなんや。あの人は、所謂ツンデレや」

ツンデレだと言うはやての話を軽くスルーし、一同は学園の入り口
へ向かう。

ちなみに、ツルギがすでに『あいつ』に連絡して話をつけているらしい。

そして、学園の構内に入った所で騒動は起きた。

「あ！ツルギ先輩だ！」

「本当だー！」

「誰、あの女の子？」

「ねえ、なんか女の子達が集まってきてるんだけど」

「お主は学生時代にはモテモテだったんじゃない」

「確かに、ツルギはホントカッコええからな」

「俺もモテてー！」

「ブルースさんは十分モテモテだと思いますよ？」

「特に私のメイドの先輩方から」

「珍しいですね、ティアさんが自分からそんな事言い出すなんて」

「あー、さすがにティアもそんな年ぐえっ！（ティアナに殴られた）」

「???」

「キュ〜？」

そんな話をしている間に女子学生達は集まり、ツルギに向かって迫る。

「みんな、校舎に逃げるぞ！」

「合点！」

「やばいって！やばすぎるだろこの学校！」
「僕は韓流スターになったつもりはないんだが」

校舎に入ってもなお女子達の追跡は続く。
廊下を力の限り走り回り、階段を駆け上がり、または駆け降りたりを繰り返し、壮絶な逃走劇と繰り広げている。

逃走劇といえば、新たに『run for money 逃走中
with アイドルマスター』を執筆中なのでそちらもぜひどうぞ。

「宣伝乙」

「言ってる場合か！」

そして一同は近くの曲がり角を曲がる。

黄色い声を発しながら女子達がそこに来た時には、六人の姿がない。

代わりに居たのは、一人の獣耳に制服の少女・・・

「せ、先輩ならあっちへ逃げましたよ」

・・・のコスプレでかわいい声を発するツルギだった。

「いや、やっぱいつ見ても完璧な女装や」

「まさかあやつにあんな特技があるとは・・・」

「全く違和感がないです」

「ぜひフォルティス・レイン城のメイド服を着てもらいたいわね」

「おい馬鹿やめろ」

近くの部屋に逃げ込んだエリー達が彼の女装に思い思いの感想を述べている間に、女子達はあっさり騙されて見当違いの方向へ向かっていった。

辺りが静かになった頃、五人が部屋の外に出る。

「いやはや、迫真の名演技だったぞ」

「これをそう言ってもらえるのは悪いものではないな」

「すっごく可愛くてクラクラしそうです」

「後で写真撮ってもええか？」

「コラ！そこの変態妖精に変態狸！」

「しかし、なぜ女装なんじゃ？変装なら他にやりようがあっただろうに」

「いや、僕ってこんな顔だから女装が一番効果的なんだよ」

そう言うと、いきなり天井を見上げる。

「って言ったのはお前だよな、ミカーサ」

「「「「!?!?!」」」」」

そこには、ティアナより色の濃い茜色のショートヘアで白い服の女性が天井に張り付いていた。

服装は白く薄い長袖にスバルのバリアジャケットのようなズボンで、へそが露出していた。

ミカーサと呼ばれた女性はムスツとした顔で床へと降りる。

「何よ、そんな爽やかな顔して・・・いくらなんでもアピールしすぎでしょ!」

「お? なんか顔が赤いで、ミカーサちゃん?」

「なっ、はやて! 別にあいつの格好にドキドキしてた訳じゃないわよ!」

「・・・これがツンデレってやつなのかしら?」

「知らなかったのか、このビリビリ姫」

―数分後―

「もう大丈夫か？」

「うっさいわね・・・」

ミカーサが落ち着きを取り戻した頃、エリー達は自己紹介をした。最初はエリーが一国の王女だと知ってまた驚いていたが、エリーの性格が庶民的なのですぐに普通に話すようになった。

「で、そのお姫様が世界平和を呼び掛けるために旅をしている訳ね。途方もない話だわ」

「今私にできる事はこれくらいしかないからね」

エリー達の旅の話を聞き、ミカーサは穏やかな表情になる。

そして一言。

「あたし、嫌いじゃないわよ。そういうでかい事考える奴は」

・・・

「ぎよええええ〜！」

一瞬の出来事だった。

いきなりミカーサがはやての懷まで潜り込んだと思ったら、強烈なアップパーカットが炸裂し、はやての身体が天井に叩きつけられた。

「っ、強え！」

「女の子の怒りは恐ろしいのですよ〜」

「キララ、分かってるじゃないの」

その後落下したはやてはブルーが受け止めました。

〜校舎外〜

「今はやてさんのすごい悲鳴が聞こえたような」
「多分、エリーさんに雷を落とされたんですよ」

キャロにヒーリングを掛けてもらいながら校舎を見つめるフォワード陣。

雷を落としたのはエリーではなくミカーサである事は知るよしもない。

「・・・？」

「どしたの、キャロ？」

「なんだか、いやな風が吹いてるような気が・・・」

「キュルル？」

四人は不安になり辺りを見回すが、何もない。

何もないように見えた。

「いやな風とは、失礼ですわね」

「「「！？」」」」

（校舎内）

「大丈夫？」

「ギリギリアウトや」

「だろうな」

はやてを介抱しつつ、エリーはミカーサの一撃に感心していた。

「お見事だったわ」

「中国出身の母から拳法を教わっていたからね。中国雑技もできるわよ」

「人間でありながら魔法とかなしでこんなパワーとスピードが出せるとは、かなり厳しい修行を積んだのじゃろうな」

その時、『人間』という言葉にミカーサが反応し、頭の上の方を指さす。

そこには、触角と思われるものが生えていた。

「むむっ、これは？」

「ふふっ。母が『妖虫族』っていう種族で、あたしにもその血が流れてんの。ツルギが獣なら私は虫って訳よ。ちなみに、スズメバチの妖虫族だからお尻の針だって・・・ほいっ！」

ジャキーン

ミカーサの尾骨にあたる部分から、鋭い針が生える。

「おお！」

「うっかり触ると酷い目にあうわよ」

針はミカーサのズボンを貫通して生えているが、ズボンの穴は元から自分で空けたものらしい。

余談だが、ツルギも尻尾を外に出すためにパンツとズボンに穴を開けている。

この後もエリー達とミカーサは色々な話をするのだった。

「そういえば、自己紹介がまだだったわね。あたしは『ミカーサ・レギンレイヴ・水上月』^{ミカミツキ}よ。よろしく！」

「ツンツンはどこ行ったんや？」

「うっさいわね！あれぐらいで勘弁してやったんだから感謝しなさいよね！」

ミカーサとはやてのやり取りを見て思わずエリー達も笑顔をこぼした。

・・・その時だった！

バリーーーン！

「きゃああああ！」

「な、何だ！？」

突然近くの窓に何かが突っ込み、ガラスが砕け散る。

飛散したガラスの破片の中心に見覚えのあるピンクの髪があった。

「キャ、キャロ！？」

「は、はやてさん・・・ゲホッ！」

「かなりの大ダメージのようじゃ」

「一体何が・・・！」

「エ、エリー様？」

窓の外からただならぬ気配を感じ、エリーは翼を広げて割れた窓か

ら外に出る。

「みんな！」

「あっ、エリー！」

「さっきキャロがこっちに飛んできたけど、何があったの！？」

「って言われても、先に手を出したのは・・・」

スバルが指し示す方向に目を向ける。

「まさか、あのエリー王女に直接会えるとは・・・」

そこには、やや薄い紫色の着物を纏った美しい女が佇んでいた。

「初めまして、エリー王女。『スターラルガ・ファイブナイツ』が
一人『黒風のグーナ』と申します・・・」

|
T
O

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d.

STAGE 10 魔法学園のツンデレ？スズメバチ（後書き）

ツルギ

「ちなみに、はやてはミカーサとも知り合いという設定だ（後付けとか言うな）」

ミカーサ

「次回は強敵との戦いね！STAGE 11『強襲！スターラルガ・ファイブナイツ』を・・・べ、別に見てほしくなんてないんだから！」

はやて

「やっぱりツンデレや」

STAGE 11 強襲! スターラルガ・ファイブナイツ Aパート (前書き)

基本的にこの作品のバトルシーンはBパートになります。

- それより、オープニングにもっとピッタリな曲を見つけてしまった・
- ・

STAGE 11 強襲！スターラルガ・ファイブナイツ Aパート

先程のキャロは彼女の攻撃によって吹き飛ばされたのだろう。

目の前の着物の女性は自らを『黒風のグーナ』と名乗り、お辞儀をした。

礼儀正しい印象ではあったが、戦闘を始める気になればいつでも戦えるぞという異様な雰囲気を感じさせた。

そして周りには邪気を纏った、その名の通りの黒い風が渦巻いている。

仲間達とミカーサも遠くからそれを感じ、すぐにエリーの元へ駆け付ける。（ツルギは服を元に戻した）

「しかしまさか管理局の連中を連れているとは。貴女は局には散々酷い目に合わされたのでは？」

「それが初対面の私に対して言うセリフ？」

物静がではあるが、少しでも恐れを見せたら終わる。そうとも感じさせた。

「あなたの目的は何？なぜ戦う必要があるの？」

「戦う理由など考えなくても分かるでしょう？それに・・・」

グーナははやてを指差して言い放つ。

「四年前の事件の裏で糸を引いていた管理局の人間が、この場所
のこのことやって来た事。私には理解しかねますわ」

「嫌な事を思い出させてくれたわね・・・」

エリー達の後ろに居たミカーサの表情が曇る。

「四年前の事件？」

「四年前のあたし達の卒業式の日、ミネルヴァの過激派がこの学園
を占拠する事件があったのよ」

「なっ！？じゃああなた達も・・・」

ツルギやミカーサもエリーと同じような経験をしていたという事だ。

国そのものを荒らされ、姉と記憶を失ったエリーに比べれば、受け
た傷は深くはない。

しかし、規模がどうあれ、管理局の後押しを受けたミネルヴァによ

って引き起こされた事件であるという事は同じだった。

故郷を荒らされたエリーと母校を荒らされたツルギとミカーサ。その出会いは単なる偶然なのか、それとも何らかの数奇な運命だといふのか。

それを知る術はない。

「しかし、なぜそのスターラルガ・ファイブナイツがわざわざここに来る必要があったのじゃ？」

「それは当然、アルタイル魔法学園がスターラルガ派だからです。あのような事件の被害に合っているのですから、局に敵対の意思を持たない方がどうかしていますわ」

嘲りの感情を表に出しながら答えると、今度はツルギの方を向く。

「もう一つの理由は、この学園に勤めていたある教員が今のファイブナイツの一人であるから、心配している事。そうだろ？」

「あなたや生徒達の相談相手であったラクウェル先生の事ですわね？彼女はとても元気にしていますわ」

ツルギの問いに笑顔で答えると、再びはやてに視線を向ける。

「さて、八神はやて、そろそろ貴女にはここで死んでもらいましょう」

「……っ！」

グーナが取り出した扇子をはやてに向ける。

「このまま放っておけば、貴女がここに居る事を嗅ぎ付けた連中がいつ『アレ』を奪いにやって来るか分かりませんわ」

すでにグーナは周りの黒い風を扇子に集め、はやてに向けて振りかぶっている。

『アレ』とは何かを考える暇もなく攻撃が始まろうとしていた。

「ここで私と出会った己の不幸を呪いなさい！」

ブオオオオオオオーッ！

風がはやてに向かって放たれた。

フォワードチームはグーナが構えた時からすではやてを守ろうとしていたが、傷ついた身体では間に合わない。

はやてがバリアジャケットを展開するより速く、風はすぐそこまで迫る。

バチバチバチッ、バシィッ！

だが、風ははやてを切り裂く寸前で紅の雷に阻まれた。

「・・・・・・・・」

「確かに、局は私からたくさん大切なものを奪うだけでは飽き足らず、この学校にまで刃を向けた。それに対して敵意を向ける気持ちには分かるわ・・・」

バリアジャケット姿でエンシェントブレイバーを構えたエリーが、同じく自分達の相棒を構えたブルース、リーフ、キララをバックに叫ぶ。

「だけど、自分達の組織に罪がある事を認めている者にまで手を上げるなんて、私には理解できない！」

「お前は『管理局員だから』というそれだけの理由で殺し合うというのか！？こいつらの中身を知ろうともせずにか！？」

「まあ、お主達も管理局もただの一人よがりでしかないという事じゃ」

「誰かの命を奪った後には、虚しさしか残らないですよ・・・」

横に居るツルギとミカーサも構えをとる。

「そちらに本気で戦う意思があるというのならば、僕達は全力で立ち向かう！」

「先生が私達と一緒にいたこの場所で、先生の今の仲間であるアンタに人殺しをさせる訳にはいかない！」

「……分かりました」

グリーナを中心に吹く黒い風がより激しさを増す。

「私達の邪魔をするというのならば、手加減はいたしません……」

はやてがフォワードチームを下がらせる間、互いの睨み合いが続く。

キーン、コーン、カーン、コーン……

戦いの始まりを告げるかのように学園のチャイムが鳴り響いた。

「・・・参ります！」

― B
パートへ続く

STAGE 11 強襲! スターラルガ・ファイブナイツ Aパート (後書き)

強敵との対決は躍動感あふれるものにしたいです。
文章で表現するのは難しいと思いますが。

STAGE 11 Bパート（前書き）

お待たせしました。

エリー一行VS黒風のグーナ、始まります。

STAGE 11 Bパート

チャイムと同時に、エリー達とグーナは踏み込んだ。

「はあああああっ！」

「ふうっ・・・！」

エリーとリーフの一閃が振るわれればグーナは鮮やかにかわし、扇子での反撃をミカーサが抑える。

キララが放つ氷の息吹が黒い風で相殺され、その余波はツルギとブルースの体勢を崩す。

流れるような戦いに、はやてとフォワードチームはただ見入っている事しかできなかった。

「あたし達じゃ、とてもじゃないけどついていけそうにないわ」

「これがアナザー・アースの魔導士同士の真剣勝負。私達の何倍も戦いらしい戦いといっても過言ではないで・・・」

「ハイヤーーーッ！」

「だあああああっ！」

ミカーサの拳と蹴り、ツルギの体術がグーナを捕らえようと様々な形で振るわれる。

しかし体術ならグーナも負けておらず、扇子で攻撃を受け流して体勢を崩させ、黒い風で反撃を始める。

風をかわした二人が横に跳ぶと、エリーが低空飛行で迫り、背後からはリーフとキララが遠距離攻撃を放つ。

「迅雷烈空！」

「テュルフィング！」

「コラムシューター！」

「……っ！」

横薙ぎの一撃はしゃがんでかわされ、地を這う剣閃と氷柱の攻撃は扇子で華麗に捌かれていった。

「やはり、強いわ……」

エリーもグーナの強さを認めた上で、彼女を止めるために再び刃を構える。

「では、今度は私から行かせてもらいましょう」

ヒュッ！

「なっ、うわっ！」

非常に速い扇子での攻撃がエリーを襲う。

「次です！」

続いて、素早い動きでブルース達との間合いを詰め、

「そこっ！」

「うおわっ！」

ブルースに蹴りを入れ、

「せいっ！」

「ぬわっ、やるな！」

扇子でフォルトレイヤーと火花を散らし、

「くろかまいたち黒鎌鼬！」

ズバババババババツ！

「ひゃあうううっ！」

リーフと鏢競り合いをしつつ、距離を取ろうとしたキララを邪気の刃で切り裂く。

一瞬の隙もない連続技に、エリー達のコンビネーションが一気に崩された。

「少しはやるようですね」

向きを変えたその先には、拳を構えて近づくミカーサの姿。

「砕けろ、崩絶拳！」

バシンッ！

「くう・・・」

「・・・スキあり！」

扇子でミカーサの拳を防ぎ、押し合うグーナの顔面に向かってツルギの跳び蹴りが迫る。

「なんの！」

「「うわわっ！」」

しかし、グーナは負けじとミカーサの腕とツルギの脚を掴む。

グーナの魔術によって発生した上昇気流に乗せて二人は空中に投げ飛ばされるが、うまく体勢を立て直して地面に着地。グーナへの反撃に移る。

戦いが始まってから数分が経過し、お互いに体力を消耗し始めている。

疲れ具合が同じといえば互角のようであるが、この戦いは一対六。

それでも体力の消費が同じぐらいである事がグーナの強さを示して

いた。

エリーもなんとか着いていつているようだが、内心では「一対一ではすぐにやられるだろう」と思い始めていた。

「はあっ、はあっ、はあっ・・・憎たらしいわね・・・！」

「ふう、ふう・・・それはお互い様ではなくって？」

再び扇子が構えられる。

「私にはこれ以上ダラダラと続ける時間はありません。そろそろ終わらせてもらいます」

黒い風が集められた扇子が振りかぶられ、グーナは攻撃の体勢になる。

しかし、先程に比べて妙にモーションが大きい。まるで防いでくださいと言っているようなものだ。

その時、グーナの視線が別の方向へ向いた。

「！？まさか！？」

その先には、はやての姿。

「もう遅くってよ？^{くろあらし}黒嵐！」

ズゴオオオオオー！！

漆黒の風が渦となり、まっすぐにはやてに向かって放たれた。

「・・・・・・・・！」

ズガアアアアアッ！

そして、辺りが砂煙に包まれた・・・・

「は、はやて!?!」

「あいつ、あくまで狙いははやてだったっていうのかよ!?!」

グリーナのあの様子ならばやりかねない。

リーフがそう言おうとした時。

「エリー様は?」

キララの言葉にハッとする一同。

はやてが居た方向に目を向けると、一つの人影が立ち塞がるように立っていた。

砂煙が晴れ、傷ついた翼を盾にするその姿が現れる。

「・・・エリー?」

「ぐうつ・・・ちよつと痛かったわ」

ギリギリではやての前に立ち、その翼で風を受けきっていた。

仲間達とフォワード陣に向かってエリーは小さく笑い、再びグリーンに鋭い視線を向ける。

「愚かな。そこまでしてその女を守る意味があるのですか？たとえその者があなたが信じた通りの人間だったとしても、私達がそれを受け入れるとでも？」

「・・・だから何だっていうの？今ここで『エリー・ミスト』という一人の人間、じゃなかった、半鳥半人が『八神はやて』という一人の友を助ける事に、理由なんて必要あるの？」

はやてが見たそれは、とても強い目だった。

いくら傷つき、冷たい声を浴びせられ、踏みにじられても決して折れる事のない強い信念を感じた。

かつて自分達は『エリー・ミスト』という存在を、他の誰とも変わらない一人の少女として助けた。

今度は、自分達が助けられる番であることに、はやてはなんだか照れくさそうになる。

「カッコ悪いな、私」

「何か言った？」

「それが貴女の正義という訳ですね」

グリーナの声に、エリーの構えがより鋭いものになる。

「確かに、貴女には貴女の正義がある。ですが、それは他人にとっての悪にもなりえる事は貴女も分かっているはず」

ブワアアアアアッ！

「「！？」」

巻き起こされる竜巻に、二人の身体が空中に投げ出された。

エリーは翼を広げ、落下するはやてを掴む。

だが、その一瞬が命取りとなる。

「私達にも、ゆずれないものがあるのです」

再び邪気を帯びた風が扇子に集まり、二人に狙いを定める。

「またあの技か!？」

「ミカーサ、奴を止め・・・」

「ダメ、間に合わない!」

そして、扇子が振るわれた。

「花のように散りなさい」

フォツ・・・

「しんぶ・くろかみかぜ
神舞・黒神風！」

ズゴアアアアアアアアアアアアアアアアア！！

「「きゃあああああああああああつ！」」

先程よりも遥かに大きく激しい邪気の風が竜巻状になり、二人を飲み込んだ。

二人の絶叫は激しい風の音に掻き消され、その身体が校舎に叩き付けられる音が鈍く響き渡る。

「ふっ、ぐうう・・・！」

「あ・・・うう・・・！」

それでもなお、グーナは扇子を持った手とは反対の左手で風をコントロールし、攻撃が続けられる。

「捕らえました。このままとどめを刺させてもらいましょうか!」

「ぐう……うううっ!……負け、てたま、る、かつ!」

それでもエリーは退く事を知らない。

「な……何するつもりなんや!?」

エリーは邪気の竜巻の中心に左手を突っ込んだ。

「あつ、ぐうう……何のこれしきっ!」

「!」

風に切り裂かれ、傷だらけになっていく左手に、紅い光が灯る。

この一発に、エリーは勝負をかける！

「――こうげつ紅月……！」

バチバチバチ……

「――ばくらいせん爆雷閃っ！」

ズバアアアアアアアアアアアアアアアアッ！

左手から放たれた激しい紅の雷が邪気の風を切り裂いていく。

グーナのこの技によって巻き起こされる風は竜巻を横にしたようなもの。

竜巻の中心は無風であるために、エリーの雷はその空間を切り裂いていったのだ。

偶然だろうが狙ったのだろうが、そんな事はもはや関係ない。

「まさか、こんな事が!？」

最後の最後まではやてを護り抜こうという思いが、目の前の歪みを打ち砕いたのだ。

ピシャーーン！

「ぐあああああああああああああああああああああ
！！！」

雷はそのまま勢いを止める事なく、グーナを貫いた。

倒れたグーナに背を向け、エリーははやと目を合わせる。

「私、ちゃんと護れたかな？ はやての事」

「こんなにボロボロになって・・・もう十分や」

しかし・・・

「エ、エリーさん！」

「・・・・・・・・！」

キャロの呼び掛けに反応し、グーナの方を向く。

「お見事・・・ですわ・・・」

「なっ、立ち上がったじゃと!?!」

「マジかー!?!」

「エリー様のあんな攻撃を喰らってまだ倒れないなんて・・・」

「僕は久々にミカーサ以外にあんな女を見たような気がするな」

「なんて奴よ・・・」

少しフラフラになりながら、再び扇子を向ける。

「言ったはずです。私達にも、ゆずれないものがあると!」

それに対し、はやてはシュベルクロイツとバリアジャケットを展開した。

「そっちが本気でウチを殺すつもりなら、全力で抗ってやるで!」

エリーと仲間達は再び戦闘体勢をとり、一触即発の雰囲気になる。

だが、そこに・・・

「そこまでだ! 双方共、戦闘を中止するんだ!」

現れたのは、やや青みがかった髪、見覚えのある青年の魔導師。

「ク、クロノ君やないか！何でここに？」

学園の戦いは予期せぬ方向へと進み始める・・・

—To Be Continued.

STAGE 11 Bパート（後書き）

リーフ

「みんな大好きKYさんの登場じゃ！」

ミカーサ

「待ってないわ！」

はやて

「という訳で、STAGE 12 『破滅の堕天使』をお楽しみにな〜」

キララ

「ダークサイドのエリー様・・・ゴクリ」

ツルギ

「やっぱ次回予告に多少のネタバレは必要なのか？」

STAGE 12 破滅の堕天使 Aパート（前書き）

今回は特に力を入れて執筆した回です。

それでは、どうぞ！

STAGE 12 破滅の墮天使 Aパート

「そこまでだ！双方共、戦闘を中止するんだ！」

アルタイル魔法学園が始まった、スターラルガとミネルヴァの停戦を求めるエリー一行と、ミネルヴァと管理局の排除を企てるスターラルガ・ファイブナイツの一人、黒風のグーナの戦い。

その戦いははやての友人である時空管理局員の一人、クロノ・ハラウオンの登場によって中断された。

はやてとフォワード陣は驚き、エリー達は疑問符を浮かべ、グーナは殺気の籠った目を向ける。

「……管理局の犬が何をしに来たのですか？」

「スターラルガ・ファイブナイツか。お前と戦いに来た訳ではない。僕達は……」

だが、クロノの声は別の声に遮られた。

「例のものは学園でちゃんと安全に管理してあるみたいだから、問題はないぞ」

「確認したらさっさと帰りなさい。学園にゴタゴタを持ち込まれたら非常勤のあたしだって困るんだから」

声の主はツルギとミカーサの二人。

まるでエリーに対してとなのはやフェイト、はやてのように普通に話し掛けた。

「ん、そうか。じゃあ後で改めて確認しに行くぞ」

「あまり派手な事はするんじゃないわよ……」

「ホント、ご苦労なこった」

「ねえ、ツルギ達と彼はどういう関係なのかしら？」

「そういえばそうだね」

「ティアさん、はやてさんから何か聞いてないんですか？」

「四年前の事件の事で色々話したって事ぐらいなら」

「ああ、あの人が言ってたあの事件？」

「……………」

「お主、黒風のグーナといったか。そんな顔してどうした？」

「なんだか、私が空気ですわ……」

「敵役が空気になるって……なあ……」

「なぜ私に振るんですかー!？」

そんな話をエリー達がしている間に、クロノの方も話が進む。

「とにかく、今の僕には君達と敵対する意思はないという事は本当だ。信用できないなら、こうしても構わない」

そう言うと、その手に握られてる杖型のデバイス『デュランダル』を待機状態に戻し、ツルギとミカーサに二重の封印をかけさせた。

「まあ、戦う意思はないって事だけは信用してあげるわ。ところで、後ろのは誰？」

クロノの後ろには、一人の茶髪の男と多数の局員が控えていた。

「初めまして、影原さんに水上月さん。時空管理局のヨーデル一等陸士です」

「ど、どうも……」

（初対面だったのに、馴れ馴れしい奴だな……）

第一印象としては特に悪い事はなさそうに感じた。

後ろの部下の様子から見ても、信頼が厚いイメージがある。

だが……

「あれ？クロノ君の周りにこんな人おったかな？所属が違うだけかもしれないけど」

はやては若干疑っていた……

「例のものはちゃんと危険がないか確認しておきますからご安心を。だから、そちらの王女様が出る幕はありませんよ」
「ですって。今はおとなしく待ってても大丈夫……」

ズドン！

「……………！？」

返ってきたのは、アサルトモードのエンシェントブレイバーから放たれる魔力弾だった。

弾はヨーデルの顔の横を掠め、背後の部下に命中。

攻撃を受けた部下は起動状態のデバイスを取り落としていた。

「…………この程度で一国の王女たるこの私をごまかせると思ってた？」

途端にヨーデルの顔から殺意が感じられ始めた。

「…………なぜ分かったのですかな？」

「あなたはうまくごまかしてたようだけど、後ろの連中の目が笑ってないわ」

それを聞き、ヨーデルの目の色が180度変わった。

エンシェントブレイバーの二倍はあろう大剣型のデバイスを起動させ、戦意を露にした。

「さすが一国の王女、人を見る目は十分のようだな。まあどちらにせよ、お前はここでズタズタにされて管理局のモノになるんだがな！」

戦いが始まろうとした時、デバイスを構えるヨーデルにクロノが詰め寄る。

「待つんだ！僕達はそんな事をしに来た訳じゃないだろう！」

「うるさい！アナザー・アースも、あのような力も、全て我々が管理するべきなのだ！」

クロノが静止するも、聞く耳を持たない。

それを見て、戦う意思を感じ取った仲間達は気合いを入れ直す。

「……変わっておらん、管理局は。何も……」

「エリー様の敵は私の敵、そして、フォルティス・レインの敵です！」

「それは言いすぎだと思うけど、そいつがあたし達の味方ではない事は確かかなようね」

「なーに、修行感覚でボコボコにしてやるさ！」

「俺も居るぞ！」

「……私も空気を読む必要があるようです」

グーナもヨーデルに扇子を向ける。

「同じ管理局員として、こんな事は止めなアカン！みんな、いくで！」

「」「了解！！」「」

はやてとフォワード陣も、自分達と同じ局員であるヨーデルに刃を

向ける覚悟を決めた。

しかし、ヨーデルもただ見ている訳ではない。

いつの間にか学園の敷地内には多数の陸戦魔導士達が転移し、あらゆる角度から攻撃体勢をとっていた。

「我々の邪魔をする者はすぐに消し去ってやる！ 勿論、お前もだ、クロノ・ハラウオン」

「なんだと!？」

「え!？ 同じ局員の仲間じゃなかったのか!？」
「そういえば、ハラウオンの血筋の者を快く思っていない奴も居たのう」

「当然、あの八神はやて殿でも邪魔をするなら始末するまでよ……
…。上にはスターラルガの仕業と言えば済む話だ」

ヨーデルが顎で合図を送ると、魔導士達が身構える。

「さあ、我々の正義を拒む愚か者共を一人残さず抹殺しろ！そして、破壊の雷と『知術の石』をミッドへと持ち帰るのだ!」

それと同時に、魔導士達が一斉に襲い掛かる。

だが、四方八方から迫る多数の敵にエリーの仲間達とフォワード陣は突っ込んでいった。

一方、エリーとはやて、グーナの三人はヨーデルと対峙する。

「不思議ですわね。つい先程まで倒すべき敵として戦っていた私達が、こうして同じ敵を倒すために共に居るとは……………」

「エリーにかかれば、人を繋ぐのなんて簡単や！」

「できればこの調子で奴とも戦わずに済ませたかったけどね……………」

「何を生ぬるい事を！身の程を教えてやる！」

はやてとヨーデルはミッド式飛行魔法で、グーナは風の足場で、エリーは自らの翼で天空へと舞い上がり、空中戦を開始した。

「うおおおおっ！」

「ファントム……………ブレイザアアアッ！」

「スピーリアングリフ！」

「フリード！ブラストフレア！」

フォワード陣の連携により、局員は次々と蹴散らされていく。

一方は最強の魔導士・高町なのはの教えの元で鍛練を詰み、のちのJS事件解決に貢献した四人の戦士。

一方は事件後に集められた下っ端の魔導士達。

数ではあちらの方が圧倒的に多いが、一人一人の力の差は歴然だった。

「おらあっ！もういっちょ来やがれ！」

「もっと修行っばい事をさせろ！」

「天下の管理局が、だらしないわね！」

「ヴァレットミークに粗大ごみ扱いされなくなったら、おとなしく帰りなさい！」

「お主ら、揃いも揃って修行が足りぬわ！」

こちらでは、ブルースとミカーサの力強い攻め、リーフとツルギのスタイリッシュな攻撃、キララのまるで踊るような立ち振る舞いに、瞬く間に局員達は薙ぎ倒される。

一国の王女のSPに元管理局員、人間一人を殺す力を秘めた氷の妖精、半獣の忍者、半虫の拳法家と、実力者揃いの彼等はそう簡単には止められない。

そして、空中でも……

「おりゃー！招雷閃四連打ー！」

「切り裂け、黒木^{くろこがらし}枯！」

「クラウ・ソラス！」

「ぐおおっ！やるな！」

三人同時の攻撃がヨーデルを怯ませ、エリーが追撃に向かう。

エリーはともかく、はやてとグリーンはかなりの強さを誇る。

たとえヨーデルに実力があっても、決して簡単に勝てる相手ではない。

実際、エリーがグリーンを一度退けられたのも7割ぐらいはマグレだったたりする。

地上でも空中でも、戦いはエリー側に有利な流れとなっている。

だが、それが三人の不審を生む。

「……………はやて」

「やっぱそう思うか」

「確かに」

三人はヨーデルや局員達が本気で攻めていないように感じていた。

物量で攻められればさすがに苦戦を強いられるだろうとエリーは思っていたが、地上の仲間達にはその様子がない。

単に準備不足だったのか、調子が悪いのか、あるいは罠か……

だが、エリーの刃に迷いはない。

「……………もし誘っているつもりならば、罠ごと打ち砕く！」

掲げるエンシェントブレイバーが激しい雷を纏い、エリーはそのまま突撃する！

「必殺！迅影・六道斬っ！」
じんえい りくどうざん

斬撃は紅い光となって閃き、天空に六芒星の方陣が描かれていく。

ヨーデルは必死で防御するが、電撃のダメージがその身体を襲う。

ガキイーーーーン！

「ぐっ！」

最後にはデバイスが鈍い音を鳴り響かせながら手から弾け飛んだ。

「とどめ！」

ズバーーーーーッ！

「ぐおおおおお！」

エリーの刃は最後にヨーデルを方陣ごと切り裂き、大地へと叩きつけた。

「……どうだっ！」

剣先を地面のヨーデルに向け、余裕の表情を見せた。

「ウチらの勝ちや！」

「帰って始末書でも書いていた方が身のためです」

「……………」

……………

「……………やれ！」

ズガガガガガーーーーン！

「「……………！？」」

突然の背後からの攻撃を受け、三人は爆風と共に何が起こったかも分からないまま墜落した。

「ああっ、エリー様が！」

「「何っ!？」」

「あ、あれは何じゃ!？」

「あれは!？」

「はやてさんが……やられた!？」

ブルース達とフォワード陣が空を見上げると、いつの間にか数人の空戦魔導士が転移し、何か手袋のようなものを構えていた。

……と、その時!

シュババババババンッ!

「なっ!?! ヤバ………」

ズドドドドドドド!

二つのグループも同じように攻撃を受け、辺りは爆風と煙に包まれる……

「…………ふはははははっ！完全に引っ掛かりおったわ！しかし、まだ誰も死んでいないようだな……………」

煙が晴れると、ボロボロのエリー達の姿が見えた。

「ティアさん、大丈夫ですか！？」

「なんとかね。だけど、スバルとエリオが……………」

フォワード陣はスバルとエリオが直撃を喰らい、戦闘不能になっていた。

「無事ですか！？」

「キララが居なかったら全員粉々だった……………」

「俺は平気だ！」

「まさか、こんな不意打ちを仕掛けてくるとは……………」

「しかし、フィンガーミサイルか……。局も随分と落ちぶれたものだ」

キララの氷の壁でなんとか攻撃を凌いだブルース達だったが、こちらもかなりのダメージのようだ。

エリー達が有利に見えたこの戦いは、全てがヨーデルの策略。

本気を出していなかったのは、空戦魔導士の援軍の到着までエリー達を油断させるためだったのだ。そして、手袋型の機械から発射されるフィンガーミサイルと呼ばれる小型ミサイルで地上と空中から同時に制圧する事が狙い。

エリー達はヨーデルの策略にまんまと嵌まってしまったのだ。

「ぐっ…………自分達で規制してる質量兵器に手を出すなんて…………二人共、大丈夫!？」

「ちよつと…………キツイかもしれませんがんわ」

「エリーこそ、大丈夫なん…………?」

生身の翼に攻撃を受け、最も深刻なダメージを受けているはずのエリーだが、はやてを不安にさせまいと強がって見せた。

はやてとグリーンも大きなダメージを負った身体をなんとか立ち上がらせようとする。

「……………実に愚かしい。自らの力があるために傷ついているというのに、まだあがこうというのか」

デバイスを拾ったヨーデルがエリーに向く。

その足で近づこうとした時、はやてがエリーの前に立ち塞がる。

「エリーは……………絶対に渡さへん！」

「は、はやて……………」

「そこまでしてエリー・ミストを守るか。その女が争いの元凶だというのに」

「元凶やと!?!」

「そうだ。強すぎる力は常に争いを呼び、全てを滅ぼす脅威となるのだ! それを持つ者の大切なものも、やがては己自身もな!」

「何を言って……………」

「そんな力は誰かが押さえ込み、管理し、有効に使ってやらねばならんのだ!」

大剣がはやてに向けられる。

「分かっただろう？ エリー・ミストには何も生み出す力はない。野放しにしておく価値もない。そしてヒトとしての居場所もない。さあ、そいつを引き渡すのだ！」

「……………嫌や」

「なんだと？」

「力がない…………？ 価値がない…………？ 居場所がない…………？ そんな事、私には…………私達には関係あらへん！」

シュベルクロイツを強く握りしめながら、はやては力の限り叫ぶ……………！

「私は…………ただ…………」

― “友達”として、エリーと共に居るだけや！！！！

その叫びには、本物の強さがあつた。

はやてがエリーを『エリー・ミスト』という『一人のヒト』として
見ているという、本物の思いが籠っていた。

エリーがはやてを『八神はやて』という『一人の人間』として見て
いると同じように。

「……………」

「……………」

「……………」

ザシュツ……………!

「ぐはっ……………」

力に溺れ、欲望に染め上げられた刃がはやてを切り裂く音が、一時の静寂を破った。

「「「「「なっ……………!?」「」「」」」」

「……………嘘……………!」

「は……………はやてさん!」

「はやて……………!?くっ、離せ!」

ブルース達とフォワード陣が驚愕する中、クロノはデュランダルが封印されて起動できないまま生身ではやてを助けようとするが、ヨードルの部下のチェーンバインドに阻まれる。

「フハハハハハハハハハ!組織というものが分からないバカの話ほど無駄なものはないわ!」

斜めに切り裂かれたはやての身体から鮮血が溢れ、足元が紅に染まっていく。

「は…………や…………て？」

「大……丈……夫や……エ…………リ……………」

虫の息になりながらも、はやてはエリーを守ろうとする事をやめない。

「まだ生きているか……まあいい。死ねえ！」

はやての血で赤黒い色に染まったデバイスが大きく振り上げられる。

「……………っ！」

“ドクンッ”

その瞬間、辺りがスローモーションになる。

“ドクンッ”

エリーの脳裏に、何かがフラッシュバックする……

“ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ”

鼓動と共に映る、霞んだ記憶。

そして、最初に見たのは、

『もう……大…丈夫……や……ゴホッ！』

小さな自分の目の前で、凶刃に貫かれたはやての姿だった。

「……………！」

その間に、巨大な刃が振り下ろされる！

「ま、間に合わぬ！」

「やめろおおおおっ！」

「「はやてさーーん！」」

.....

「.....何だと.....!」

「.....」

刃がはやてに届く事はなかった。

振り下ろされた直後に、何者かが片手で刃を受け止めていたのだ。

その『何者か』の反対の手がヨーデルの腹に当てられる。

ズドオオオオオオオツ！

突然、手から放たれた黒い雷がヨーデルを吹き飛ばす。

「あ、あれは……オーバーSSSランク……だと……！？」

バインドを仕掛けた部下が雷の巻き添えになった事で解放されたクロノは、その魔力反応に阿鼻叫喚していた。

黒い光が収まり、その雷の主の姿がハッキリと見え始める……

「……………！！」

仲間達から見れば、似て非なるものであるはずだった。

それは、自分達が知っている『彼女』とはまるで別人のようだったから。

闇へと堕ちてもなお美しさが失われぬ漆黒の翼に、その闇の中に一筋の光をもたらす銀色の長髪。

そして、その身に宿すは暗さと同時に力強さを感じさせる闇の雷。

だが仲間達はすぐに、ただ色が違うだけだと気づく。

自分達はこれ程激しい雷を手足のように操れる存在を一人しか知らない。

最初にその名前を呼んだのは、

「エリー……………様？」

キララだった。

彼女の言う通り、その存在はエリー・ミストその人だった。

「……………キララ」

「は、はいいい！」

「これをあなたに見せるのは、初めてだったな」

だが、口調と雰囲気はほぼ普段のエリーとは正反対だった。

「い、一体エリーに何が！？」

「あれ程の力、見た事ないわよ！」

「魔力値だけなら、高町なのは遙かに凌駕しておるようじゃ……
…」

ティアナ、キャロ、そしてブルース以外の仲間達はただ驚くしかなかった。

そんな仲間達にブルースが言う。

「……………安心して黙って見てれば大丈夫だ。あれはただ本気を出してるだけだ」

一同はその言葉を信じて見守る事にした。

その数秒後、とっさに障壁を張っていたためか、吹き飛ばされたはずのヨーデルが瓦礫の中から現れる。

「なんだこれは……………データ以上だ！」

ヨーデルの声に反応し、エリーは唯一変化のない紅い目を向ける。

「……………構わん！叩き潰せ！」

号令と共にデバイスを向ける局員達に向け、エリーは言い放つ。

「…………遊んであげるわ。魂の奥底まで！」

—Bパートへ続く

STAGE 12 破滅の墮天使 Aパート（後書き）

キララ

「エリー様の本気…………ゴクリ」

キャロ

「怖い……………」

リーフ

「何気に重要な回じゃったな……………」

STAGE 12B 〽ダークサイド・エリー・ミスト（前書き）

人には必ずある『ダークサイド』の一面。

それを正しく導く事ができたら、その先には何が待っているのか。

それでは、どうぞ！

STAGE 12B 〈ダークサイド・エリー・ミスト〉

「遊んであげるわ。魂の奥底まで！」

その言葉の瞬間、一人の局員を小さな雷が撃ち抜く。

ほんの小さなものであるのにも関わらず、一人、また一人と倒れていく。

いつものエリーとは違う、『倒す』ための攻撃。

それも、予備動作はほとんどないに等しい。

それでいて、静かに、ほんの一瞬で戦う力を奪う。

触れれば斬れる抜き身の刀のように。

そして、攻撃を受けた者は声を上げることなく地に堕ちてゆく。

まるで糸の切れた人形のように。

「凄い……あれが本当にエリーさんなの？」

「まだこれ程の力を隠していたとは……」

「俺も初めて見た時はすごいビックリだったぜ」

「ああ……！ 黒いエリー様も美しい……！」

「こんな時にトリップしないでー！」

「そう……あれがエリーの本気や」

「はやて！？動いてはダメだ！」

「こいつは酷え………！俺のヒーリングでどこまで持ち直せるか……」

「ブルースさん、お願いします」

ブルースとキャロがはやてへのヒーリングを始めている間に、スバルとエリオもミカーサによってその元へと運ばれる。

エリーが戦うその横でヒーリングが進み、やがて二人は立ち上がった。

「ううん……っ！？はやてさん！？」

「す……凄い傷………」

「まだ……大丈夫や」

「一体何があったんですか！？」

はやては局員達を黒い雷で次々と倒していくエリーを指し示した。

「な、なんか銀色になってる……………」

「あれが…………あのエリーさん？」

小さく頷き、はやては口を開く。

「…………皮肉なものや。自分達がしてきた事のしっぺ返しが今になってやって来たのかもしれないわ」

その言葉に、元管理局員であるリーフは首を傾げ、管理局の一部の人間が何をしてきたのかを考え始める。

いや、考えずとも、エリーが関係している事は一つしか見つからなかった。

「…………やはり、七年前に何かされたのか」

「その通り。あれはあの時管理局がエリーを自分達の人形にするために与えた、『呪われた力』なんや」

「最も、完全に『奴らのモノ』になる前にはやて達に助けられたんだけどな」

「ブルースさんは知ってたんですか？」

「ああ。この目で見た事あっから」

その後、一同は再び大暴れするエリーに目を向けた。

「…………しぶとっ」

すでに多くの局員を倒しているが、一行に敵の攻撃が止む気配がない。

その理由は前衛の少し後ろにあった。

「ええいつ、へばる事は許さんぞ！」

後ろではヨーデルが広域の治癒魔法と肉体強化術を使って倒れた局員を無理矢理立ち上げらせ、エリーに向かわせていた。

「鬱陶しい真似を！アサルトモード！」

『All right.』

エンシェントブレイバーをアサルトモードへと変化させ、天空へと飛び立つ。

そこにフィンガーマサイルが発射されるが…………

「…………ふんっ！」

ゴオオオオオ………ズドドドドドドドッ！

羽ばたきから放たれる電撃の混じった風によって、ミサイルは空中で全弾全て爆散した。

「今度は私の番だ！」

エリーは雷の力を銃口に溜め始めると同時に、エンシェントブレイバーを居合いのように構える。

局員達は一瞬何をするつもりなのか分からず、動きを止めた。

今のエリーにとっては、みすみす『殺してください』と言っているようなものだった。

「己が欲望と共に消えよ………」
『Full charge』

「デイ・ドリーム」

……白昼夢の如く、全てが碎け散る。

振り抜かれたエンシェントブレイバーから放たれた闇は銃口の動きに沿って地面を薙ぎ払い、ほとんどの局員を吹き飛ばした。

相棒をいつもの剣型形態ソードモードに戻し、地上に降りようとする。

……………その時！

ザシユザシユザシユ！

「ぐあっ……………！！」

背後からのヨーデルの攻撃がエリーを襲った。

だが彼はこの後、攻撃が確実なものではなかった事を後悔する事になる。

ガシッ！

「ふぐっ！？」

エリーは苦痛に表情を歪ませながらその首を掴む。

この手から逃れようとヨーデルはもがくが……

「バケモノめ………！」

その動きとこの言葉だけが、ヨーデルにできる唯一の抵抗であり、エリーにとっては全く無駄なものであった。

「……言う事はそれだけ？」

「……………！」

「私は………バケモノであっても構わない………！」

冷たい表情が、一変。

「はやてや、みんなを……………魂で繋がった仲間を守れるのなら……………!!」

強い表情で言い放った。

「堕ちる所まで……………堕ちてやる！」

その言葉は、仲間達に理解させるには十分すぎた。

どのような姿になったとしても、目の前の存在は誰でもない、『エリー・ミスト』その人であると……………

「これで終わりにする……雷呪らいじゆのまげの縛！」

首から手を離したと思ったら、ヨーデルの手足を雷の環が捕らえ、身体が空中に固定される。

さらに空高く飛び、両手に黒い雷を集める。

その姿にヨーデルはある光景を思い浮かべる。

それは、最強の魔導士・高町なのはの最初の戦い『プレシア・テストロッサ事件』の中での事。

当時、その重要人物であったフェイト・テストロッサー——今のフェイト・T・ハラウオンとなのはの地球の海の上での戦い。

ジュエルシードを巡る死闘は、なのはの最後の切り札『スターライトブレイカー』によって終焉を迎えた。

この時、なのははバインドでフェイトを空中に捕らえ、動けなくした所にこれを全力で放つという、当時9歳とは思えない攻撃で決着を着けた。

その光景がエリー・ミストによって再現されようとしていると感じ、

ヨーデルはこの上ない恐怖に支配された。

「ま、待ってくれ！分かった！もうお前達には手を出さない！ミネルヴァの過激派は責任を持って取り締まる！」

「……………」

「……………」

エリーが示したのは、校舎の窓。

その中では、多くの生徒達が不安や恐怖の表情を浮かべながらこちらを見ている。

中には、ヨーデルに対して怒りや侮蔑の視線を向ける者もいた。

「……………お分かり？お前は関係のない者を巻き込みすぎた」

そう言うと、雷をさらに大きくしつつヨーデルの真上へと上昇する。

.....

「.....」

はやての最強の技『ラグナロク』を彷彿とさせる巨大な闇の閃光。

神々の最終戦争の始まりを告げる角笛の名を冠した裁きの雷は、確かに放たれていた。

しかし.....

「.....これでいい.....これで.....十分.....」

雷はわずかに横に外れ、真下の地面にクレーターを作っていた。

ヨーデルはというと、恐怖のあまり空中に固定されたまま気を失っていた。

「……………もしかして、わざと……………?」
「当たり前や。姿形が変わっても、中身はエリーのまま……………見てみ」

地面の上には先程の砲撃に倒された局員達が転がっている。

しかし、死んでいる者はいない。

あれ程強大な力を解放しておきながら、『誰も殺していなかった』のだ。

『倒す』ための攻撃であっても『殺す』ための攻撃ではない。

さらに言えば、『戦いに勝つ』ためではなく、『戦いから何かを守る』ためのものである。

大地へと舞い降りたエリーの姿の中に、仲間達はいつものエリーを見た。

だが……………

「……………うっ！」

バチバチバチバチバチ！

「うぐあああああああああああああ！！」

突然周囲に小さな雷を撒き散らしながら、苦しみ始めるエリー。

同時にその身体が腕と足の先から闇に包まれていく。

エリーをよく知らない者達も、これだけはハッキリと分かった。

「……自分の雷に……喰われてる……!?!?」

バチバチバチバチ……!」

「ぐうぐうぐうっ……と……止まれっ……!」

無理矢理に力を抑え、なんとか切り抜けた。

姿も白い翼と紅い髪に戻っていた。

「……………」

そして、その場に倒れる。

「エ、エリー!?!」

「エリーさん、しっかりして下さい!」

エリーに駆け寄るフォワード陣。

「……………ちょ……………と…頑ば……………り…すぎ……………ちゃ……………た……………か…
も」

それを最後に、エリーは意識を手放した。

—T o b e c o n t i n u e d .

STAGE 12B 〱 ダークサイド・エリー・ミスト（後書き）

ミカーサ

「という訳で、次回は閑話休題の予定よ」

キャロ

「エリーさん、どうなっちゃったの……………?」

STAGE 12. 5 闇の疵痕（前書き）

今回は説明回です。

STAGE 12. 5 闇の疵痕

「……………んっ……………」

気がつくど、そこは学園の保健室だった。

「気が付いたようじゃな」

「……………ここは……………？ そうだ、学園は！？ 管理局はどうなったの！？」

「落ち着くんだ、エリー王女」

それに答えたのは、エリーの戦いを間近で見ていたクロノだった。

「学園にある例のあれは無事だ。局員達に死者はいないが、現地の警察に逮捕され、こここの法律で裁かれる事になったそうだ」

「そう……………良かった」

安堵の表情を浮かべるエリーに、フォワード陣が駆け寄る。

「エリーさん……本当に良かった……」

「キュ〜（良かったね〜）」

「もう二日も眠ってたんだよ？」

「そうなの……ごめん、心配かけて」

「いえいえ……銀色になったエリーさん、すごくカッコ良かったですよ！」

「病み上がりだけど、一緒にアイス食べない？」

「ええ、頂くわ」

一方、ブルース達は……

「とにかく、エリーが無事で良かったわい」

「ただ、あの時の凄い力は何なのかしら？」

「エリー様に仕えてからまだ半年なので、私もよく知らないんです

……」

「俺もチラッと見ただけだからなあ……」

「誰か僕達にも分かるように説明してくれないか？」

「だったら私に説明させてもらうわ」

一同の視線がはやてへと向けられる。

因みに、はやては傷がかなり大きかったため、大きな包帯を身体に巻いている。

「あの時私が言った通り、エリーのあの力は管理局やミネルヴァの一部の人間の違法な研究によって、あるロストログアの力を与えられたものなんや」

「つまり、元々持っていた力ではないと」

「そうや。エリー自身もただその力を力任せに振り回しているだけでうまく使いこなせていないみたいや」

「あ…………あれで!？」

あれほどの力を発しながら『技』として成り立っているように見えたエリーの攻撃。

それでも使いこなせていないのなら、使いこなしたらどれほどになるのか。

…………一部の者は想像しただけで身震いした。

「それと、いきなりあんな風になるのは『引き金』があるんやけど……………」

そう言いながら、はやては自分の荷物の中を探る。

「エリーは見ない方がいい。きっと嫌な事思いつくから」

「…………いや、大丈夫」

「だといいんだけど……………あった、これや」

「!？」

取り出したのは、二カ所に穴が空き、血と思われる赤い何かで染まった管理局の制服だった。

「例の事件でエリーを助けようとして思い切りぶっ刺されてしもてなあ」

「ちょーーーーー!? そんなマイペースっぽい口調で言う事じゃないですよーーーー!？」

「僕達全員ドン引きなんですけど!」

一同が落ち着きを取り戻すのを待ってから、話を再開する。

「詳しい事は長くなるから省略するけど、エリーが記憶をなくした原因は奴らの実験ではなく、目の前で私が刺された事らしいで」

「はやてさんは大丈夫だったんですか？」

「あの時のなのはちゃん程じゃなかったから大丈夫やで」

※S t s 9 話参照

「ともかく、『誰かが目の前で殺されそうになる』事が引き金になつてると私は考えとる。エリーの心の傷を忘れないために、私はこれを持ち歩いてる訳や」

「……………」

一同は話の後、エリーの方を向いた。

「……はやてに何があったとか、引き金がどうか……………今の私にはよく分からない」

「……………」

「だけど、たとえば何が待ち受けていようと、私は自分自身から逃げたりはしない」

仲間達に見せる凜とした表情が、その覚悟を示していた。

「…………あー、話は変わるんじやが、奴らが言っていた『知術の石』とは何の事じゃ？」

「あ、私もちよつと気になってた」

「ああ、それは……………」

ヒュウウウ……………

クロノが説明しようとした時、小さな風が蒼い石を運び、エリーの手に収まる。

周りの者が頭に疑問符を浮かべる中、エリーが窓の外に目を向ける。

そこに居たのは、二日前に一時は敵として戦い、一時は協力して管理局と戦った女、黒風のグーナ。

「それが『知術の石』。強力な魔力を持ち、知恵を司るこの学園の守り石。四年前、局はこれを我が物にするために、フォルティス・レインの惨劇を再び繰り返したのです」

「このために……………でも、何で私に？」

「学園長はここに置いておくより、あなた達が預かる方が安全と判断したでしょう」

そこまで言うと、黒い風が吹き始める。

「今日の所はこれにて退散させて頂きますが……………」

はやてを指差して言う。

「貴女がエリー・ミストと共に居る限り、戦いは避けられないでしょう。貴女が管理局員で、私がスターラルガである限り」

その直後に強い風が部屋に吹き込み、一同は思わず目を閉じる。

風が止んだ時には、窓の外には誰も居なかった。

「……………」

しばらくの沈黙の後、エンシェントブレイバーがエリーに話し掛けてくる。

『スターラルガ・ファイブナイツという事は、あのような実力者があと四人居るといふ事ですね』

「例え何度来ようと、退けてみせるわ！みんなの、力で！」

振り向くと、頼もしい仲間達の笑顔があつた。

— 空港 —

「みんな、早く早く！」

「分かつとるで〜！」

「ちょ、ちょっと待ってください〜い！」

その後、エリー一行は新たな旅へ出かけようとしていた。

当然、はやてとフォワード陣、新たな仲間であるツルギも居る。

そして……………

「まさかこの娘も来る事になるとはのう」

「仲間は多い方がいいと思うがな」

「本当について行く気なのか？」

「あたしの経験を平和のために役立てられるんなら、協力しない手はないわ！」

ミカーサもその旅に同行する事になり、より士気が上がる事が期待された。

「本当はきつとみんなの事が心配になったのですよ」

「……べ、別にそんな不安なんかじゃ！」

「ツンデレ炸れ（ピシャーン）はぎゃあ〜！」

「ちよっ、エリー、こんな所で雷落とさないで〜！」

より賑やかになった一同は、笑顔のまま飛行機で旅立っていった。

「締めくくりが普通すぎやないか？」
「現代だから仕方ない」

（ニューヨーク某所）

「疲れただろう、グーナ。君のおかげでやっと例の力を観測できたよ。ご苦労様」

立ち去ったはずのグーナはあの白い少年の元に居た。

「エリー・ミストはまだ自らの闇を抑えられていないようです」
「そうか。で、行き先は？」

「ロサンゼルスです」
「ロサンゼルスか。そこら辺にはミネルヴァの過激派や駐留管理局員が多いと聞くが……よし、彼女達の近くにジョシユアとラクウエルを送り込め。更なるデータを収集し、あわよくば奴らを殲滅させる」

「了解………」

そう言い残し、風と共にグーナは消え去った。

「八神はやて、所詮君は彼女があのかを完全に自分のものにするための踏み台にすぎない。そして、いずれ君は自分が信じていたモノに滅ぼされるのさ」

一呼吸置いて言う。

「滅亡の1ページを楽しみにしている。僕から時を奪った者達よ！」

— T o b e c o n t i n u e d .

STAGE 12. 5 闇の疵痕（後書き）

ミカーサ

「あたしの事、よろしくね！」

ティアナ

「なんか、あたしとキャラ被ってるよね？」

エリー

「気のせいじゃない？ 次回、STAGE 13 『不穏な出会い』をお楽しみに！」

ブルース

「4／11にサブタイ変更になったんだぜ」

新たな仲間達&オリジナルキャラ紹介（前書き）

エリー達の新たな仲間二人と作者オリジナルのライバルキャラを紹介します。

新たな仲間達&オリジナルキャラクター紹介

影原 剣^{ツルギ}

CV..白石涼子

種族..人間と狼の霊獣族のハーフ

年齢..22歳

血液型..A型

身長..164センチ

体重..44キロ

ランク..Unknown

身体的特徴..銀髪・赤い目・獣のような耳・尻尾

武装..手裏剣や煙玉などの忍者の道具

アメリカでエリー一行が出会った小柄な青年。

人間の父と霊獣族の母を持ち、肉体にも獣の特徴がある。また、身体能力は純粋な人間より上で、純粋な霊獣族より下。

『影原一族』という忍者の末裔で、先祖は別の次元世界からの移民といわれているが、定かではない。

アナザー・アースの日本で生まれ、12歳の時に父の仕事のためにアメリカへ留学し、アルタイル魔法学園で13歳からの学校生活を過ごす。

卒業後は警備員の仕事をしていたが、長期休暇を取ってエリー達の旅に同行する事にした。

心優しく面倒見のいい性格で、さらに少女のような顔立ちのため学園では女子にモテモテだったらしい。

その顔立ちのためか、自他共に認める女装のプロ。その完成度は女子達があっさり騙されるほど。

色々と完璧に見えるようだが、本人にしてみれば『まだまだ未熟』。そういった謙虚さもまた忍者故か。

真っ黒なTシャツと短パンがトレードマーク。
本気になるとその格好だろうが女装しようが一瞬で忍者装束になる。

弱点などないように見えるが、食べ物以外のヌルヌルしたものは苦手。

ミカーサ・レギンレイヴ・水上月^{ミカミツキ}

C V .. 竹内順子

種族 .. 人間とスズメバチの妖虫族のハーフ

年齢 .. 22歳

血液型 .. A B型

身長 .. 163センチ

体重 .. 41キロ

ランク .. Unknown

身体的特徴 .. ティアナより濃いオレンジのショートヘア・出し入れができるお尻の針・触角

武装 .. 特になし

アルタイル魔法学園で非常勤講師を勤める女性。

ツルギとは幼なじみで、一緒に留学してきた。

父は『国境なき医師団』の一員として、妖虫族である母は雑技団のスターとして世界を飛び回っているため、ニューヨークの教会のシスター達の手伝いをしながら一人暮らしをしているらしい。

卒業後は学園の非常勤講師の採用試験に合格し、現在に至る。その後、ツルギやエリー達と共闘した事をきっかけに旅に同行する。

所謂ツンデレキャラで、あまりからかうと顔を真っ赤にしながらのアップercutが飛んでくる。

母から中国拳法と中国雑技の英才教育を受けており、戦闘能力は非常に高い。また、いざとなったらお尻の針の毒で相手をしびれさせる事もできる。

黒風のグーナ

CV..田中理恵

種族..人間

年齢..Unknown

血液型..Unknown

身長..162センチ

体重..41キロ

ランク..陸戦A+ 空戦A

身体的特徴..簪で留められた薄い紫色の長髪

武装..鉄扇

スターラルガの中でも高い戦闘能力を持つ五人の戦士『スターラルガ・ファイブナイツ』の一人。

薄い紫色の和服と簪がトレードマークで、物静かで礼儀正しい喋り方をする。

根はおっとりした性格だが、倒すべき敵とした者は邪気を纏った黒い風で容赦なく切り刻む。

また、鉄の扇子を使った華麗な体術も得意技。

スターラルガ・ファイブナイツの実態は謎に包まれているが、現時点ではグーナと謎の白い少年の台詞から『ジョシユア』『ラクウエル』というコードネームの戦士の存在が確認できる。

STAGE 13 不穏な出会い（前書き）

それでは、始まります。

と言っても、まだ起承転結の『起』の部分でしかないのですが（オ
イ）

※4／11 加筆修正&サブタイトル変更&一話に纏めました

STAGE 13 不穏な出会い

〽ロサンゼルス某所〽

「着いたわ、ロサンゼルス！」

ニューヨークでツルギとミカーサを仲間に加えたエリー一行はロサンゼルス市街を散策していた。

「私も何度か行った事はあるが、やっぱりいつ見ても広いのう」

「ロサンゼルスといえばやっぱりドシャースやな！」

「ああ、地球のメジャーリーグの？」

「アナザー・アースだと『デンジャーズ』なんだけどな」

はしやぐ一同はとある屋外カフェでくつろぐ。

「さて、キャラの書き分けが難しいって弱音吐いてる作者は放っておいて、私が次の目的地にここ、ロサンゼルスを選んだ理由を教えるわね」

そう言うと、エリーは一枚のチラシを広げて仲間達に見せた。

「……………聖アポカリプス学園大会議？」

「その通り。私達はミネルヴァとスターラルガの穏便派による会議の警備をする事になるの」

「そんな話初めて聞いたんやけど」

「そりゃそうですよ。エリー様は私達にしか教えてないんですから」

すでにエリーはその『聖アポカリプス学園』の職員と話をつけているらしい。

一国の王女という立場だからこそその行動力？である。

キララの発言を聞き、はやてはそれを自分達に伝えていなかった理由を尋ねる。

「ああ、簡単な事よ」

「？」

「はやて達は近くのホテルで留守番よ」

「なんでー！？」

「その理由はすぐ分かるはずじゃないのか？」

「……………っ！何者！」

「そうよ。あなた達が顔を出せばこの会議の開催を快く思わない一部の人間から冷たい視線を向けられるのは目に見えているわ」

その声の主は炎のような色の髪の方と、雪のように真っ白なロングヘアの方。

しかも全く気配を感じさせずにエリー達の前に姿を現していた。

「いつの間に我々の近くに現れるとは……こやつ、できる！」

「褒め言葉として受け取って……おい、ラクウェル？」

「まさか二人揃って旅に出るとはねえ」

「僕達はいつまでも子供じゃないんですよ？」

「あたし達は先生の自慢の生徒でしょ？これくらいは当然よっ！」

「うふふ、違うわ」

男が気づいた時にはその女性・ラクウェルはツルギとミカーサの元に近づき、普通に話していた。

「……っというか、先生って言った？」

「そういえばグーナがそんな事を言ってたわね。思い出すのが一番早かったのはフリードみたいだけど」

「キュクル」

「あ、久々にエリーさんの第二の能力が！」

.....

「さて、本題に入る前に自己紹介をしておこうか。俺はスターラルガ・ファイブナイツの一人『鬼火のジョシユア』だ」

「同じく『氷雪のラクウエル』」

それを聞き、緊張が走る。

黒風のグーナの時のように、いつ襲われてもいいようにエリー達は身構える。

「今ここで殺り合うつもりはねーよ。警告をしに来ただけだ」

「警告？」

「純粋なアナザー・アースの住人だけの会議に管理局員が顔を出したら色々と厄介な事になる。早まって殺しに来る奴が居るかもしれないし」

「だからおとなしくエリーの言う通りにしろって訳やな？」

「そういう事になるわ」

それだけ言うと二人は席を立ち、飲んでいたコーヒーの代金を近く

の店員に渡して立ち去ろうとする。

「今はさっさと退散させてもらうが、できればお姫様の言う通りにした方がいいぜ？」

自分の生徒だった二人に笑顔で手を振るラクウエルを近くに停めていたバイクに乗せ、ジョシユアがエンジンを唸らせる。

「戦場で会わない事を祈っとくぜ。じゃあな！」

ブ
ロ
ロ
ロ
ロ
ロ
……

「……ああ言ってはおるが、やはりウチらが居る限り戦いは避けられへんな」

「例えそうだとしても、何度だって迎え撃つ！」

そう言うエリーの紅い目には、いつも通りの強さが秘められていた。

「私は黒くなってる時に自分が言った事ぐらいちゃんと覚えてるわよ？『仲間を守るのなら、堕ちる所まで堕ちてやる』ってね」

そう言っではやてに微笑みかけた。

『マイロードにとってあなたは立派なお仲間です。ですから、今はこちらに任せて頂けま……あれ？』

待機状態のエンシェントブレイバーが続けて話そうとするが、その前にはやてがエリーの背後へ。

「うーん、やっぱり持つべきものは仲間やな」

もにゅもにゅ……（はやてがエリーの胸を揉む音）

「……………こんな目立つ場所で何しとるんじゃあああああああああああああああああああああ！」

ガラガラドシャー……ン！（雷）

[illegible]

「やれやれ、お約束だね、ティア」

「お約束ね」

「お約束……なのかな？」

「お約束だね」

「キユ」

そんな“お約束”の光景に、なんか安心する仲間達とフォワード陣だった。

……その様子を、一人の少女が高所から見下ろしていた。

「さあて、どんな挨拶をしようかしら……………」

そして、ロサンゼルス到着から二日後……………

「では、よろしく願います、エリー王女とお供の皆様方」
「分かりました！」

会議の当日、エリー達は聖アポカリプス学園の学園長に会議の会場前へ連れて来られる。

警備といっても、会場は学園内なのでエリー達の仕事はその扉を守るだけなのだった。

「で、結局来てしまった訳ね……………。危ないって言ってるのに」
「いやいや、いつどこから何が来るか分からへんよ」

ホテルで留守番のはずのはやてとフォワード陣も全員やって来ていた。

特に邪魔になる事はなかったので、そのまま会議が終わるまでの3時間の間勝手にやらせる事にした。

そして、無事に会議は終了。

自分達の役目を終えたエリー一行が学園の正門からミネルヴァとスターラルガの代表者と共に出て来る。

「……………」

この時、ティアナが何かを察知した。

「エリー！左前70度の方向！」
「っ！」

その先で一つの影が狙撃銃を構えていた。

気づいたエリーはすぐさまそこに向かって雷を放とうとする。

バシユンツ！

……が、その前に後ろから放たれた黒い何かがその影を直撃。

「二丁上がり！」

振り返ると、ツルギが藁と針金で作られた筒のようなものを構えていた。

「どうだ。これが忍者のバズーカ砲『大筒』の威力さ」
「どっから出したんだよ」

「まったく、結局私がやる事になる訳か」

大筒に一同が感心しているその時、別の方向から誰かが近づく。

それは二丁拳銃を持った……………

「う、ウサミミや〜！」

……の少女だった。

白い髪とウサミミを揺らしながら、その手に持つ銃をエリー達の後ろに居るミネルヴァの代表に向ける。

「やらせない！そりゃあゝ！」

ドカツ！

「きゃあ！」

体当たりによって少女はその場に倒れ込み、エリーもそのまま地面に倒れる。

「くっ……！よくも私の邪魔を……あっ」

「いきなり何なのよ……えっ！？」

顔を見合わせ、思わずその場で固まる二人。

.....

「.....ヴィヴィアン？」

「あらら、まさか再開がこんな形になるとはねえ.....」

—T o B e C o n t i n u e d .

STAGE 13 不穏な出会い（後書き）

はやて

「ムムッ！？新キャラ登場やな！」

エリオ

「更新の間隔は長くなっていますが、覚えていれば期待していただくさね！」

スバル

「次回、STAGE 14 『白ウサギと王女の戦いの夢』をお楽しみに！」

エリー

「私のメタ発言はスルーしといてね」

STAGE 14 白ウサギと王女の戦いの夢 Aパート（前書き）

お待たせしました。

相変わらず展開が早い上に色々とグダグダですが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

STAGE 14 白ウサギと王女の戦いの夢 Aパート

ミネルヴァの代表を狙った襲撃はエリーによって失敗に終わった。

「ううゝ……まさか再開していきなりこんな目に遭うなんてゝ」
「いきなりピストル構えて向かって来られたら誰だって何事かと思うわよ」

襲撃の犯人である、袖に赤いギザギザが入った服を着たウサミミ少女はブルースによって縄で縛られていた。

「しかしこんなカワイイ女の子がいきなり二丁拳銃で襲ってくるとは、物騒な世の中になったもんじゃ」

取り上げた拳銃を弄びながら「ふむふむ」といった顔をするリーフ。

「しかも……」

おもむろに引き金を引こうとすると……

ポンッ♪

「……………あ？」

弾丸ではなくいくつも連なった国旗が飛び出した。
本物の拳銃だと思っていた一同は驚いてばかり。

「……私にはバレバレなのじゃ」

「パーティーグッズかよ！なぜにこんな場所で！？」

「迷惑千万にも程があるわ！ここら辺の人達みんなドン引きだし！」

口々に文句を言う一同に対し……………

「アッハハハハ、やっぱり？」

ウサミミ少女はニッコリ笑って返す。

一同はその態度に呆れるばかり。

そんな中、エリーが彼女に話し掛ける。

「久しぶりだっていうのに、なんかそんな気がしないわ……」
「アハハッ、そうかな？」

「うん。ところで、最近の世界を見てどう思う？」

「そうね……やっぱりミネルヴァとスターラルガの紛争が年を追う毎に激しくなっているわね。スパイという名の中立も楽じゃないよね」

「そうね……。こっちも国の財政が最近不安定でしょうがないわ」

「ちょっと待ったー！何普通に喋ってんだよ！つーか今サラツとスパイって言っただろ！」

空気化しているのに耐えかねたブルースの叫びが響き渡ると同時に、少女は一瞬にして縄から抜け出し、立ち上がった。

「自己紹介をしなくちゃね。私は『ヴィヴィアン・フルーレ・ミストレス』。さっき言った通り、スパイ稼業をやってるわ」

「それを目の前で堂々と言うのはどうかと」

「だって口滑らせちゃったんだもん」

自分をスパイだと言うウサミミ少女ことヴィヴィアン。

簡単に口を滑らせたりエリーにやられて縛られたりしている所を見るととてもそうは思えないが、本当らしい。

「私がお姫様と出会ったのは、二年前のクリスマスだったわ。当時はフォルティス・レインの王様にスパイとしての活動を援助しても

らってて……………」

「その縁で出会った訳よ。私達ってばすぐ仲良くなってたよね」

「ふむふむ…………エリーって色々な人と関わりがあるのね」

「まあね。しかし私達二人で思い切り遊んだ時は本当に楽しかったわ」

「アッハハハ、そうね」

楽しそうに話す二人の姿にはやても思わず微笑む。

「へえ、何して遊んでたんや？」

「「銃撃戦」」

一瞬でその微笑みは凍り付いた。

「楽しかったよね」

「決着はつかなかったけどね」

「…………エリーって、危険な友達が居たんですね」

「まあ、職業の都合でエリー様とはなかなか顔を合わせられないん

だけだね」

.....

「で、ヴィヴィアンはどうしてここに？」

「私も影からの監視を理事会から依頼されたのよ。隠密行動はスパイの専売特許だから楽だったわ」

後ろでツルギがムツとしているのを無視しながらヴィヴィアンは話を続ける。

「そこにエリー達が居たからちよつと驚かしてみなのよ♪」

「いやいや、これはやりすぎだよ……」

「なんか、ただのイタズラ好きにしか見えないんですけど」

「……これでよくスパイが務まるなあ……」

「でも、変だわ」

「何が変なのよ、ヴィヴィアン？」

「みんなの気を引く役は確かに用意したけど、狙撃銃を持たせた覚えはないんだよね……」

「へ？それってどういう………」

ドサッ……

音にエリー達が振り向くと、そこにあったのは一人の男の死体。

「役立たずをお返しに来たぜ？」

そして、それを放り投げた一人の男とそれに付き添う女。

「戦場で会いたくはなかったんだけどな……」

「ま、会っちゃったものは仕方ないわ」

「……奴もスターラルガの差し金だったって事か」

「目的は……聞くまでもないわね」

「そういう事だ。そこをどけと言ってもあんたみたいな堅物には無駄だというのは分かっているさ」

その男女、鬼火のジョシユアと氷雪のラクウェルは臨戦体勢をとる。

すぐさまエリーもエンシェントブレイバーを構え、仲間達がそれに続く。

「……………ヴィヴィアン、あなたは どうする？」

「アッハハハハ……やるに決まってるじゃない！」

その手に光る二丁拳銃をクルクルと回しながら力強く答えた。

張り詰める空気の中、はやてとフォワード陣は代表を護衛する体勢になりつつエリー達を見る。

「……………いざ！」

「……………叩き潰してやんよ！」

同時に、お互いは勢いよく踏み込んだ。

— Bパートへ続く

STAGE 14 白ウサギと王女の戦いの夢 Aパート（後書き）

ツルギ

「という訳でバトルスタートだ！」

ヴィヴィアン

「アッハハハハ……私の活躍に期待してね♪」

STAGE 14 Bパート（前書き）

一ヶ月弱休んでいた戦いが、今、始まる！

「なんだ、生きてたのか」とか言わないで………

STAGE 14 Bパート

聖アポカリプス学園でのヴィヴィアンとの出会い。

その直後に、再びスターラルガ・ファイブナイツとの戦いが始まった。

人々に被害がないように構えながら見守るはやてとフォワード陣の前でお互いに攻撃を仕掛けようとする。

「喰らいな！」

「喰らえ……！」

ジョシユアとラクウエルの攻撃は『鬼火』と『氷雪』の二つ名の通り、炎と冷気の攻撃。

「こんのおおお！」

それらの攻撃とエリーの電撃とがぶつかり合い、爆音が鳴り響く。

一度距離を取り、エリーが仲間達に合図を送る。

同時にツルギ・ミカーサ・キララがラクウエルに向かい、残りはジ

ヨシユアと対峙する。

「私はどうしてこっちなんですか？」

「氷の妖精が炎使いと戦ったら危ないでしょうが」

「さて、僕達の力を先生に見せてあげるとしよう！」

「うふふ……私の生徒だったからって手加減はしないわよ？」

三人と向き合うラクウェルの目には、自分の生徒だった者の力への期待と戦うべき敵を睨み殺すような二つの色があった。

「どんな理由があろうと、無駄に傷つけ合うなら止めるだけ！」

「できれば追い払うだけに留めたいのじゃが……」

「アハハッ、そう簡単にはいきそうにないみたいだね♪」

「なら、俺も男として正面から迎え撃つぜ！」

「……こりゃ楽しめそうだぜ」

エリー達もジョシユアに向かっていき、それぞれの戦いが始まった。

〈SIDEツルギ組

こちらでの戦いは膠着状態になっていた。

なにしろ授業で模擬戦闘のような事をしていたので、ツルギとミカーサ、そしてラクウェルも戦士としての実力とお互いの手の内を知っているからである。

「そこだ！」

「おおっと、危ない！」

故に、なかなか決定打が出ないまま戦いは長引いていく。

どちらが先に攻撃を仕掛けても簡単に避けられ、カウンター気味に放った攻撃も分かっていたかのように防がれていった。

「そーれ！」

「フン……………！」

ただ、彼等の背後から氷を飛ばして攻撃してくるキララが存在がその均衡をわずかに崩す。

当たり前の事だが、彼女はラクウェルと戦った事がなく、ツルギとミカーサの戦い方もよく知らない。

ツルギとミカーサはそれでもうまく連携をとり、ラクウェルは警戒しつつ攻撃を仕掛ける。

「チヨロチヨロと……！」

ラクウエルは一度バックステップで三人と距離をとり、指先を向ける。

「セルシウスバレット！」

「うわわわわっ!？」

「ぐっ………！」

指先から機関銃のように放たれる氷の粒を受けて怯む三人にラクウエルが迫る。

「ノース・ブレイク！」

右手に冷気を纏わせながら繰り出される上から叩きつけるような一撃。

負けじとキララも前に立ち、左手を振りかぶる。

「フェアリーハンド！」

氷の妖精の力が籠った左手の突きがラクウェルとぶつかり合う。

お互いに一步も退かず、鏖競り合いのような状態になった後にまた距離を開いた。

「……………一つ聞きたい」

「？」

「あなた達は何のために戦っているの？目的がなければ戦う意味はない」

戦いの最中の突拍子もない問い。

三人は少し考えてから答えた。

「私は……………本当は何と戦えばいいのかまだ分かっていないんです」

「……………実は僕もだ」

「あたしらは先も分からずについて来たみたいなものだからねえ…

…」

「だけど、ヒトの世界で生きる事が難しい私のために精一杯尽くしてくれたエリー様達が生きているこの世界で、同じヒト同士が傷つけ合っているんです。黙って見ていられる訳ないじゃないですか！」

「あたし達はキララみたいな大それた理由なんてないわ。だけど……」

「こんな純粋な女の子が僕達の目の前でこんな事を言い出してるんだ。放っちゃおけないだろう!」

「…………その意気や良し、ってね!」

ラクウエルのこの言葉の後、四人は戦いを再開した。

—SIDE エリー組—

「オラオラ〜! どんどんいくぜ〜!」

こちらではジョシユアの激しい炎攻撃に苦戦を強いられていた。

「負けるかっ!」

しかし、エリー達も炎をかい潜り、反撃を試みる。

「でええーい!」

「だりゃあああ！」

エンシエントブレイバーとアンセスターブルーの同時攻撃を炎の盾で防ぐジョシュアはさらに反撃を仕掛け、距離が離れると炎による遠距離攻撃が再び飛んでくる。

彼の戦いには一切の隙がなく、エリー達はなかなか攻め切れずにいた。

「どいてなさい！ ナイト・カノン！」

背後からのヴィヴィアンの声の後、エリーの背後から黒い弾丸が飛びジョシュアに命中する。

「アッハハハハ、この私の相棒『ケルベロス』の味はどうよ？」

二丁拳銃をクルクル回しながら得意げになるヴィヴィアン。

ちなみに、この『ケルベロス』はデバイスではなく、アナザー・アースで開発された魔導兵器である。

「三つ首の地獄の番人の名前なのに銃は二丁とかそういう事は言っちゃダメよ」

「誰がうまい事言えと！」

ツツコミを入れながらリーフはフォルトレイヤーを構えて走り込む。

「ほう……元管理局風情が随分張り切ってるじゃねーか」

刃と炎が激突し、衝撃が広がる。

「ウチの情報源によれば、お前さんも管理局のやり方にウンザリしていたそうじゃないか。だったらなぜその管理局の連中に味方する？ 奴らもその一部だろうが！」

叫びながら刃を押し返し、構えをとるジョシユアに対し、リーフは答えようとする。

「確かに――」

「確かにあなた達にとってはそうかもしれない。だけど……！」

だが、先に答えたのはエリーだった。

「あそこに居るのは私の仲間であり、友達。それ以外に助ける理由なんてあるのかしら？」

「だってさ。さて、そろそろバトル再開だ！」

「主の友達を守るのも仕事だって訳ね？アハハッ、私も付き合うわ！」

エリーの言葉にブルースとヴィヴィアンが答え、四人の士気はより高まる。

だが、その時だった。

「な、何や！？」

はやての声に一同が振り返ると、いつの間にかはやて達の真上に無数の巨大な火の玉が浮かんでいた。

「そんなに大切なら………守ってみせろよ！己の命をかけて！」

ジョシュアの手がゆっくりと上がる。

「ぶっ壊れろ！メテオ・スピリット！」

指を鳴らす音が響き渡り、同時に火球が降り注ぐ。

狙いは当然、はやてとフォワード陣。

「……っ！やらせるか！」

翼での低空飛行で回り込んだエリーの雷が火球を撃ち落としていく。

「こいつはヤバイぜ！」

「周りの何人かが巻き添えを喰らっておる……なりふり構わずという事か」

「分かりやすくていいじゃん！アハッ♪」

「ティアさん、大丈夫ですか？」

「ちょっとキツイかも……」

「キャロ、平気？」

「な、なんとか……」

「みんな、無理はせえへんようにな……」

ブルースとリーフは必死に防御姿勢をとるはやて達を身体を張って守り、ヴィヴィアンはこの状況を楽しんでいるような笑みを浮かべながら火球を一つずつ撃ち落とす。

「……私達は目の前の敵に集中しましょう」

「あたし達の先生だった人だけあって、よそ見は許してくれないみたいだし」

「チッ……ここは教室じゃないってのに」

ツルギ達も助けに向かおうとするが、ラクウェルに足止めされていた。

「なかなかしぶといじゃないか。だが、終わりだ！」

その間に、ジョシュアによってより一層多くの火球が現れる。

「くたばれ！ブリキの兵隊ども！」

ズドズドズドドドドッ！

一瞬にして辺りはエリー達を中心に火の海となった。

「ぐああ！」

「……っ！スバル！」

「大丈夫……まだ………！」

「くそっ！このままじゃみんなローストチキンだぜ！」

「鳥人間が一人いるからって縁起でもない事を言うでないわ！」

「冗談じゃないわ！こんな所で食べられてたまるもんか！」

「アハハッ、ピンチに見えないんだけど？」

ふざけているように見えるが、エリー達はかなり追い込まれている。

「………そろそろチェックメイトといこうか！」

「！？」

再びはやて達の頭上に現れる火球。

だが、その大きさはこれまでよりも一際大きいものであった。

「燃え尽きな！」

火球がゆつくりと落下し始める。

「くっ……これじゃ……！」

「マズイ……防ぎようも逃げようもあらへん……！」

目に映る業火の前に、エリーのはやての目に僅かな絶望が浮かぶ。

しかし……

「例えお主達が諦めようとも、我等は最後まで戦う！のう、お主達？」

「おうよ！」

「アッハハハハ！当然！」

それでもなおブルース、リーフ、ヴィヴィアンは立ち向かう事をやめない。

（……………凄いな）

三人の姿を見ているエリーの心の中から、言いようのない感情が溢れ出し始めた。

（自分がこんなに傷ついたとしても、必死で私を守ってくれる………
…）

“ドクンッ”

エリーの身体の奥底で、あの時の鼓動が鳴り響く。

（本当は……私が一番頑張らなきゃいけないのに………！）

“ドクンッ”

（何を恐れてるのよ、私は………！）

“ ドクンッ ”

（自分が助けられてばかりでどうするのよ………！）

“ ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ ”

「何縮こまってんのよ私あああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああっ！」

―叫びと共に、光と闇、紅と黒が爆ぜた。

.....

「出やがったか……。グーナから聞いた通りだぜ」

砂煙の中に、ジョシユアは強大な力の存在を感じていた。

「そいつが管理局に植え付けられた、お前自身の望まぬ力か」

その者の力により、業火はすでに雷鳴に飲み込まれて完全に消滅していた。

「確かにそうだった。昔はな……」

ブオオオオオオオッ！

煙が吹き飛ばされ、その姿が明らかになる。

「だが、皮肉にも今は私のものだ………」

それは、真紅と純白のその身を白銀と漆黒に染め、ダークサイドの力を解放したエリーの姿だった。

「……………はやて達を……………お願い」

「……………ああ」

「任せておけ……………！」

「いいわよ♪」

「エリーさん、また銀色に……………」

「大丈夫かな……………」

「キュ……………」

「いや……………エリーならきつと！」

「信じるしか……………ない？」

「そうやな。前みたいに派手に倒れたりしない事を祈るしかないな」

そんな中、エリーの足音が響く。

「勝負は……これから」

—To Be Continued.

STAGE 14 Bパート（後書き）

キララ

「ダークサイド再び！」

エリオ

「目が輝いてるのは気のせい？」

リーフ

「次回、STAGE 15『壮絶な決着』を楽しみに待っていてくれ！」

エリー

「負けてたまるかああああああああっ！」

STAGE 15 壮絶な決着 Aパート（前書き）

V S 日輪&氷雪、決着！

STAGE 15 壮絶な決着 Aパート

「勝負は……これから」

低い声とほぼ同時に振るわれるエリーの鋭い一撃がジョシユアに向かう。

「うおっと危な——」

「こっちよ」

それを避けた瞬間、一瞬とも言える程の速さでエリーがジョシユアの背後に回る。

「碎け、トールハンマー」

クラッシュャーモードとなったエンシェントブレイバーでの豪快なフルスイングが背中に決まる。

鉄球の重い一撃に、ジョシユアの身体が15メートルは吹き飛んだ。

「ぐふっ……何だってんだ？さっきとはまるで違う……！？」

先程までとは比べものにならないパワーと速さに驚く暇もなく次の攻撃が始まる。

「ちいっ！ナメるなよおっ！」

ジョシユアの左の拳が地面に叩き込まれ、激しい炎がその周りから溢れ出し始めた。

これにはさすがのエリーも一步退くが、すぐにエンシェントブレイバーをランスモードに切り換え、構え直しつつその翼でジョシユアの真上へと飛び上がる。

「……上がガラ空き！」

「そうかな？」

ゴオオオオ……バシッ、バシッ、バシッ、バシッ！

地上から空中のエリーに向かって放たれる火炎弾を捌き、炎の壁の

中心のジョシユアに一撃を加えようと滑空する。

その勢いでの攻撃は横に飛び込むようにしてかわされる。

だが、今のエリーはみすみす避けられたまままで済む程甘くはない。

「逃がすか！」

「何……うおっ！」

エリーの左手から黒い雷が鞭のように伸びてジョシユアを捕らえ、目の前に引き寄せる。

バチバチバチッ！

「ぐわ——っ!？」

そのまま左手を身体に押し当て、直接電流を流し込む。

その後ジョシユアを蹴り飛ばし、距離を取った。

「いやー、やはり凄まじいのう」

「どうすんの？このままじゃ私達の出番がないよ?」

「なーに、いざとなったら俺らも行くさ」

「や、やっぱり銀色のエリーさんってちょっと危ないかも……」

「キュウ………」

「あたし達も気をつけないと……」

「僕達も巻き込まれない保証はないですからね」

「死にはしないと思うよ？エリーだし」

「死なないとは思うけど危ないと思うで」

「……ぐっ、思ったよりやるじゃねえか」

仲間達が口々に言う間に、ジョシユアが身体から煙を出しながら立ち上がる。

「頑丈な奴め……ならばこれでっ……！」

バックステップで距離を取って目の前に手を翳すと、黒い雷を帯びた魔法陣が現れ、輝きを増していく。

「ジュシユアの奴、あのお姫様を本気にさせたようね……」

「え………あっ！」

「ああっ、またエリー様が黒く！」

「あの魔法陣………ギャラルホルンとかいうやつを撃つ気だ！」

戦いの最中であつたツルギ組とラクウエルもそれに気づいて一瞬そちらを向くが、すぐにお互いの方に向き直つて戦いを再開する。

その間にエリーの元には雷のエネルギーが限界まで溜まり、いつでも撃てるようになっていた。

「我が魂と共に、光と闇の狭間を開け！」

バチバチバチバチ………！

「薙ぎ払え、ギャラルホルン」

アルタイル魔法学園での戦いの中で輝いた裁きの雷がエリーの手元から溢れ出し、その先に居るジョシユアを襲う。

しかしあちらもこれを喰らうのをただ黙って待つ訳がなく、雷を防ごうと巨大な炎の壁を作り上げた。

「そんな単純な防御で………！」

雷が炎の壁にぶつかろうとした時だった。

「……単純なのはお前の方だ！」

バシイイイイツ！

「……………何！？」

雷が炎の壁に当たり、僅かに横に逸れた。

よく見ると炎は少し斜め向きになっており、正面からの電撃を見事に受け流したのだ。

「なっ……………うわっ！？」

受け流された雷が飛ぶ方向にはツルギ組とラクウェル。

雷はラクウエルを背後を掠め、近くの木を一瞬で灰燼と化した。

「やれやれ、お仲間まで巻き込む気かしら、あのお姫様は」

「さあね。だが、おかげでチャンスができた」

「何……………っ!？」

突然ラクウエルが身体が金縛りのように完全に動きを止めた。
彼女の影にはいつの間にか針のようなものが刺さっている。

「影縫いの術ってやつさ。たとえ先生でもそう簡単には抜け出せない」

僅かな隙がラクウエルにとって命取りとなった。影縫いから抜け出そうともがくも、身体が動く気配はない。

「とどめは私ですっ!」

その目の前でキララがヴァレットミークに巨大な氷の刃を纏わせ、今にも横に薙ぎ払わんとしていた。

一方、エリー側では……

「俺ってそんなに脳みそ筋肉に見えるか？」

「くっ………！」

ギャラルホルンをいとも簡単に凌ぎ、所謂どや顔になるジョシユアを前に、悔しげな表情をするエリー。

だが、もうその余裕もなくなる。

バチバチッ………！

「うあっ………うっ………あ………ぐうううううう！」

ギャラルホルンを使った事で力が限界を迎え、エリーの身体を雷と闇が侵食し始める。

完全に喰い尽くされる前に暴走する力を押さえ込み、元の姿に戻る。しかし、その時にはすでに息も絶え絶えだった。

「さて、そろそろとどめと行こうか」

「ふぐっ……………！」

首を掴み、華奢な身体でもがくエリーに火炎に包まれた拳をぶつけようとした時だった。

「そうは問屋が……………！」

「降ろさないよ……………？アハッ♪」

「……………いっ！？」

ブルースとヴィヴィアンの声とオーラがジョシユアを振り向かせる。

「あんな必殺技があるのはお姫様だけじゃないんだよ？」

「今度は俺達の番だぜ！」

「面白え……………来いよ！どんな攻撃でも完璧に受け切ってやるぜ！」

自分の後ろにエリーを乱暴に投げ捨て、そちらに視線を向ける。

「喰らえ！ハイドロマーセナリー！」

「吹き飛んじゃえ！ブラッキーバースト！」

ブルースの手から荒々しい水流が溢れ、同時にヴィヴィアンの周囲に浮かぶ闇の球体とケルベロスから強力な黒いレーザーが放たれる。

ジョシユアは先程のギャラルホルンより威力は下だと判断し、炎の壁で真っ向から防ごうとするが……

「何だ、この威力は！？この俺が防ぎ切れないだと！？」

先程までの余裕がまるでなくなっていた。

力を集中させて水と闇を防ぐが、徐々に押され始めている。

それもその筈、ジョシユアはエリーの攻撃を余裕で受け流したように見えて実際はかなりの魔力を消費していたのだ。

そんな状態では二人同時の渾身の技を防ぎ切るのはほぼ不可能。

エリーは彼より先にそれに気づき、小さく笑った。

ズゴオオオオオッ！

「ぐおおおおお！」

そして、遂に防御が崩れ、その身体が吹き飛ばされた。

そして、ツルギ側では……………

「終わりです！ビッグアイスソード！」

バキヤーーーーッ！

「ぐはあーーーーっ！」

その名の通り巨大な氷の剣となったヴァレットミークの横殴りの一撃が炸裂。

その寸前でツルギが影縫いの針を引き抜いたために、拘束が解かれたラクウエルが強く吹き飛ばす。

「「「……………あっ！」」」

この時、ブルース、ヴィヴィアン、キララが同時に声を上げた。

吹き飛ばされたジョシアとラクウエルの身体は、このまま空中で衝突しようとしていた。

ところが、その先にはエリーの姿が……………

「……………あ、私終わった」

ドガーーーーーッ！

「「ぎゃああゝゝ！」」

「……………（、旦那）」
「…………アツハハハハ、いいオチがついたわね」
「…………エリー様あああああああああああああああゝゝ！」

かくして、聖アポカリプス学園での戦いは敵二人の撃破とエリーのノックアウトで幕を閉じた。

―Bパートへ続く

STAGE 15 壮絶な決着 Aパート（後書き）

ブルース

「決着ついたのに続くんかい！」

スバル

「それを言うのは野暮ってものですよ」

STAGE 15 Bパート（前書き）

正直、今回はSTAGE 15. 5にした方がよかったというような出来です。

STAGE 15 Bパート

決着から数分後。

ジョシユアとラクウエルはブルースによって縄で縛られていた。

「別に暴れたりはないって。俺らは負けたんだからよ」

「まあ、信用できないのは分かるけど」

縛られてもなお口調が変わらない二人だが、少し悔しげな印象であった。

何しろ一方はエリーの渾身の攻撃をかわすために魔力を使い切ったために他の仲間の攻撃を防ぎ切れず、ラクウエルは身動きを封じられた状態で思い切り殴られた（斬られた？）のだから。

しかし、ただでさえボロボロのこの二人より酷い状態になっている者が居た。

「きゅう……………」

「やれやれ、みんな張り切りすぎじゃ」

「まさかこうなるとは思わなかったぜ」

「目を回すエリー様……………なんか新鮮ですう……………」

「アハッ♪可愛い♪」

ダークサイドの力を使い果たし、立つのもやっとの状態の上に最後の攻撃で吹き飛ばされたジョシュアとラクウェルに挟まれたエリーはほぼ完全にグロッキー状態になっている。

「あたし達にはただ目を回してるだけにしか見えないんだけど」

「頑丈なお姫様だ……………」

仲間達に囲まれるエリーを心配しつつ、はやてが二人に近づこうとする。

しかし……………

「さうと、なぜいきなりウチらにケンカ吹っ掛けてきたのか、その理由を教えてもら……………」

—こつぜん。

「あるえ！？居ない……」

「不自然なほど逃げるのが早いですね……」

「とりあえず一難去ったという事で」

その後、一行は救急車を呼んで怪我人を運び、のびているエリーを運びながら宿を探す事にしたのだった。

「色々と省略してるみたいやけど大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

—6時間後—

「……降ってるな」

その日の夜は雷を伴う急な大雨になり、ホテルの窓の外では雨音が

絶え間なく鳴り続ける。

男三人（ブルース・リーフ・ツルギ）は数分に一回鳴り響く激しい雷の音を聞きながら次なる旅のために荷物を確認している。

その時、ドアがノックされる。

「……………／／／」

「む？ キャロか。どうした、そんな顔して」

「え…え〜と…………あの、その…………エリーさんとヴィヴィアンが…
…」

「エリーとヴィヴィアンがどうかしたのか？」

なぜか顔が真っ赤のキャロに連れられ、三人はエリーの部屋へ。

「ほくら、こっちや」

その部屋のドアには残りのメンバーが集まり、ドアに耳を傾けていた。

はやてに言われるがままに三人も近づくと…………

―ちよつと…………そろそろやめにしない？

―何よ、まだ元気じゃない

「な、なんでそう見えるの……もう頭がボーンとしてるの……
「アハハッ……夜はまだ始まったばかりだよ？
「そ、そんな……ああんっ、ダメ……んっ……／＼／＼
「んんっ……ふう……／＼／＼
「あ……ああ……はあん……／＼／＼

「「（、Д）」」

「うはー、これは激しいでー」
「……発情してあたしの胸触らないでよ？」
「えー！」
（考えるな考えるな考えるな考えるな……）
「エリー様あ……／＼／＼」
「……あ、あたしもクラクラしそう……」

ドアの隙間から聞こえるエリーとヴィヴィアンの甘い声に女性陣が頬を染めている。

「一回覗いてみよかー」
「いくら何でもそれはダメだー！早まるなー！」

ブルースの制止を振り切り、中を覗くはやて。

.....

「デイルイトウォーカー？」

「そうよ。驚かせてゴメンネ♪」

落ち着いた一同が話を聞くと、ヴィヴィアンは人間とウサギの霊獣族に見えて実は『デイルイトウォーカー』という吸血種族であるとの事。

デイルイトウォーカーとは吸血鬼の弱点と吸血衝動、及び吸血以外の能力を持たない、言うなれば限りなくヒトに近い吸血鬼なのだそうだ。（エリー談）

ヴィヴィアンがフォワードの血を狙って追いかけ回し始めているのを尻目に他の仲間達が血を吸われてボーッとしているエリーを介抱する。

「一応血がなくても生きていけるんだけど、吸えば元気になるんだってさ……………はう……………」

「随分とフラフラだな」

「一部の文献によると、吸血鬼が血を吸うときにはなんだか『ピンクな意味で』気持ちいいらしいんやけど、ホントかいな？」

「僕は知らんね」

「あれ？ミカーサもエリー様の声にウツトリしちゃいました？」

「なっ……………何でもないわよっ！／＼／＼」

「うむ…………リアクションしづらいぞい」

「ともかく、ヴィヴィアンも一緒に来る気みたいやし、たまにはご奉仕してやらんとな」

「ピンクな意味ですか？」

「おい馬鹿やめろ」

とりあえずエリーが元に戻るのを待ってから、次なる旅の準備をする事となった。

「ああゝ！ヴィヴィアンがスバルさんの血吸って倒れたゝ！」

「…………あたしの血、おいしくなかったのかな」

「僕達、こっち来てからハンバーガーばっか食べてたからなあ…………」

「ち、違うの…………うっかりしてリンパ管の中身吸っちゃったの…………」

「リンパ管って……………」

…………訂正。エリーとヴィヴィアンが立ち直るのを待ってから次の旅の準備を進める事となった。

「大丈夫じゃろか、このパーティ……」

「ロサンゼルス某所」

エリー達の目の前から逃げたジョシユアとラクウェルは白い少年の元に居た。

「つつー訳で、見事にやられちゃったぜ」

「生徒が成長している姿を見るのは悪い事じゃないんですけどね」

「いや、君達のおかげでいいデータが取れた。勝敗は特に問題じゃないさ。……で、次はどこへ行くんだろうな？」

「日本とか言ってたが？」

「日本か……確か今エスクダルとドグマが遊びに行ってるな。ここは彼等に任せるとしよう」

そう言う通信機のようなものを取り出す。

「エスクダル、ドグマ」

『エリー王女がこっちに来るのかい?』

「お? 分かってるじゃないか。……そこが平和主義の国の中だから
って容赦はしなくてもいいよ」

『おうよ!』

「……全てのヒトに必ずあるモノ、それは心の中の小さな闇。そして、力を持たない者の平凡な日常を壊すのは、いつだってそれを抑える事ができないヒトの弱さ………」

少し悲しげな表情になった後、彼は言い放つ。

「そして、それを知ろうとせず、それを認める強さを持つとうとしな
い者達だ。まあ、僕も似たようなものだけどね………」

—T o B e c o n t i n u e d .

STAGE 15 Bパート（後書き）

～次回予告～

ミカーサ

「こっちの世界でも平和主義国家である日本へとやって来たあたし達」

リーフ

「そこで我々は、ある意味奇跡の邂逅を果たす事になる……………」

はやて

「今回は兼ねてより予定していた、今話題のあのゲームとのコラボや！」

ヴィヴィアン

「次回、STAGE 16『偶像大使』をお楽しみに！」

エリー

「魔導戦記ですよ、魔導戦記！」

ツルギ

「……………バレたな」

新たな仲間&新ライバルキャラ紹介（前書き）

STAGE13～STAGE15で登場した新たな仲間と敵キャラを紹介します。

新たな仲間&新ライバルキャラ紹介

ヴィヴィアン・フルーレ・ミストレス

CV…戸松遥

種族…デイトライトウオーカー

年齢…Unknown

血液型…B型

身長…171センチ（ウサミミ14センチ含む）

体重…39キロ

ランク…陸戦B+

魔力光…紫色

身体的特徴…白髪・ウサミミ・ウサギの尻尾と赤目・小さな牙

武装…魔導兵器ケルベロス

ロサンゼルスで一行が遭遇したデイトライトウオーカーの少女。

見た目はウサミミ以外普通なのだが、実は腕の立つスパイであり、その仕事のためにフォルティス・レインを訪れた際にエリーと仲良

くなった。因みに、銃撃戦が二人の主な遊び。

デイライトウォーカーは完全な吸血鬼と違って血を吸わなくても生きていけるので、吸うとしてもおやつ感覚である。

二丁拳銃型のアナザー・アース製魔導兵器『ケルベロス』を使った遠距離からの攻撃を得意とし、闇属性の魔術を使う。

吸血鬼としての弱点はないはずなのにニンニクが苦手で、しかもカナヅチ（普通の吸血鬼は流れる水の上を渡れない）。

見た目通りというか、好きなものはニンジン。

時折発する狂気じみた笑い声もその特徴の一つだが、本人は普通に笑っているつもりのようだ。また、自分がスパイである事を口を滑らせてしまったり、吸血時に血管ではなくリンパ管の中身を吸ってしまうなどドジな一面も。

元々は見た目通りの種族だったようだが……？

鬼火のジョシユア

CV..置鮎龍太郎

種族..人間

年齢…31歳

血液型…O型

身長…186センチ

体重…76キロ

ランク…陸戦S-

身体的特徴…炎のような色の髪

武装…特になし

スターラルガ・ファイブナイツの一人にしてそのまとめ役。

ぶっきらぼうに見えて真面目な性格であり、エリー達に対して一度、（脅すような形ではあるが）戦いを避けたいという意味を見せている。

しかし一度戦いが始まれば『鬼火』というレベルではない激しい炎で敵を焼き尽くす。

作中では筋骨隆々なイメージだが、スリムでイケメンな男性である。また、エリーの攻撃を受け流したり、縄で縛られていながらいつの間にかラクウェルと共に逃走していたりするなど、案外策士である。

氷雪のラクウェル

CV..小林ゆう

種族..人間

年齢..Unknown

血液型..A型

身長..169センチ

体重..44キロ

ランク..陸戦A+

身体的特徴..雪のように真っ白なロングヘア

武装..特になし

スターラルガ・ファイブナイツの立場上のサブリーダー。

かつてはツルギとミカーサの母校・アルタイル魔法学園の教師だったが、学園の守り石である『知術の石』を狙った管理局の一部の者達による学園への襲撃事件の後にスターラルガの一員となる。

学園の教員の中でも特に戦闘能力が高かったために一年足らずでファイブナイツの一人に加わったらしい。

性格はかなり強気で、戦いの際には得意技の水の魔術を使い、授業と同じく手加減は一切しない。

教員でなくなってもやっぱり自分の生徒だった者達の事は心配のようだ。

STAGE 16 偶像大使 Aパート（前書き）

遂にやってしまった。だが後悔はしていない。

それでは、どうぞ！

STAGE 16 偶像大使 Aパート

「やって来た……遂にやって来たわよ、日本！」

ロサンゼルスでヴィヴィアンを仲間に加えたエリー達が今回やって来たのは、アナザー・アースでも地球と変わらず平和主義の国である日本。

しかし、平和主義といってもあくまで他国との戦争をしないだけであり、ミネルヴァとスターラルガの骨肉の争いは他国と同様に続いているという……

暴動になる事は少ないものの、このおかげで一部治安が良くない所もあるそうだ。

しかし………

「日本の映画マジいい話だぜ」

「時代劇……いいのう」

「やっぱり日本のマンガ文化って凄いでゲソ！」 ↑女装中

……男三人はそんなの関係ないと言わんばかりに日本の文化を楽しんでいた。

「つて、一体何に侵略されてるんやこの人は！」

「……女そ……う？」

「痛い……これはいくらなんでも痛すぎる………」

「アハハッ、楽しそうな所悪いけどちよつといい？」

はやてとフォワード陣がツルギのコスプレに苦笑いしているのを見ながらヴィヴィアンが口を開く。

「日本に来たはいいけどさ、ここじゃ今私達がやれる事はないんじゃないかな……ポリポリ」

カップに入った野菜スティックの中のニンジンをかじりながら言った。

その直後、キララがムツとした顔でヴィヴィアンに近づく。

「何言ってるんですか！せっかくエリー様も張り切っておられるのに！」

「別にいいんじゃないの？私達にやれる事がないって事は平和だって事なんだしさ、ポリポリ」

「確かにそうかもしれんな。今じゃ日本は政権がどうか地震からの復興がどうかでミネルヴァ派もスターラルガ派も争ってられない状態じゃからのう」

「うゝん、確かに……ん？」

その言葉を聞いて考え込むエリーの視界に、あるものが映った。

一人の金髪の若い男性と帽子を被った女性がカメラを持った小柄な中年の男に付き纏われている。

「おやおや、デートですかな？ん？」

男女は無視して歩いていこうとするが、中年はそれでもストーカー行為を続ける。

その背後に、人影。

ちよんちよん

「ん？」

ガラガラドシャーン！（雷）

「ぐばっはあああああああああ！？」

有無を言わさぬ一発の雷が中年を一瞬にして真っ黒なシルエットに変える。

「ちょっと！嫌がってるでしょ！」

その雷の主がエリーであるのは言うまでもない。

残りの女三人と六課組が真っ黒焦げになった中年を睨むのを見てから、ブルース達が男女に近づく。

「大丈夫で……ん？」

「あ………んお？」

.....

「もしや、ジャッキーか!？」

「おお! 誰かと思えばツルギじゃねーか!」

面識があつたのか、ジャッキーと呼ばれた青年がツルギを見て声を上げる。

「あの……もしかしてプロデューサーさんの……」

「ああ。アメリカに居た時の悪友みたいなものさ」

「む? 今プロデューサーと言ったようだが。もしやそっちの娘さんはアイドルか何か……」

「しーっ! しーっ!」

「ムッフッフ、アイドルと聞いたら放っておけへんな? どうやらその様子やいつもゴシップ記事を書いてばかりの悪徳記者にでも絡まれてたって感じやな? そうやろ?」

「ちよ、はやて! 顔が近いぞ顔が!」

いきなりリーフの前に姿を表し、オヤジ臭い表情でこちらを見る。

それと同時に、はやては自分の荷物の中から『アイドル』という言葉に反応した理由である、あるものを取り出した。

……それはどこからどう見てもPSP。

はやての手には『アイドルマスターSP』のソフトもあった。（しかも3バージョン全部）

「現実のアイドルもええけど、やっぱアイマスもいいで〜」

「そういえば私の部下の中に休憩時間に地球からの輸入品をやりながら『いおりん最高!』とか『なんくるねえな』とか言っておった者が居たような」

「おお! ミッドでも流行ったんですか!」

「それよりはやて、コレどうすりゃいいの〜?」

その後ろでは黒コゲになりながらもカメラを構えようとする悪徳記者?を抑えるエリー達の姿があった。

「ああ、エリーはみんなとそのおっちゃんを止めてて〜な。ウチらはフォワードのみんななどこの人達を安全な場所へ連れていくから」
「え? なぜに僕達まで!?!」

指示通りにフォワード陣がジャッキーとアイドル？を連れてその場を離れていく。

そして悪徳記者を抑えるエリー達を尻目にはやてもついていった。

.....

「ここまで来れば大丈夫やな」

「いやゝ助かったぜ。俺らは新しい衣装買いに行こうとしてただけだったのに」

「そうなんか。せっかくやし、ウチらにだけこっそり顔見せてゝな」

そう言うと、アイドル？は帽子を脱いで素顔を見せた。

頭にリボンと緑の瞳を持つ可愛らしい少女だった。

「.....!?!」

……が、なぜかはやてはその顔にびっくり仰天。

次元世界広しといえども、これほど驚いたことはないという表情になっていた。

というのも無理はない。

なぜなら………

「……な、名前はなんていうんや………?」

「私ですか?」

なぜなら彼女は………

「私、天海春香っていいます!」

はやての世界では、架空の存在であるはずのものであったからだ。

― B
パートへ続く

STAGE 16 偶像大使 Aパート（後書き）

はやて

「という訳で、アイドルマスターコラボ編スタートや〜！」

ブルース

「そんなコラボで大丈夫か？」

キララ

「アイマスもののポもバンダイナムコゲームスの制作だから大丈夫です！多分」

ティアナ

「サブタイの『偶像大使』って？」

ミカーサ

「『アイドルマスター』の中国読みらしいんだけど、合ってるのかしら？」

エリー

「今回はアイマスをよく知らない人のためにはやてが色々解説してくれるわ」

STAGE 16B 八神はやてPのアイドル紹介（前書き）

前回から始まったアイマスコラボ編。

今回ははやてに色々紹介してもらいましょう。

いくら様々な次元世界を見ているとはいえ、このような事は初めてのはやて。

「あ、私達のゲーム遊んでくれてるんですか？ありがとうございます！す！」

「自覚あったんだ……。ところで、そっちの人は……………」

「あ、この人は私達のファン代表プロデューサーさんの……………」

「『ジャッキー・ラストイード』ってんだ。どうやら俺の友人が世話になってるようだな」

「あゝ、そうなんや。実は……………」

……………

「旅ですか……………実プロデューサーさんもなんです」

「ああ。旅先で金稼ぎしようと思ったら765プロの社長さんに出会ってな、ちょっと事務所の手伝いをしないかって誘われたって訳だ」

「旅人をファン代表プロデューサーにするなんてどんだけフリーダムな事務所やねん!？」

その後、六課組はエリー達に連絡を取った後ジャッキー、春香と共に765プロの事務所へ向かう事に。

「やっぱりアイドルの事務所っていうからには立派なんだろうな……」

「いやいや、私が知っとる765プロはボロい雑居ビル……」

……の筈が、なんとも立派なビルだった。

「めっちゃデカイ！いつこんな立派な事務所になったんや!？」

「俺が来た時はもうこんなだったぜ」

※原作のアイドルマスターでもやり込むと事務所が大きくなります

「さあ、入りましょう!」

……

「随分遅かったわね」

事務所のある一室に入った一同を迎えるのは、少し青みがかかった長髪の少女。

「あ、先にお邪魔してまゝす」
「してますよ」

……と、なぜか居たエリーとキララ。

「あれ？千早ちゃん、その二人は？」
「宿を探しているらしいわ」

「何で居るんだろ、あの二人……」
「他の五人はどこに……？あ、そういえばはやてさんって765プロの方々の事分かるんですよね？」

「……よし、分かった。それじゃウチが『アイドルマスター』と765プロのみんなの事を分かりやすく説明するで」

.....

「そもそも『アイドルマスター』ってどんなゲームなんですか？」

「アイドルマスターっちゅうのは育成シミュレーションゲームにあたるんやけど、一言で言えば『アイドルを育てるゲーム』や」

「という事は、目指すはやっぱりトップアイドル？」

「その通り！そのためにはオーディションを受けたりライブをしたり、アイドル達とコミュニケーションを取ったり色々やる訳で……」

「なんか、大体分かったような分からないような」

「そうか。じゃあ次は舞台となる765プロのみんなを分かりやすく説明するで」

.....

「ではいくで！まずはさっき出会った『天海春香』ちゃんからや！」

「なんか、アイドルマスターの中心って感じですね」

「いえいえ♪」

「純粋にトップアイドルを目指している、頭のリボンがトレードマークでちょっぴりドジな女の子や」

「確かに一日一回は転ぶからな……」

「で、こちらの青っぱい髪の子が……」

「『如月千早』と申します」

「真面目でちょっと固い性格やけど、本当は心優しい女の子や。多分エリーとはいい友達になれそうやな」

「え？」

「……彼女には弟が居たんやけど、交通事故で亡くなっとるんや」

その一言が耳に入り、エリーが千早に顔を向ける。

「……実は私も双子の姉を……」

「え？ あなたも……？」

「ええ。はやての言う通り、あなたとは仲良くなれそうね」

「それと、よく聞くと声がキララに似とるで」

「ほえ？」

「「……………」」

「如月千早です」

「キララ・フェルトレイヴと申します」

「「……………」」

「「目と目があう瞬間 君だと気づいた♪」」

「「……………」」

「ほ、本当だわ……………」

「はわわ……………」

キララと千早の声に驚く一同。

「凄い……歌声まで千早ちゃんにそっくりなんて」

「やっぱいろんな次元世界を巡っているとホントいろんな人に会うな
〜。声だけでなくてこんなトコもそっくりだし（ニヤニヤ）」

「ちよっ、どこを見てるんですか!?!」

にやけるはやての視線は、千早の胸元に向けられていた。

何しろ千早の胸囲は72センチと他の765プロメンバーと比べて小さく、昔からファンの間でネタに……

「ストーーーーップ！それ以上はちーちゃんが泣いちゃうぞ！」

「ちーちゃんって言わないで下さい！……って、キララまで何見て……」

「……………」（自分の胸元を見る）

「……………？」

直後のキララの一言は妖精らしく無邪気で、年頃の女の子にとっては残酷な一言だった。

「いろんな意味で仲間ですねっ！（ワ（））」
「……………くっ（＞＜）」

物事がうまくいかない時などに発する『くっ』も千早の魅力の一つである。

「お茶をお持ちしました」

部屋の奥からボブヘアーの少女がお茶を乗せたお盆を持ってやって来る。

「お。ありがとな。雪歩」

「はやてさん、紹介！」

「OK！この子は『萩原雪歩』。ちょっと気が弱くて控えめやけど、芯が強くてやる時はやるで！」

「芯が強いなんて、そんな……／＼／＼」

「確かにそうなんだがな……」

ジャッキーが指差す先には、所々ボロボロになっていた「キケン」と書かれた貼紙が張られている床。

「落ち込むとすぐに所構わず穴を掘り始めちゃうのが玉にキズなんだよな」

「見かけによらずパワーファイターなのね……」

「あ、そうそう……雪歩は男と犬が苦手やからツルギを近づけちゃダメな」

「ははっ、違いねえな」

そう言いながら湯のみを受け取り、お茶を口の中へ流し込む。

同時に近くの扉が開く。

「ただいまです」

「ただいま戻りました」

「ジャッキーさ〜ん！レッスン終わります……」

「ブーーーーッッ！」

ちょうど中に入ってきたツインテールと黒髪と銀髪の三人。

突然ジャッキーがお茶を吹き出し、黒髪の方の顔面にかかる。

「だ、大丈夫ですか真さん？」

「うう〜……酷いですよいきなり〜！」

「面妖な……」

「す、すまん真……それと貴音、今のどこが面妖なんだ？」

「はやて、紹介頼むわよ」

「任しとき〜な、エリー。さっきお茶をかけられた方は『菊地真』。所謂『ボクっ娘』という奴で、空手黒帯だったりタンクトップでレ

ッスンやったりと色々な所が男っぽいけど、れっきとした年相応の女の子や」

「年相応の女の子って……いやゝあの八神はやてさんにそう言っ頂けるなんて、ボクちよつと嬉しいですねゝ」

「そりゃ良かった。言つとくけど、不用意にカッコイイとか言うと逆に落ち込んでしまうからここ注意な。そしてこっちのツインテールの子が……」

「うっうー！ 『高槻やよい』でーっす！」

「この子は貧しい家の長女で、弟や妹達、両親のために健気に頑張つとる。ウチらを癒してくれる歌声と貧乏人特有の力強さが魅力やで」

「えへへ……」

「貧乏暮らしの人には金持ちにはない強さがあるからねえ……」
「さすがエリーさん、と言うべきか……で、そちらは？」

「――『四条貴音』と申します（古風）」

思わずお辞儀をするはやてとフォワード陣。

まだ子供っぽさが若干残る他のメンバーに比べ、気高い女性という印象がある。

「元々は961プロっていうライバル事務所に居てな……あ、でもパラレル設定の『2』やと最初から765プロやったな。多分この世界は『2』がベースやな。真ちゃんの髪が伸びとるから。さて、彼女は……」

話そうとした時、貴音が口元に人差し指を当ててはやてに微笑む。

「―それ以上は秘密です（ミステリアスに）」

「……と、こんな感じで謎の多い人物や。分かっているのはラーメンが好きという事だけ」

「確かに……謎……なのかな？」

「キュク？」

その横で真の顔を拭くジャッキーは……

「今のお茶じゃなくて青汁だったな。こんなイタズラするのは……
…お前か、真美！」

「あははは、兄ちゃん超おもしろ↓い！」

近くで隠れて見ていた、髪を左頭で留めている『真美』と呼ばれた

少女が部屋の奥へ走り、ジャッキーが追う。

「今追いかけてるのは『双海真美』。無印アイマスやと双子の妹と代わりばんこに一人のアイドルとして、『2』では本人として活動しとる」

「見た所、かなりイタズラ好きな子みたいですね。ところで……」

ティアナが指し示す先にはまた別の金髪の少女が気持ち良さそうに眠っていた。

「ふわふわであったかいの……ムニャムニャ……」

「あの金髪の人は？」

「彼女は『星井美希』。普段はおにぎりと寝る事が好きなもの凄いのんびり屋なんやけど、一度火がつくとどこまでも頑張る子や」

「そうそう。スロースターターって奴だな」

真美を捕まえたジャッキーが言う。

この時真美はなぜか彼の左手にアイアンクローの如く顔を掴まれ、そこから逃れようとジタバタしていた。

その時……

「おい、ハム蔵！どこに居るんだ？出て来てくれよう！」

褐色の肌と長髪を持つ新たな765プロのアイドルが姿を表す。

『ハム蔵』を探しているらしい。

「今度は『我那覇響』ちゃんの登場やな。沖縄からたくさんのお友達と一緒にやって来た活発な子や。きっとフリードを見せたら喜ぶで」

「え？」

はやてに言われた通り、キャロはフリードを響の元へ。

初めて見る飛竜の姿に、エリーにペットのハムスターのハム蔵を見つけてもらって安心する響の顔がさらに明るいものとなる。

「おいカワイイな！よろしくな、りゅう平！」

「キュ！？」

「ちよっ、この子にはちゃんとフリードリヒっていう名前が！（涙目）」

—1時間後—

「では改めまして……」

『765プロへようこそ!』

「……なの!」↑美希

しばらくして残りの仲間達も到着し、眼鏡にスーツの女性に続いてアイドル達が一行に挨拶をする。

「このスーツの人は律ちゃんこと『秋月律子』。『2』だとプロデューサーになってて自分プロデューズできへんようになってんだけど、真面目な所は今も昔も変わらへん!」

「私の事随分気合い入れて紹介してますね……」

「当たり前や。リッチちゃんハカワイインヤデ?」

「さて、あらかた紹介してもらったが、やっぱりいいのう、アイドルマスター……」

「お、リーフってもしかして隠れファンか!」

「管理局員時代に部下と一緒に地球からの輸入品をやった事があつてのう。因みに私はやよい派じゃ」

「だって!良かったねやよいっち!……うう、まだ痛いよ……」
「く、わー」こっとうー!」

「リーフの意外な一面ね。ところで、左端の人は誰？」

ミカーサの言う通り、アイドル達の左端にはどう見ても彼女達よりも年上の事務員らしき女性が居た。

「ああ、この人はウチの事務員の『音無小鳥』さん。どんな人かはやてさんに紹介してもらおうより実際に見てもらった方が早いですね」

そう言うと、律子は小鳥に何やら耳打ちをする。

「……………んなっ!？」

突然顔を赤くする小鳥。

「お、王女様……………？もし王女様と春香ちゃん達が一緒にステージに立ったら……………そして、ゆくゆくは……………!ダ、ダメ……………ダメよ、小鳥い……………!」

「こんな人です。分かりましたか、エリー王女？」
「うん。大体分かった」

「そして、俺は期間限定のファン代表プロデューサー、ジャッキー・ラステイード。よろしくな！」

最後のジャッキーの挨拶の後にエリー達も自己紹介をし、一行は旅の資金を稼ぐために765プロの手伝いをする事になったのだった。

「……………ありゃ？」

「リーフ、どうした？」

「さっきから気になっとったんじやが、双海亜美に水瀬伊織と三浦あずさと高木社長はどこじや？」

「……………」

「…」

「ああー！ー！そういえばー！ー！」

—STAGE 16. 5へ続く

STAGE 16B 八神はやてPのアイドル紹介（後書き）

リーフ

「なぜその四人が行方不明になっておるのかは分かる人には分かる」

ジャッキー

「分からない人は次回をお楽しみにな」

STAGE 16. 5 迷子の社長と竜宮小町（前書き）

前回、エリー一行はツルギの友人でファン代表プロデューサーとなっていたジャッキーと765プロのアイドル達と邂逅を果たした。

果たして、行方不明の高木社長・双海亜美・水瀬伊織・三浦あずさはどこに？

STAGE 16. 5 迷子の社長と竜宮小町

（やあ、読者の諸君。私が765プロの社長の、高木だ。私は今、『竜宮小町』の三人と共にある場所で……）

「貴様ら、どこから入って来た！？（槍を構える）」

「女子供だからといって容赦はせんぞ！（剣を構える）」

「一体ここはどこなのよおおおおおお！」

「亜美もうガクブルだよ……」

「……あら〜？」

どこかのお城で兵士に囲まれていた。

— 765プロ事務所 —

「またどっか行っちゃったのかよ！しかも伊織に亜美と高木社長まで！」

「そうなんですよ。原因は間違いなくあずささんですね、いつものように」

「で、はやて。その『竜宮小町』と高木社長というのは？」

「真美ちゃんの妹の『双海亜美』、立派なおでこウサギのぬいぐるみがトレードマークのツンデレお嬢様『水瀬伊織』、方向音痴で大人のお姉さんな『三浦あずさ』さんの三人からなる律ちゃんプロデュースのユニットや」

「おかげで『2』ではNPCになってしまい、ファンが署名運動を起こしたと部下から聞いた事がある。それでも私はやよい派じゃ」

「高木社長は……ゲームではシルエットしかあらへんからよく分かるん」

はやてが話すその後ろでは春香・響・真美・やよいが『あずささん迷子地図』と書かれた日本地図を取り出してフォワード陣と盛り上がっていた。

地図にはとある番組のダーツでロケ先を決めるコーナーのように四角いマスで区切られ、迷子のあずさが今まで現れたと思われる場所にピンが刺さっている。

おまけにその横には『あずささん迷子地図世界版』と書かれた世界地図が。

何しろこの三浦あずさという人物の方向音痴は常軌を逸しており、東京からいきなり北海道や沖縄に現れたり、ファンから『A級ジャンパー』と呼ばれるほど。

二次創作では軽く次元を越えて平気で外国まで行ってしまいう事もある。

「次元世界はおろか時間まで越えていってしまう前に早く連絡を取らないと！……もしも、あずささくん？」

「お茶をお持ちしました」

「ありがと、雪歩。しかし署名運動までするって……どうなのよ？」

「アンタは何を言うとするんや！」

スパーン！（ハリセン）

「何すんのよー！」

「アホかいな！アケマス時代からの四人のファンにとっては重大な事やないか！まあ、権威のある王女様はゲームやらへんやろうし、そもそも違う世界の出来事やからな」

「世界はともかく、実はエリーもアイマスやってますよー地球からの（ry）」

スバルが取り出したのはエリーの髪のように真っ赤なニンテンドー3DSと『アイドルマスター ディアリースターズ』のソフト。

「ちょーっ!?! 何勝手に私の部屋から持ってきてんのよ!?!」

「おゝDSか。確かにDSもシナリオが良いからなく。エリーはやつぱりエリーだけに水谷絵理派やろ?」

「いや……どちらかというおとこのこと秋月涼のほうが……」

「へゝ、エリーって男おとこのこの娘が好きなんか? (ニヤニヤ)」

「……久々にビリビリいくよ? (黒笑)」

「あの……ケンカは……」

「「雪歩は黙ってて!」」

「うう……酷いゝ」

その時後ろでは実は笑い上戸の千早がはやてのしょうもないギャグに腹を抱えて笑い転げているのをエリオと貴音が介抱しており、キヤロは響と一緒にフリードとハム蔵がじゃれているのを見ている。そしてこの光景になぜか大量の鼻血を流す小鳥にティアナがティッシュを渡していた。

「あ、繋がった! もしもし、あずささん、今どこに………」

「見つかるといいけど………」

「まあ気長に待とうな」

「…………えっ？ フォルティス・レイン王国！？」

「ブーーーーーッッ！」

それを聞いたエリーがお茶を吹き出し、かけられた雪歩は涙目になる。

「ちよっ、エリー王女！？」

「言ったよね！？ 『フォルティス・レイン王国』 って今はっきり言
ったよね！？ ちよっと代わって！」

所変わってフォルティス・レイン城。

「ローリングとは私の事だが？」

「代わってほしいみたいですよ」

そう言いながらローリングに携帯電話を渡すあずさ。

「もしもし、私がフォルティス・レイン執事代表のローリングだが、私に何の用かね？」

『今すぐに目の前の四人を成田空港へ送りなさい』

「い、いきなり何だ！私を誰だと思って……………」

『私の部屋のアイドルマスターDSを勝手に持ち出してうちのメイド達に遊ばせてるローリングでしょ？ちゃんとセーブされてたわ』

「ええ、日高愛の『セーブしよー！』は可愛いとメイド達も……………」

ーパッポー、パッポー

「なーーーーー！？エリー様ーーーーー！？」

『もう一度言うわ。今すぐ四人を成田空港に送りなさい。あ、あずささん……………背が一番高いお姉さんは放っておくとすぐどっか行っ

ちやうから拘束魔法使ったり気絶させてでも連れて来なさい』

「あの……エリーさま」

『いいから72時間以内に連れて来なさい！』

「は、はいいい！仰せのままにいいい！」

そして場所は再び765プロへ。

「飛んでった先がフォルティス・レインとは、運が良かったわね」
「あ、ありがとうございますううう……」

涙ながらにエリーに感謝する律子。

その後、一同は高木社長と竜宮メンバーが帰って来るのを気長に待つ事にしたのであった……

|
T
O

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d.

STAGE 16. 5 迷子の社長と竜宮小町（後書き）

―次回予告―

アイマス組

『今回の魔導戦記リリカルなのはAnother Worldは！』

春香

「今回は私達、バラエティ番組に出る事になります！ところが、そこで『あの人達』と真剣勝負に！これは負けられませんよ！」

律子

「次回、STAGE 17 『宿命のあまあま対決in沖縄』！絶対読んで下さいね！」

エリー

「って、765プロに次回予告乗っ取られた！」

デバイス設定（前書き）

閑話休題という事で、本作オリジナルデバイスの解説です。

デバイス設定

エンシエントブレイバー

使用者…エリー・ミスト

型式…アナザー・アース式人格型アームドデバイス

コア…白

待機状態…白い羽根の髪飾り

管制人格…女性

フエンリィ・リオが妹のエリーの誕生日プレゼントとして用意したデバイス。

記憶を無くした今のエリーを強く支える相棒。

待機状態の時は頭に付けるため、なのはのレイジングハートなどに比べて目立つ。そのためか、普段は無口。

起動状態には基本形態のソードモード、脱着可能な鉄球が取り付けられたクラッシャーモード、ショットガン型のアサルトモード、自らの力で雷の刃を宿すランスモードがの四つのモードがある。また、基本的に真紅を基調としたカラーリングとなる。

アンセスターブルー

使用者…ブルース・ファルガス

型式…アナザー・アース式アームド・ブースト混合デバイス

コア…濃い青色

待機状態…海賊旗を模したキーホルダー

管制人格…なし

フォルティス・レイン城にてエリーのボディガードを勤めるブルースに与えられたデバイス。

形状はキャロのケリュケイオンのような手袋に回転刃が取り付けられたもの。要はTOS-Rのマルタ・ルアルデイの武器。

一応ブーストデバイスの機能によって味方の支援もできるが、あまり使っていない。

フォルトレイヤー

使用者…リーフ・アストレイ

型式…ベルカ式アームドデバイス

コア…マリンブルー

待機状態…腕時計

管制人格…なし

リーフが管理局員時代から愛用するデバイス。

起動状態はいたってシンプルなサーベル型。

特筆すべき点はほとんどないが、こういう簡単な作りだからこそリーフのスタイリッシュな剣術と日々の鍛練による実力が発揮される。

待機状態はエリオのストラダーと同じ腕時計型だが、こちらはトライアスロンの選手が身につけるようなもので、いつでも起動できるようにしてある。

ヴァレットミーク

使用者…キララ・フェルトレイヴ

型式…アナザー・アース式人格型インテリジェントデバイス

コア…薄い水色

待機状態…五角形のペンダント

管制人格…少年

フォルティス・レインのメイド長のリンからキララに譲り渡されたデバイス。

起動状態は真っ白な箒。打撃の威力はそこそこ。
戦い以外では普通の箒として掃除に使う事もある。

アナザー・アースの雪国に育つ魔法樹『ブリリアント・スノウ・ツリー』を主な素材としているしく、超低温の冷気を宿している。
本当に木なのかと仲間達に疑われている。

STAGE17 宿命のあまあま対決 in 沖縄 Aパート (前書き)

STAGE17は長くなるので三つに分ける事にします。

それと、今回はとある歌手の曲が出てきます。

歌詞掲載のガイドラインが出ましたが曲名だけなら大丈夫です、多分。

STAGE 17 宿命のあまあま対決 in 沖縄 A パート

アナザー・アースの日本にて、はやての出身世界である地球では架空の存在である『アイドルマスター』のアイドル達と出会ったエリ―達。

一行が765プロの手伝いを始めてから二日後……

「急ぐぞ〜!」

「は〜い!」

ジャッキーの指揮の元、アイドル達と一行は律子が運転するロケバスのような大型車に乗ってある場所に向かっていた。

ちなみに、千早・真・美希・響はレッスンに向かい、男性陣は小鳥と一緒に事務所で留守番である。

その中には髪を右頭で留めている『双海亜美』、ウサギのぬいぐるみを持つ『水瀬伊織』、背の高く大人っぽい『三浦あずさ』の三人の姿がある。先日フォルティス・レイン王家によって無事に成田空港へ送り届けられたのである。

「まったく……だからあずさを中心に動くのは危険だって言ったのよ」

「本物のお姫ちゃんが居なかったら亜美達一生帰れなかったよ」

「ごめんなさいね」

「大変だったな……しかし、律子が大型車の免許持ってたとはな」

「一応、資格取得が趣味って事になってますから」

「確かアニメで免許証の文字が『律子』やのうて『津子』になっとった気が」

「アッハハハ、何そよれ？ 律っちゃんが津っちゃんになっちゃったワケ？」

「なんかベッドで足纏ってそうね」

律子が運転する車にはアイマスメンバーほぼ全員とはやて・ミカーサ・ヴィヴィアンが乗っている。

残りのメンバーは……

「く、黒いねティア……」

「黒いわね……」

「黒いなあ……」

「黒い……」

「キュ……」

「黒いですう……」

「そうか、黒いか。色の黒さなら地球のみの○んたさんにも負けな
いよ」

高木社長の車でその後を追っていた。

最初はどんな人なのかと楽しみにしていたフォワード陣だったが、対面してみると全身がシルエットのように真っ黒だった。

「何でそんな真っ黒なんですか？」

「ん、これか？ 私達のゲームを楽しんでくれている地球の者達のイメージを崩さないために魔術でこのような姿になっているのだよ」「こっちの世界じゃ普通怪しまれると思うんですけど……………」

高木社長の車にはフォワード陣とキララが乗っている。

「あれ？ エリーは？」

……………

その後、一同はとあるライブステージのような場所に到着していた。

「さて。俺は先日、今度みんなで出演するバラエティ番組に出る相手に連絡をとり、挨拶も兼ねて打ち合わせをするためにここにみんなを呼んだ」

「相手って……どんな人達なんだろう？」

「お、来たぜ」

ジャッキーがやって来る三つの人影を指差す。

それは……

「待たせたな」

「765プロのお嬢さん方、ご機嫌よう」

「やよいちゃ〜ん！ファン代表のお兄さ〜ん！やっほ〜♪」

「おお！ジュピターや！」

「ジュピター？」

「『2』に出てきたライバルの男のアイドルや。アホ毛があるのが熱血漢のリーダー『天ヶ瀬冬馬』、金髪がキザで女の子にモテモテな『伊集院北斗』、おでこが出とるのがちよっぴり腹黒かもしれないな」

い『御手洗翔太』。この三人で765プロと競つとるえ」

「そう言うあんたはあの八神はやてか？」

「うゝん……噂通り美しいお方だ。真ちゃんには負けるけど」

「腹黒って、僕だけ酷っ！確かにやよいちゃんの前で暴言吐いたりしちやってたけどさ……」

「そういえば、アイドルアカデミー大賞はどうなつとるんや？」

「とづくに終わってるけど？俺らも目指してはいたが、天海と仲間達に負けて一度解散したから辞退したぜ」

心なしか楽しそうな冬馬とはやてに春香が話し掛ける。

「そっか。冬馬君ってプロデューサーさんに会ってからまたジュピター始めたんだっけ」

「ああ。東豪寺プロに活動の場を移した今の俺達は今日も絶好調だぜ！」

「りれゝしょん!？」

………

「で、なんでここを待ち合わせ場所にしたんだ？」

「ああ。今日ここで外国からやって来た、なんかも凄いアイドル

がライブをするらしい。俺達はそれを見に来たのさ」

「凄いアイドルかあ……………」

観客席へと移動する一同。

そして、ライブの時間がやって来る。

「お、始まるで〜」

「私達も参考にさせていただきますよ〜」

今後の参考にするために律子がステージに目を向ける。

そして舞台の上に『凄いアイドル』が姿を現す。

ところが、そのアイドルは……………

『（、Д、）』

紅い長髪に真っ赤な瞳の……

「本日は私の為にお越しいただき、本当にありがとうございます」

「っていうか、エリー王女!？」

「何iiiiiiii!？」

一番早く気づいた律子に続けて一同が驚く。

「今からお届けするのは、いまこの瞬間に、大切な人への思いを抱く全ての人達へ贈り物……」

そこまで言うと、ステージの後ろの演奏者達が優しげで、それでいて壮大な音楽を奏で始める。

因みにそのステージの上には、『フェザリア・スカーレット緊急サマーライブ』と書かれたパネル。

恐らくこれは、悲しき過去と破滅を呼ぶ力を背負っているエリーの、夢を与え、世界を希望で照らす一人のアイドルとしての名前だろう。

「今、私の声を届ける為に」

「『SONIC BOOM』」

美しく幻想的なエリーの歌声に、765プロメンバーは魅入られ、ジュピターは感嘆する。

そして、はやてや仲間達は感じていた。

戦いの中で傷ついた心が、安らぎと優しさを取り戻していくのを…
………

.....

ライブ終了後、ステージ裏に集まった一同。

「表向きは悲しみを背負う一国の王女、その裏の顔はフォルティス・レインの歌姫『フェザリア・スカーレット』。その正体はみんなのヒロイン、エリー・ミスト！……なんてね♪」

「うっうー！王女様の歌、とっても感動しました！」

「なんと妖しくも美しき歌声……」

「ホントに凄かったよお姫ちゃん2号！真美もそう思うでしょ？」

「うん！いつか真美達もあんな風にカッコ良く……んっふっふ↓」

上からやよい、貴音、亜美真美が感想を述べ、他のメンバーもうなずく。

ちなみにエリーは765プロメンバーに自分と普通に話す事を許しており、ジュピターにもたった今許した。

「お姫様でアイドル……小鳥さんが薄い本を血眼になって探しそうなステータスね」

「曲はほとんど地球の曲のカバーなんだけどね、アハハッ。因みに

プロデューサーはブルースらしいわ」

「ブルースP……………」

「あー、盛り上がってる所悪いが、そろそろ打ち合わせを……………」
「そうだった！どんな番組なんですか？」

春香に聞かれて番組の資料を取り出すジャッキー。

「なんか、春香と冬馬が沖縄で対決するバラエティ特番らしい」

「え、対決？」

「俺と天海がか？」

「ああ。番組名は『激突・炎のアイドルマスター 宿命のあまあま
対決 in 沖縄』なんだとさ」

それを聞き、しばし沈黙の二人。

「……今から撮影が楽しみだね、冬馬君？（バチバチ）」
「俺もだぜ（バチバチ）」

暑い真夏の陽射しの元で、対を成す二人は激しく火花を散らすのだ
った。

— B
パートへ続く

STAGE 17 宿命のあまあま対決 in 沖縄 A パート (後書き)

エリー

「とある歌手とは、私の声のイメージの坂本真綾さんでしたー！」
↑ウェディングドレス姿

キャロ

「それはいいですけど、何でウェディングドレス着てるんですか？」

エリー

「真綾さんのファンである作者からのメッセージを伝える為よ」

律子

「せゝのっ！」

アイマス組

『坂本真綾さん、ご結婚おめでとうございませう！』

STAGE 17 Bパート（前書き）

最近人気を『魔法少女まどか☆マギカ』にとられている気がする…
……

『まどか』もいい話らしいけど、『なのは』もまだまだ終わってはいない！

STAGE 17 Bパート

打ち合わせから四日後。

飛行機で沖縄へ向かった一行はさらに空港から沖縄のテレビ局のバスでロケ地へ向かう。

一台はなぜか律子が運転し、765プロメンバーが乗っている。

一台にはジュピターが乗り、もう一台にはエリーの仲間達と六課組。

そして、エリーとジャッキーは……………

「ジャッキーも自力で飛べたのね……………」

「ああ。父が所謂『竜人』の種族でな……………」

自らの翼で三台のロケバスの上を飛んでいた。

ジャッキーによれば、彼の父は『カンヘル竜』と呼ばれる、天使の使者とされる竜人の種族であるとの事。

その血が流れるジャッキーの竜の翼はエリーと同じ真っ白なものであったが、美しさではあちらに軍配が上がる。

しかし、こちらの翼は固い表皮と鱗に覆われているため、かなり頑丈なようだ。本人によればカンヘル竜の身体は普通の人間を遥かに越える強度で、マグマにも耐えられるらしい。

「いや、さすがにマグマは無理でしょ？」

「本当だぜ？ 少なくとも俺の翼はな」

.....

「海だ~~~~っ！」

今回のロケ地に辿り着き、アイドル達は大はしゃぎ。律子以外はすぐに水着に着替え、遊び始める。

「若いていいよなあ……」

「なんか今日のブルースさんって、ちょっと年寄り臭いですね？」

「アカン……ウチも今ブルースさんと同じ事言おうとしたわ……」

…OTL」

「まあまあ、はやてさん。響ちゃんからサーターアンダギーアイスもらったんで一緒に食べませんか？」

「やれやれ、こいつのアイス好きは年中無休ね」

「潮風が気持ちいいね」

「キュ〜♪」

「ミカーサとヴィヴィアンと律子さんも泳ぎに行ったらどうですか？ 水着はツルギが用意してくれましたよ」

「ちよつ、キララ！ 何勝手に話を進めてんのよ！／＼／＼」

「待って〜！ 水中潜入用メカがないと私泳げないのよ！」

「じ、実は私も泳ぎは苦手で……」

「ふむ、律子にも苦手分野はあるのか。それにしても、何気にツルギの水着チョイスがなかなか良いセンスじゃ」

「そりゃどうも。あずささんや亜美真美はサイズに苦労したよ……」

…」

一行も楽しげなようだが……

「ぜ〜……ぜ〜……」

「お姫様〜、生きてる〜？」

「そりゃあんだだけ長い時間飛び続けりゃこうなるわな……」

「しかし、間近で見ると本当に美しいお方だ。俺もたくさんの女の

子を見てきたが、やはり一国のお姫様となると……………」

ずっと夏の空を自力で飛び続けたエリーはすっかり疲れ果て、ジュピターの三人に介抱されている。

同じく飛び続けたジャッキーはというと、疲れているにもかかわらずまたしても迷子^{ワレフした}になったあずさを探す為に再び沖繩の空へ飛び立っていったらしく、冬馬から「いいプロデューサーだな」と言われていた。

「千早ちゃん！早く早く！」

「わ、ちよつと待って春香、きゃあ！」

「……………あふう」↑浮き輪に乗って浮かんでいる

「大変ですー！雪歩さんが溺れてますー！」

「浜辺で穴掘るから……………雪歩、今助けるから！」

「あずさー！どこ行つたのよ！」

「相変わらず面妖な……………」

「ぎゃー！わに子が海に逃げたー！」

「うわー！逃げるよ亜美！」

「逃げるよ真美！」

そしてそれをよそにアイドル達は海を満喫するのであった。

―数時間後―

「あら、ジャッキー君は食べないんですか？」

「と……飛びすぎて……はあ、はあ……食う気力すらない……」

あずさを見つけたジャッキーが帰還した後、海の家でかき氷を食べる一同。

が、ジャッキーは疲れて食欲がない。

「冷たくてすっごくおいしいのー！」

「この靈験あらたかな味のかき氷は……わたくし初めてです」

「あずさお姉ちゃんが戻ってきたおかげでやっとかき氷食べられるよー」

「頭が痛くならない程度にどんどん食べてくださいねー」

いつの間にかメイド服に着替えていたキララが千早とほとんど同じ声を発しながらかき氷を運ぶ。

「もう一杯くれ！」

「は〜い♪」

冬馬の注文に笑顔で答える。

しかし、この後冬馬は衝撃の光景を目にする事になる…………

「よいしょ……………」

ピキピキピキ……………パリン

「……………あ？」

キララの左手首が凍り付いたと思ったら、なんとキララは手首から先を切り離してしまったのだ。

すると手から氷の結晶が育ち、左手が元に戻る。

そして切り離れた左手をかき氷機に放り込み……………

ガリガリガリガリ……………

「はい、どうぞ♪」

出来上がったかき氷を笑顔で手渡した。

「いや、恐え〜よ!?! ちょっ、え〜!?!」

驚愕の表情の冬馬をよそに他のメンバーが集まり、興味深そうにキララ（の手首）を見始める。

「ああ、キララが持つ妖精の再生能力ね。夏場はキララのかき氷のおかげで毎日涼しいわ♪」

「はい! 私の身体の一部なのにエリー様も大満足で……………ああ……………考えただけでゾクゾクしちゃいますう〜ああ〜ん／／／／」

「……………（一・一；）」

恍惚とした顔で身悶えするキララを困った顔で指差しながら冬馬はエリーに顔を向ける。

「……………ごめん。そういう子なの」

「……………ふん……………（汗）」

「……………ハッ!？」

その時、いきなり伊織の顔が青ざめていく。

「ひょっとして、私達が食べてるコレって……………まさか……………」

「……………」

その後、ひたすらかき氷を食べ続ける美希を除き、全員がしばらく凍り付いていた…………

「おかわりなのー！」

「はーい♪（パリン）」

「やめて！」

そして時は流れ、夜8時。

「お主ら、大丈夫か？」

「特に害はなかったけど？しかし、まさか沖縄まで来て妖精の手を食わされるとは思わなかった…………」

一行は温泉旅館に泊まる事になり、今は応接室でゆったりしている。

「エリーと765の連中はみんな一足先に温泉に入りいったぞ」

「ウチも入ろー」

「あ、僕達も行くのかな」

はやてとジュピターが脱衣所へ向かおうとした時だった。

—きやあああああゝ！

「今のは……あずさん！」

「何だ何だ？」

突如として響き渡るあずさの悲鳴。

それを聞いてすぐさまダッシュで向かうが、ジュピターは男なので女湯の前まで来て立ち止まる。

ところが、その背後からはやてが……

「いってゐーい！」

「「「うわっ!?」」」

三人の背中を押して女湯に入れた。

「……………」

「わっ!? 何でこっちに!?」 (律子)

「この変態! ド変態! THE変態! へんたいたーれん 変態大人!」 (伊織)

「ほうほう、あまとう達も案外スケベですな」 (真美)

「亜美達のせくちなボディでメロメロにしてあげるよ」 ☆ (亜美)

「きゃあ〜! 見ないでよ冬馬君〜!」 (春香)

「ち、違うんだ! これははやてが……」 (冬馬)

「何してんですか北斗さ〜ん!」 (真)

「こ、これは失礼! 今すぐ外に……」 (北斗)

「翔太君のエッチ〜!」 (やよい)

「ごめ〜んやよいちゃ〜ん!」 (翔太)

「きつと三人とも大きい方が好きだと思うの」 (美希)

「……………くっ」 (千早)

「やはりあなた達も殿方なのですね……」 (貴音)

「あらあら、冬馬君ったら……うふふ……」 (あずさ)

「だから違うんだ〜! 俺達はそんなつもりじゃないんだ〜!」 (冬馬)

騒ぎを聞き付けてきたフォワード陣が呼び掛ける。

返ってきた返事かというと……

―すいませ〜ん、あずさんが体重計に乗ったんです……（律子）
―というか、増えてたのか……（響）

「……はあ？（―ム―）」

拍子抜けの一同。

「なるほどな〜。なのはちゃんも体重計に乗って増えてたら大慌て
やったからな〜」

―それよりはやて？ ちょっとお話しようか？（エリー）

「お、お話？」

―……そう、お話。高町式のO☆H A☆N A☆S H Iをね？（エリ
ー）

.....

「春香、冬馬君、二人とも準備はいいか？」

「はいっ！」

「俺はいつでもいけるぜ」

翌日、沖縄の熱い太陽の下でいよいよ収録が始まろうとしていた。

「こちらの機器に異常はないようじゃ」

「カメラもバッチリだ」

「こっちのカメラもOKね」

「安全確認もバッチリやで」

エリーの仲間達は撮影機器を持って手伝いをしており、六課組は安全配備の為にデバイスとバリアジャケットを展開して配置に付いていた。

「エリーは？」

「ああ、あそこだ」

「なるほど、空撮係か」

エリーは翼で空中でホバリングしながら撮影用のカメラを構えている。

「では、そろそろ本番いきまーす！」

スタッフに呼ばれ、アイドル達はカメラに映る所で準備をする。因みに、浜辺での撮影なので全員水着着用。

「それでは……5……4……3……2……1！」

—Cパートへ続く

STAGE 17 Bパート（後書き）

春香

「やっぱり『リリカルなのは』でしょ！」

冬馬

「いや、『まどか☆マギカ』だろ！」

エリー

「あなたはどっち？」

律子

「エメ○ンのCMみたい」

はやて

「次回はいいよ撮影本番や！」

STAGE 17 Cパート（前書き）

せっかくの撮影スタートなのですが、その内容を考える文才が私には無かった……OTL

ともかく、長かったSTAGE 17もこれで最後です。

STAGE 17 Cパート

「よい、スタート！」

『激突！炎のアイドルマスター！宿命のあまあま対決 in 沖縄！』

なぜか司会者になっている律子によって告げられる番組のスタート。

同時に撮影現場の浜辺に集まっていた観客が拍手を送る。

「さあ、始まりました、激突！炎のアイドルマスター。二人のアイドルがただひたすら対決するこの番組も今回で三回目。司会はこの私秋月律子でお送りします！」

観客からさらに大きな拍手が送られる。

「では、今回対決するお二人に登場してもらいましょう！765プロダクションより天海春香と、東豪寺プロダクションより天ヶ瀬冬馬です！」

「イエーイ！」

「ヒヤッハー！」

律子が言い終わるとミカーサがカメラに映らない場所から合図を送り、それを受けたツルギによって大量のスモークが焚かれ始める。

その向こう側から紅いビキニ水着の春香と黒い海パン一丁の冬馬が盛大な拍手と黄色い声援を浴びながらカメラの前に姿を現した。

.....

春香と冬馬による自己紹介の後にCMを挟み、二人は現在クイズ対決をしている。

「これはいい絵がとれそうじゃ」

「すっかりカメラマンになってるようだな。ところで、エリーはなぜここに？」

「さっきスタッフから今は空撮係はいらないって言われたから……ん？」

春香に目を向けるエリー。

元気にクイズに答える彼女の首には、銀色の十字架のペンダントがかけられていた。

「ああ、あれか。あれは俺が来る前のプロデューサーがIA大賞が終わってハリウッドへ行く前に春香にあげたんだとさ。なんでも、持っているとステージでファンの声がよく聞こえるらしい」

「そう……………（何だろ、この感じ）」

エリーは心の中で呟くと、アルタイル魔法学園で手に入れた知術の石を取り出した。

（一体何なんだろう……………何か同じ感じがする）

そんな中、撮影は順調に進む。

その後春香と冬馬はビーチフラッグスで対決したり……………

「取ったゲロー！」

「冬馬君速い〜！」

かき氷の早食い対決をしたり……………

「あ、頭が……………」

「またあのメイド妖精の手じゃないだろうな？」

黒ひげならぬ『如月千早危機一髪』をやったり……………

スポーーン！（千早が樽から飛び出す）

「勝利ですよ、勝利！」

「何で私がー！？」

「如月エ……………」

楽しく可笑しく収録は進んでいった。

そして、夜まで続いた収録も終わりが近づく。

「さうて、最終種目はステージパフォーマンス対決です！」

浜辺に用意された特設ステージの上でスポットライトに照らされる
律子。

同時にステージ衣装に着替えた二人が登場。
観客はさらに盛り上がる。

「カメラOK！」

「音声機器もバッチリ！」

「ステージの機器に異常なし、っと………」

エリー達が撮影準備をしている中、春香がステージに上がる。

しかしその時、事件が起きた。

「まずは我等が765プロの天海春香で『I Want』です！ど
うぞ！」

ブツン

「あ、あれれ！？」

「電気が！？」

「何だ！？どうした事じゃ！？」

突然全ての照明が消え、辺りは真っ暗闇に。

客はざわめき、スタッフは慌て、エリー達や六課組も混乱し始める。

だが、撮影現場を襲ったのはこれだけではなかった。

「きゃあああ!」

「春香!」

暗がりの中に響く春香の小さな悲鳴。

ふと辺りを見回すと、雲の隙間から差し込む月の光が春香のペンダントを奪おうとする一つの影とその向こうから何か杖や銃のようなものを持って迫る複数の影をうっすらと映し出す。

「スバルさん、敵です!」

「ええ〜!」

「こんな時に……」

「お客さんやTV局の人達も居るのに!」

「何だってんだよ!？」

ドゴッ!

「うぐう!」

すぐさまジャッキーは春香からその影を引き離し、腹に膝蹴りを撃ち込んで気絶させる。

「撮影の邪魔よ!」

その間にエリーはエンシェントブレイバーを起動させ、バリアジャケットも纏わずに影の集団に突っ込む。

警備にあたっていたフォワード陣や音声収録の手伝いのために近くに居たリーフとヴィヴィアンの加勢もあり、影の集団は一分と経たずに撃退された。

しかし……………

「どこかで聞き覚えのある声だと思ったけど……」

春香のペンダントを奪おうとし、ジャッキーに気絶させられた者の正体が月明かりの元に曝される。

それは、一行の中で知らない者はいない人物。

「どうして………!？」

何かが入り交じった声でエリーがその名を呼ぶ………

「どうして、なのは………!？」

—To Be Continued.

STAGE 17 Cパート（後書き）

―次回予告―

アイマス組

『次回の魔導戦記リリカルなのはAnother Worldは！』

エリー

「なぜなのはがここに居るのか、なぜこんな事になったのか、私達には分からない。だけど、迫る何かは待ってはくれない……！」

貴音

「次回、STAGE 18 『血染めのライブステージ』をお楽しみに
………」

ジャッキー

「俺のファン代表としての最後の仕事、誰にも邪魔はさせない！」

STAGE 18 血染めのライフステージ Aパート（前書き）

最近前書きの存在意義が危ぶまれている……

STAGE 18 血染めのライブステージ A パート

収録の終盤に起きた襲撃事件の翌日。

「……………」

エリー達の目の前には、その襲撃に加担していた高町なのは。一日経った今でも仲間達は混乱を隠せずにいた。

旅館の一室で目を覚ましたなのはエリーの顔を見た途端に俯いてしまっていた。

何しろ先日なのはの行動は自分の友や教え子達を裏切るものである。

やはりというべきか、なのはなりに後悔の念があるのだろう。

「……まあ、お互いに色々言いたい事はあるだろうけど、まずは気持ちの整理がついてからにしないか？」

珍しくツルギが最初に口を開く。

「そうね。今後の事は後で考えましょう。なのはもそれでいいよね？」

「で、でも……私………」

なのはがその先を言う前にエリーの腕と翼がその身体を優しく包み込む。

「大丈夫。あなたは私達の敵じゃないって信じてるから。私も、みんなも」

「……………」

「あ、でもお仕置きはするからね？ スバル、はやて、後よろしく」「ふえ！？」

「いいんですか？」

「私が許可するえ。ティアナ、男達を部屋の外へ出してくれへんか？」

「あ、はい」

「え、ちょ、ちょっと二人共！？ 何する気！？ な、なんか目が危な

いよー!? ダ、ダメ! まだ綺麗な私でいたいのに!」

そして部屋から追い出された男性陣は…………

「何する気だ!？」

「僕に聞くな」

「うむ……何というのじゃろうか？」

「…………サディズムってやつか？」

「えー!? お姫様がそんなじゃシャレに…………」

「アッ……! (なのは)

「なのはさ……ん!？」

「何が起きたんだ……」

「数分後」

「とりあえず今はこれぐらいで勘弁してあげるわ」

「うう…………私が悪いのは分かってるけど酷いよ……………」

エリーのお仕置きと称したスバルとはやてのセクハラが終わり、なのはエリー達やアイドル達と共にボロボロの心身を癒すために旅館の温泉に入っていた。

アイドル達はなのに対しては友好的であり、襲われた事など全く気にしていない様子。

亜美真美に至ってはなのはお湯をかけてからかっている。

「しかし、あんな事があったっていうのにみんな立ち直るのが早いわ……………」

「アハハッ、確かにね」

「実際は王女の戦いにみんな見とれて恐怖を忘れてただけなんだけどね。特にあずさんが。あ、ヴィヴィアン、シャンプー取ってくれる？」

律子とヴィヴィアンの間の千早は二人の胸元をチラチラと見る。それを見たはやてはすぐさま二人を引き離れた。

「隠れ巨乳二人が千早ちゃんを板挟みにしたらアカンて〜」
「……………くっ（>＜）」

そんなこんなでその夜。

旅館の外の浜辺で月を眺めている貴音を除く全員が寝静まった頃。

因みに部屋割りは765プロ、ジュピター、エリー一行の男性陣とジャッキー、女性陣となのは、六課組でそれぞれ一部屋ずつ使っている。

『……………起きていますか？』

誰もが深い眠りについた、草木も眠る丑三つ時。

普段は無口なエンシェントブレイバーが何者かに話し掛ける。

『はい。お互いのマスターはすっかりお休みになられているようですが』

相手はなのはの長年の相棒、レイジングハートだ。

JS事件後につけられた自立飛行(?)機能でなのはの横からエンシェントブレイバーへ浮かんで近づく。

因みに、エンシェントブレイバーはエリーの頭から外されて横に置

かれている。

『……………できる事ならこんな形で再会したくはありませんでした』

『それはともかく、なぜそちらの主は我々を裏切るような真似をしたのでしょうか。あのペンダントがロストログアだったとしても、他にやりようがあったでしょうに』

『……………』

『いずれにせよ、マイロードには理由を聞く必要と権利があります。すぐにとは言いませんが』

『……………いえ、あなたにだけはお伝えしておきましょう』

「なるほど、そういう事じゃったか」

トイレに行くために外に出ていたリーフ。

デバイス同士の秘密の会話は部屋へ戻ろうとしていた彼に聞こえていた。

「もしレイジングハートの話が本当なら、あやつが一枚噛んでおるかもしれぬな。あやつは目的のためには次元世界そのものを人質にする事も厭わぬ。いずれにせよ、戦いは避けられんようじゃ……………」

その翌日、春香の希望によって残りの収録も無事に終わり、そのまた翌日に一行は沖縄から765プロ事務所へと戻った。

「春香ちゃ〜ん！」

「うわっ、小鳥さん！どうしたんですか〜！？」

「どうしたもこうしたも、とにかく天海君やみんなが無事で何よりだよ」

その後一行は765プロ事務所では狭いという事で一度ジュピターと共に伊織の屋敷へと移動し、そこで今回の事件や今後について話し合う事となった。

「……………って、アンタ達も来るんかい」

「別にいいだろ。俺達も現場に居たんだしさ」

「はーいはーい、静かに」

律子によって一度落ち着いた一同。

「それじゃ、まずは事件について分かった事から。ブルース、お願い」

「調べたのはヴィヴィアンだろ……………さて、あの後事件を起こした連中の一部が逮捕されたんだが、ヴィヴィアンの調べによれば、こ

んな物を持っていたらしいんだ」

ブルースが一枚の紙を見せる。

どうやらどこかの名刺のコピーらしく、名前の部分が黒く塗り潰されている。

そしてその横にははっきりと『961プロダクション』と書かれていた。

「見ての通り、こいつは961プロの名刺だ。しかも襲ってきたのは以外の奴らが持っていたらしい」

「961プロといえば『SP』と『2』に出てくる765プロの宿敵やないか。その社長である黒井社長は高木社長が掲げる『絆』を否定し、時には卑怯な手を使ってでもトップに立とうとするアイマスの敵や」

「そこまで言うかね、八神君。確かに黒井は765プロの事が何かと気に食わないようだが、さすがに人死に出るような真似はしないだろう」

「高木社長。その事なんだが……」

ジュピターを代表して口を開く冬馬。

「東豪寺で聞いた話なんだが、最近961プロが何人もの社員を雇ったらしい。しかもそいつらはあの後一斉に姿を眩ましたみたいなの

んだ」

それを聞いた一同は少し考え込む。

そしてヴィヴィアンが何かを閃く。

「ねえ冬馬、もしかして961プロってスターラルガ派だったりする？」

「ああ、そうだが」

「やっぱりね……」

「ん？ どういうこと？」

「最近ミネルヴァとスターラルガ両方によって横行している手口よ。自分の敵となる企業や組織などに入ってそこで無差別に事件を起こす事で、そこに責任を押し付けたり株を下げたりして自分達はさっさと逃げるってワケ」

「なるほどね。私達の元へなのは差し向けてきた事や961がスターラルガ派である事を考えると、ミネルヴァや局の過激派の仕業に違いないわ……」

「しかも961プロが765プロを毛嫌いしていた事はアイドル業界に知れ渡ってたから、真っ先に961プロに疑いがかかったらしい」

「さっき961プロのホームページを見てみたんだけど、事件のせいで黒ちゃんのブログがすごい荒れてたよ」

「とにかくまた何か仕掛けてくるかもしれないし、アイドル達の安

全をどうにかしないとだ」

ジャッキーの言葉に頷く一同。

「そのためにはまたみんなの協力がいる。これの最中に襲ってくるかもしれないからな」

そう言う一枚のチラシを取り出した。

「『765プロダクションサマーライブ』。この季節の最大の仕事にして俺のファン代表プロデューサーとしての最後の仕事なんだ」

「そっか……ジャッキーさんの仕事も終わりかあ……」

「ああ。寂しくなるけどな……つか春香、やっと名前で呼んでくれたな」

「とにかく、サマーライブと聞いたら成功させない訳にはいかないわ。私達も手伝うわよ!」

その一週間後。

「安いよ安いよ！」

「今話題の765グッズ、買って損はないぞ！」

「一家に一枚夏限定765プロゴルデンコレクション、今なら半額で！す！って何でアンタ達まで……」

「いや……ブルースのおっさんに無理矢理……」

「はーい、高槻やいちゃんでお馴染みケロケロポシェットにシャルル・ドテナルロ18世（伊織のぬいぐるみ）のキーホルダーもあるよ！」

「いまこの二点をお買い上げの方には、この『菊地レーシングフラッグ』をおまけしますよ！」

ブルース、リーフ、律子、そしてなぜかブルースに付き合わされているジュピターはグッズの叩き売りをしている。

翔太と北斗は特にノリノリのようだ。

「似合ってますか？」

「最高だぜ！ ツルギには感謝しないとな」

「その前にちよっと休ませてくれ。なんせ四日徹夜で13人分作ってたんだから」

アイドル達はツルギが作った衣装の試着をしていた。

それは赤……というよりはエリーの紅を基調としたもので、背中には紅い羽根の飾りがあり、頭には待機状態のエンシェントブレイバーに似た髪飾りが付いている。

「この衣装に名前をつけるとしたら、さしずめ『セイクリッドスカ
ーレット』ってとこだな」

その間に女性陣の手伝いによってステージの整備が終わり、いよいよライブが始まる夜を迎える……

ステージ裏ではアイドル達がライブの始まりを今か今かと待ち続けている。

「みんな、最高のステージにしような！」

「私も一人の女として、応援させてもらおうわ！」

『はいっ！』

エリーとジャッキーに励まされ、気合十分のアイドル達。

「始まるまであと30分か……」

そんな中、春香だけは心なしか寂しげである。

「……………なに、また遊びに来るからさ。しよぼくてんなよ！」
「そ、そんな訳じゃ……………」

そこに居たのは……

「あーら、こんな連中に高町なのは丸め込まれちゃったのかしら？」

「バカ言え。高町なのは元からお姫様の味方なんだよ」

「まあどっちにしろ、ここでお前もろとも消え去ってもらうけどね」

管理局員らしき黒いバリアジャケットの女。

そしてそれと対峙する謎の二人組。

―ステージを染めるは、血か、悪夢か……

―Bパートへ続く

STAGE 18 血染めのライブステージ Aパート（後書き）

春香

「強敵登場!？」

エリー

「次回もお楽しみに！」

STAGE 18 Bパート（前書き）

前回までのほのぼのムードから一転、久々のバトルです。

エリー一行はきらめく舞台を守り抜く事ができるのか!？

STAGE 18 Bパート

本来なら楽しい思い出になる筈だった場所。

765プロサマーマーライブが開かれる会場は一つの襲撃によって騒然とする。

記者や撮影スタッフは慌てふためき、客の集まるスペースは悲鳴と恐怖で満たされる。

その中心に居るのは、謎の三人の人物。その内一人が他の二人と対立している様子である。

一人は見た目からしてほぼ間違いなく管理局員。その手に双剣型のデバイスを持ち、美しい黒の長髪とバリアジャケットの女性だ。

そして彼女と対峙しているのは長身の男とエリオと同じくらいに見える少年。

長身の男は黄緑色の髪に青い三本の線が入った白い紳士服を纏い、右手には血のように赤く鋭い爪を持つ五本指の籠手をはめている。

少年の方はかなり濃いピンク色の髪に探偵のような茶色の服と帽子を身につけ、腰にはタロットカードらしきものがしまわれたケース

があった。

三人が一体何者なのか、ステージに出たエリーとジャッキー、アイドル達はすぐには分からなかった。

一つだけはっきりしているのは、三人はライブを見るためにここに居る訳ではないという事だ。

「主役も来たし、そろそろ私の見せ場かしら」

「生憎テメエの一人芝居を期待する奴はいないぜ？」

「そうそう。招かれざる客という事だ」

「情況はよく分からないけど、穏やかではなさそうね……………」

「なんかやばそうな奴らが来やがったな……………！」

三人に視線を向けるエリーとジャッキー。

「あ…………ああああの…………どちら様ですか……………？」

「もの凄く顔が歪んでるの」

後ろに居るアイドル達が驚いている中、春香が震える声で恐る恐る聞く。

その横では美希が涼しい顔をしている。

「答えてあげましょう。私は対アナザー・アース魔導師部隊『アヴェンジャー』の『ドリス・エンテリア』」

「俺は泣く子も黙るスターラルガ・ファイブナイツが一人。人呼んで『電光のエスクダル』！」

「同じく、コードネーム『彗星のドグマ』。少なくとも僕達スターラルガは765プロの敵ではない」

名乗りを上げる三人。

因みに、長身の男がエスクダルで、少年がドグマである。

「俺らはある目的のためにこの765プロサマーライブへとやって来た。本来ならライブが無事に終わってから実行する筈だったんだが……………」

「いきなりこの局風員情が一人で突っ込んできたから迎え撃つていた所さ」

「せっかく魔導師の資質がある者を多く抱えるアイドル業界への見せしめにしようと思ったのに、邪魔するんですもの」

そこまで言うと三人はお互いを睨みつける。

「……一応聞くけど、目的は何かしら？」

「目的？そりゃロストログアの疑いがある天海春香のペンダントを回収させてもらう事に決まっているでしょう？」

エリーの問いに不敵な笑みを崩さず答えるドリス。

「テメーらの方は？」

「僕達の目的は三つ。一つはこのライブ会場に紛れ込んでいる全ての管理局員の殲滅。一つは765プロをスターラルガに引き込む事。そして……」

ジャッキーに対してドグマがそこまで答えると、エスクダルが何かを取り出して言った。

「今回のライブ限定の品、765プロオールスターズTシャツ2625円（税込）を頂く事だ！」

どんがらがっしょん！

その瞬間、会場に居たエスクダルとドグマ以外の全員がずっこけた。

「そんな事のために会場占拠してんじゃねーよ！つーか765プログッズ欲しかったんなら朝のうちに並んで買えば良かっただろ！」
「並んだよ！そして一時間待ったよ！でも俺の目の前で売り切れになっちまったんだよおおおおお！！！！（滝のような涙）」

「おーい、その人ー！」

その直後、撮影の手伝いや警備にあたっていたブルース達、フォワード陣とはやて、ついでに手伝わされていたなのはがずっこけた観客を蹴散らしながらステージへ向かい、上に上がった。

「エリー王女の愉快的仲間達全員集合や！」

「客をぶっ飛ばしちゃダメでしょー！」

「それより、確か俺グッズ売ってた時にこいつ見たぜ。Tシャツが売り切れですっごいガツクリしてたから覚えてる」

「そうなんだよ。ファイブナイツ全員分買おうと思ってたのに」

「あ、ちょっと待っててねー」

その話を聞いていた美希はすぐにステージの裏へ。

そして数分後。

「はい、どうぞなの！」

「こ、これはまさか!？」

エスクダルとドグマに美希が渡したのは二人が欲した765プロTシャツ五人分。

しかも全て美希の直筆サイン入りで、一枚はドグマに合わせたSサイズだった。

「うおおおおおしゃあああああああああ！」

「喜んでもらえて良かったの！」

その刹那、会場に居る多数の客達が自分の服やグッズにサインを求めてステージに詰め掛ける。

「エスクダルさんのおかげでイメージアップになりそうです」

「あ、どうも」

そしてエスクダルに礼をする律子。

今回は彼女もステージに上がっていた。

「……………手は出さないでよくよ。今はね」

アイドル達が客達にサインをしているのをドグマが静観している中、リーフは一步前に出てドリスと向かい合う。

「目的のためなら手段は選ばず、邪魔物は徹底的に排除するその姿勢。上司であったゼスト・グランガイツが姿を消してから、お主は本当に変わってしまった」

「常に真つ当なやり方では必ず何かを救えない瞬間が来る。ゲンヤさんと関わっているあなたなら戦いの中で分かっている筈でしょう？」

張り詰めた空気の中、リーフはフォルトレイヤーを構える。

「今の私が救えぬものは……己の命のみ！」

「……………なら、もう言葉はいらない！」

ガキーーーーン！

その瞬間、全ての者が振り向いた。

「さてと、僕らもお喋りは終わりにしようか！」

ドグマは紅、蒼、黄色、緑、白の五組のタロットカードの束を腰のホルダーから取り出し、空中へ放り投げる。

するとカードは一瞬バラバラに分かれた後、ドグマによって意思を持つかのように宙を舞い、やがて竜巻のようになる。

「死にたくなければそこから離れる事だ」

ドグマがそう言うと言計115枚のカードから成る竜巻は客が居る地面に突き刺さる。

ライブ会場は屋外であるために客はなんとか竜巻から逃げるが、何人かが逃げ遅れて軽傷を負った様子。

カードの竜巻は地面に巨大な円を刻んだ後、ドグマの手元へ色別に分かれて戻る。

そして一枚のカードがめくられた。

「引いたカードは『節制』。その逆位置の意味の一つは『浪費』。これは無駄に時間のかかる戦いになりそうだ」

地面にできた円へと移動するエスクダルとドグマ。

エリーはアイドル達を仲間達に任せ、ジャッキー、ヴィヴィアン、はやてと四人で二人を追うように円に入る。

そしてエリーとはやてはエスクダルと、ジャッキーとヴィヴィアンはドグマと向かい合う。

「しばらく見ないと思ったらスターラルガに居たのね………」

「知り合いかいな？」

「数年前からしょっちゅう一対一の決闘を申し込んでくるライバルみたいな奴よ」

「つまり俺とこのお姫様は天海春香と天ヶ瀬冬馬みたいなものさ」

「そんないいもんじゃないけどね！」

「765プロの敵じゃないと言っているようだが、ライブの邪魔に変わりはねえ。力づくで邪魔をするようならこちらも力づくでいかせてもらうぜ！」

「アッハハハハ、私も今日は張り切っちゃおうよ」

「ならばさっさと始めようか。占いの通り、僕らはこんなお喋りで時間を無駄にしている」

一方、ステージでは。

「ドリスはこの私に任せてもらいたい。かつてはそれぞれの正義を貫いていた者同士、刃で語るしかあるまい」

「うふふ………分かっていないじゃない？」

ステージの上や周りには、アイドル達を照らすスポットライトが設置されている。

しかし、今はそれぞれの戦いを始めようとする者達を照らしていた。

— T o B e C o n t i n u e d .

STAGE 18 Bパート（後書き）

―次回予告―

アイマス組

『今回の魔導戦記リリカルなのはAnother worldは！』

響

「次回はいいよ勇者カイトと魔王の宿命の対決だ！果たしてこの国の運命は……って、んぎゃあああああ！これは自分が読んでたラノベだー！」

律子

「何アニメと同じ事してんだか………」

伊織

「STAGE 19『Battle stage for you!』
ぜったい読んでね、にひひっ♪」

響

「もう一回やり直させて………」

STAGE 19 Battlestage for you! パート(前)

エリー

「しっかり読まねーとぶっ潰すぞ! (TOXのアグリアのコスプレ)

」

春香

「真綾さん凄い………」

真

「鈴村さんもこんな感じで尻に敷かれてたりして………」

伊織

「無いよ」

STAGE 19 Battle stage for you! Aパート

765プロラマーライブの会場で始まった乱入者との戦い。

会場の中央では会場内の局員の殲滅を謀るスターラルガ・ファイブ
ナイツの一員、電光のエスクダルと彗星のドグマの二人とライブを
守るエリー、はやて、ジャッキー、ヴィヴィアンの四人が激突。

また、ステージの上ではアイドル達とそれを守る仲間達が春香のペ
ンダントを奪おうとする管理局員のドリスとリーフの戦いを見守っ
ている。

ドグマが作り出した円の中での戦いは熾烈を極める。

「はあああああっ！」

「そらよっと！」

紅い雷を宿すエンシェントブレイバーと紫電に包まれたエスクダルの
爪が何度もぶつかり合い、バチバチという音が鳴り響く。
はやてもブラッディダガーで援護するが、あまりの激しさに一瞬怯
む。

「オラ、ビビってたらやっちゃまうぜ！」

エリーを弾き飛ばしたエスクダルの雷の槍がはやてを襲うが、辛くも避ける。

しかし、その間にエスクダルは距離を詰める。

「だあっ！」

「ぐっ………！」

爪で横に薙ぎ払うと見せ掛けての左足のハイキックではやてを地面に倒し爪を喉元に振り下ろすが、シュベルトクロイツに防がれ、横からのエリーの体当たりでエリーもろとも地面に転がった。

「はやて、大丈夫？」

「これくらいどうって事あらへんわ！」

「フン。いくらあのジェイル・スカリエッティを逮捕したといっても、所詮は本物の決闘というやつを知らないただの女。おかげでお姫様の足手まといじゃねえか」

「………あながち間違いじゃないかもしれへんわ。ウチはこの旅の中じゃ身を守るのが精一杯で、ちつとも前に出れへん」

「ほう、さすがは部隊長。自らの弱さを認める度量だけはあるようだな」

「……………ただどな、いくら自分が弱くても、足手まといになっても、何もしない訳にはいかへんのや!」

その時、はやての表情と瞳の奥には強さがあり、例え力はなくとも心の強さは誰にも負けないという自信があった。

「そいやっ!」

「ふっ!」

一方、ステージではリーフとドリスがフォルトレイヤーと双剣型のデバイス『シュタインハーゲル』で火花を散らしていた。

「相変わらず頭の固い人……………」

ドリスが距離を離し、魔力弾を撃ち始める。

「やれやれ……………ステイレット!」

リーフは素早い突きから鋭い針のような衝撃波を放ちつつ応戦する。弾の数と連射力はドリスが、一発の威力や速度、狙いの正確さはリ

ーフの方が上だ。

「こうして刃を交えてみると昔を思い出すわい。何がどうなればここまで堕ちるのやら」

「私はただ上から与えられた任務を遂行しているだけ。あなたと本気でやりあうのはその障害を排除するためでしかないわ」

「ああそうかい。つまりお主はだだの局の人形に成り下がったという事か」

ビュッ！

「……………！」

「……………志なき者が、私に勝てるものか！」

素早い動きでドリスの横に回り、フォルトレイヤーを連続して振るう。

正確な剣技の前にドリスの守りは簡単に崩れ、ガラ空きの胸元に向かって切っ先が向けられた。

「アールシェピース！」

「がっ……………！」

そのまま放たれるは目にも止まらぬ速さの一突き。

刃に込められた気合によってドリスの身体は切っ先が触れる前に吹き飛び、ステージのスクリーンに叩きつけられた。

「任務という名の略奪にかまけて腕が落ちたか。話にならぬわ」

速い決着に拍子抜けな様子のリーフ。

彼の視線の先では、ジャッキーがヴィヴィアンの援護を受けながら素手でドグマと激しい殴り合いを繰り返していた。

「へへっ……………お前、強いな！」

「それはどうも……………とうっ！」

こちらの戦いは拮抗していた。

ドグマは魔力を込めた拳や蹴りを絶え間なく繰り返し、タロットカードでの切り付けを織り交ぜつつ攻撃する。

ジャッキーも背中の中程の頑丈な竜の翼でドグマの攻撃を防ぎながらパンチやキックで対抗する。

速さのあるドグマに比べてこちらは一撃の威力を重視した力強い動きをしていた。

この時、援護射撃のタイミングを見計らっているヴィヴィアンはある事が気になっていた。

「光を操る超能力『サイコ・ライト』……あいつがああFBIの指折りの捜査官『サーシャ・ラストイー』の息子ってのは本当のようね」

ジャッキーの手には白い光が宿り、その力を高めていた。

それを見たヴィヴィアンは彼が何者かを理解した上でその強さが本物だと確信する。

「（後衛を先に潰すか……）バッドショット！」

ドグマは一度ジャッキーと距離を取り、カードの束の一つをヴィヴィアンに向かって投げる。カードは途中で散弾のように散らばり、ヴィヴィアンは避け切れず右腕を少し切られた。

「お次は……ラック・ブラッド！」

カードを手元に戻すと、今度は全てのカードが連なって飛び、まるで生き物のように二人を襲う。

辛うじて避けた二人が居た場所は地面が大きくえぐられていた。

「あつぶね、ともに喰らったら終わりっぽいな、これ………」
「ったく、なんて嫌らしい攻撃なのよ！」

体勢を立て直そうとする二人を見ながらドグマは余裕の表情で二枚のカードをめくった。

「『星』の正位置と『審判』の正位置か。ならばここで終わりにするか！」

刹那、カードの束が再び竜巻へと変化し、二人に迫る。

「うおおおおお！？」
「ジャッキー……あうっ！？」

その竜巻はジャッキーを巻き込み、横に避けたヴィヴィアンも一瞬にして背後に回ったドグマの蹴りによって竜巻の中に放り込まれた。カードは二人の全身を切り刻みながら舞い上がり、やがてその一枚一枚が空に瞬く星のような光に包まれる。

やがて、竜巻が消える。

「これが命運の尽きる瞬間だ。フォーチュン・エンド！」

そしてカードは流星へと姿を変え、二人へと降り注いだ。

「さて、俺も必殺技いっちゃいますか！」

エスクダルの爪にこれまでよりも激しい雷が光り、そこから引っ掻き傷のような形に形成された電撃が連続して飛ぶ。

エリーはそれをエンシェントブレイバーでなんとか捌いていくが……

「もらったぜ」

「……………!!」

電撃を17発程放った直後、エリーの目の前にエスクダルが一気に迫る。

「スパークマダー！」

「うぐっ…………あああああああっ！」

エリーの髪よりも紅い鮮血が舞った。

露出した左肩から胸元にかけて大きな五本の傷を残す一撃の前にその場に倒れ込むエリーを見てエスクダルはやての方向に向いた。

「ようし、そろそろ決めるか！」

「ならば…………ウチと一発勝負や！」

覚悟を決めた表情でシュベルクロイツを構えるはやて。
それに応えるようにエスクダルも爪に雷を纏わせる。

エリーは助太刀に入ろうとするが先程の攻撃で左腕が動かず、痛みで立ち上がる事もままならない。

「………………！」

はやては意を決して走り出し、エスクダルは先程の『スパークマードー』なる技を繰り出す体勢を取りつつ突っ込む。

スポットライトの光の中で、決着をつけるために二つの影がぶつかり合う……………

ドッ！

「ぐほおっ!？」

……………ぶつかり合う前にシュベルトクロイツがエスクダルの腹を捉えた。

いや、エスクダルが自分から突っ込んできたといった方がいいだろう。

エスクダルの武器が爪が取り付けられた籠手であるのに対し、はやてのシュベルトクロイツは長い杖。当然だがこちらの方が長い。

さらにはやてはシュベルトクロイツの端ギリギリを掴み、手をいっぱいに伸ばして突き出したのだ。

その結果、リーチの短いエスクダルの爪が届く前にその身体は勢い

余ってシュベルトクロイツの先の部分に突っ込んでいってしまったのである。

力の弱いはやてだったが、エスクダルの突進の勢いを利用し見事彼との一発勝負を制したのだった。

シュベルトクロイツの先端の飾り（？）が腹に食い込んだエスクダルは少しよろめいた後、目を回して大地に倒れ伏した。

「勝ってしもた……………」

「勝ったみたいね……………」

この決着にはエリーもはやて本人も啞然とするのだった。

「エスクダルがやられるとはね……………」

「よそ見していいのかしら？」

バシッ！

「……………！？」

それを見ていたドグマの手にヴィヴィアンの銃撃が当たり、カードの束の一つが弾き飛ばされる。

「スキありだぜ！」

「何っ……ぐっ！（あれを喰らって立ち上がるのか……）」

さらにジャッキーが傷だらけのまま体勢の崩れたドグマに向かい、凄まじい勢いで拳を炸裂させる。

「俺達みんなで必死こいて準備して、たくさんのファンが楽しみにしていた今日のライブ……」

やがて拳の勢いはさらに激しさを増す。

「ファン代表とはいえ、プロデューサーである俺の目の前でそれを堂々と邪魔して……」

連続打の後に右手を腰溜めに構え……

「タダじゃ済むと………思ってたじゃねーぞコラアアアアアアア

「！」

ドガーーーーーッ！

「ぐあああああ！」

そしてこの戦いを終わらせ、今度こそライブの始まりを見届けるため、そのまま一気に振り上げた。

まばゆい光を宿したアッパーはまさに会心の一撃。

当たった瞬間に光が弾け、ドグマの身体は空中へ舞い上がった後に飛び散ったカードと共に落下した。

「……………終わったか」

「とりあえずは大団円だね、アハッ♪」

辺りを見回すと、エスクダルを倒したエリー組とドリスを退けたリフの姿が見え、一安心。

「……………まさかここまでとはね。僕の負けだ」

「何だ、まだ元気じゃん。せっかく美希に765プロTシャツもらったんだし、今日の所はケンカはやめてあいつらのライブを見たらどうよ？」

「さっきまで本気で殴り合ってた相手をライブに誘うなんて、君はおかしな奴だ………いてて………」

地面を這いずりながら散らばったカードを拾い集めるドグマ。

「ん？」

だがその時、一枚のカードが目止まる。

「『運命の輪』の逆位置………その意味の一つは………」

「きゃあああああ！」

ドグマがその意味を言おうとした時、春香の悲鳴が響く。

見るとアイドル達が局員らしき集団に囲まれ、それを守っていた他の仲間達とフォワード陣がバインドでステージの柱や地面に張り付けられていた。

「お邪魔虫を片付けてくれてありがとう♪」

その横ではリーフに倒された筈のドリスが邪悪な笑みを浮かべていた。

「『運命の輪』の逆位置には『突然のアクシデント』という意味がある。この先どうなるかは僕の占いでも分かりそうにないな………」

— Bパートへ続く

STAGE 19 Battlestage for you! Aパート（後

次回、いよいよアイドルマスター コラボ編最終章！

きらめく舞台の運命は！？

STAGE 19B 舞台（ステージ）の運命を賭けた戦い（前書き）

アイドルマスター コラボ編、完結！

STAGE 19B 舞台（ステージ）の運命を賭けた戦い

ステージでの乱入者との戦いは誰も予想しなかった方向へ動き始めた。

リーフとドリスの一对一の戦いはリーフの圧勝に見えたが、それはドリスの策略だった。

ドリスはリーフが少し目を離れた隙に会場に紛れ込んでいた管理局員を集めてアイドル達を囲み、それを守る仲間達を拘束し、ファイブナイツとエリー達がお互いを潰し合うのを待っていた。

結果、今戦えるのはリーフ一人。しかも状況は圧倒的にリーフにとって不利であった。

「小賢しい真似をしておってからに………！」

「油断したあなたが悪いのよ？」

リーフは周りの客の方を見るが、その三、四割が局員で、しかも全員デバイスを構えて臨戦体勢である。

中にはアイドル達に声を掛ける本物のファンに暴行を加える者もいた。

「さて、そろそろアレを渡してもらおうかしら」
「……………!!」

ドリスの視線が自分のペンダントに向いているのに気づき、春香はビクッと震える。

「助けを求めても無駄よ。あなたを守ってたみんなはもう動けない。Tシャツを欲しがってた二人はお姫様とケンカしてあそこのびてる。あのおじさん一人だけでは何もできはしないわ」

周りを見ると、アイドル達を囲む局員はいつでも攻撃を加えられる体勢。

対して、自分達はただの人間。

この絶望的な状況の中、遂に春香はドリスに向かってゆっくりと歩き始めた。

「春香ちゃん……………!!」
「渡しちゃダメなの!!」

あずさと美希が止めようとするが、恐怖に身を震わせる春香のは耳には入っていない。

そして春香の目の前ではドリスが怪しく手招きをする。

「さあおいで……………それを渡してくれれば他のみんなに手出しは…
……」

「木星キーク！」

バキッ！

「ぐはあ！？」

「いいキックだ」

「冬馬君カッコイイ〜！」

春香を助けたのは意外な人物。

ライブ中でありながらブルースにグズの叩き売りに付き合わされ、
その後もステージに居た冬馬が春香の後方から豪快なドロップキック
繰り出し、ドリスをステージの床に倒す。

ステージの下では北斗と翔太、一部の女性客が冬馬に拍手を送っていた。

「冬馬君……………！」

「それはあいつがお前のために残した大切なものなんだろう？それをこんな奴らに奪われそうになってんのを黙って見てられる訳ねえだろ！」

冬馬の乱入に一同が驚いた時だった。

「でやああああ！」

突然真が動き出し、得意の空手で周りの局員を薙ぎ倒し、その間にアイドル達は一斉に散らばる。

「春香のこれは命に換えても守ってみせるわ！」

さらに律子が春香の手からペンダントをひったくり、襲ってくる局員達の追撃をかわしつつ逃げる。

「構わん！ペンダントを確保しろ！」

「…………っ！美希、パス！」

ドリスの号令によって局員の攻撃が激しくなる中、律子はペンダントを美希に投げる。

ペンダントを受け取った美希は律子と同じように局員達の攻撃をかわす。

「千早さん、パスなの！」

「え！？私！？」

今度は千早がペンダントを受け取り、必死に局員達の魔の手をかわす。

「千早さーん！こっちですー！」

やよいの声を聞き、千早はそちらへペンダントを投げる。

しかし、ペンダントを受け取ったやよいにも局員は容赦なく襲い掛かる。

「やよいちゃん、パスパス！」

次にペンダントを受け取ったのは翔太。

そのまま局員の攻撃をかわし、見事なバック宙を見せながらペンダントを別の方向へ投げる。

「次は俺か……………」

地面に落ちたペンダントを拾い、北斗は冷静に攻撃を避け続ける。

「真ちゃん、パス！」

北斗からペンダントを投げ渡された真は局員を蹴散らしながら周りをうかがい、近くに局員が少ない仲間を探す。

「響〜！」

「任せろ〜！」

次にペンダントを渡されたのはハム蔵を頭に乘せた響。

「いけーっ！ハム蔵ー！」

ハム蔵にペンダントをくわえさせ、地面に放つ。

ハムスターとは思えない知能を持つハム蔵は局員達の手足をすり抜け、あずさの元へ。

「あら、ハム蔵ちゃん」

ハム蔵からペンダントを受け取ったあずさに局員達が襲い掛かる。

その時……………

ボゴォッ！

「!？」

突然地面から細い手が突き出し、驚く局員達。

しかし、あずさは驚く様子もなくその手にペンダントを握らせる。

手はペンダントを持ったまま地面に引っ込み……………

ボゴォッ！

「ぷはぁ……………」

少し離れた地面からスコップを持った雪歩が飛び出した。

「亜美ちゃん！」

「オッケー、ってにゃあああああああ！」

雪歩は亜美にペンダントを投げ渡すが、局員達は分かっていたかのように亜美に近づき、一斉に飛び掛かる。

ところが………

「真美でした↓☆」

いつの間にか真美と入れ替わっており、本物の亜美は一目散に逃げ、伊織にペンダントを渡していた。

「いおりくん、後よろ↓」

「ええいつ、こうなったらヤケクソよろ！」

局員達が迫る中、伊織はスポットライトで自分を照らすようにアピールしながら衣装の小袖で立派なおでこを磨き始める。

「地獄の伊織ちゃんフラーーーーーッシュ！」

ピッカーーーーーー！

「うにゃ↓！いおりんまぶしー！」

「私のおでこ強っ！」

スポットライトがおでこに反射した光が亜美もろとも局員達の目を眩ます。

その間にペンダントは伊織から貴音の元へ。

「はあっ！」

ドーーーーー！

さらに貴音は腕の一振りで周りの局員達をいとも簡単に吹き飛ばす。

「お返しします」

「え……………ていうか貴音さん強い……………」

そしてペンダントが春香の元に返された時……………

「いい加減お仕事させてくれないかしら？」

「……………！」

近くに居たドリスがシュタインハーゲルを春香と貴音に振り下ろそうとする。

ガキン！

「ぬ！？」

「ふう…………間に合ったみたい」

ドリスの腕を桜色の鎖が捕らえ、一人の女性が舞い降りる。

「あ！旅館ではやてさんにいじめられてた人！」

「なのはだよー！た・か・ま・ち・な・の・は！」

そう、一度は春香を襲った高町なのはであった。

「くっ…………局を裏切るのかしら？」

「裏切るも何も、元から私はエリーの味方だから！」

そのままレイジングハートに桜色の光を集め、ドリスに向ける。

「これで許してくれるかは分からないけど一度裏切ったからには、けじめをつける！」

そして光が限界まで溜まる……………

「ストライク・スターズ！」

放たれた桜色の奔流の前に、腕を縛られたドリスは何もできずに吹き飛ばされていった。

「……………」

吹き飛ばされた先に砂煙が舞う。

警戒するなのはとリーフだが、煙が晴れた時には既にドリスの姿はなかった。

「転移魔法で逃げよったか……いずれにしろ、これで本当に決着じゃ」

リーフの後ろでは仲間達が自力でバインドから脱出しており、指揮を失った局員達は転移魔法で退却していった。

「さてお嬢さん、歌う元気はあるかの？」

「え……あ、はい！ステージはめっちゃになっちゃったけど、私達は歌えます！ね、冬馬君？」

「え？俺らも？」

「何にせよ、これでやっとライブが始められるな！律子、司会頼むぜ！」

「了解しました、ファン代表プロデューサー殿！それでは皆様、長らくお待たせしました。765プロサマーライブ、始まりま〜す！」

こうして、無事にライブは始まった。

エリー達はジャッキーと共に裏方に回り、ただひたすら歌い踊るアイドル達を見守っていた。

突然エリーが乱入して春香とデュエットを始めたり、リーフのエレキギター演奏にのせてジュピターが歌い始めたりと、盛大な盛り上がりであった。

「ヒヤッハー！いいぞー！」
「やれやれ」

エスクダルとドグマもすっかりファンに紛れて楽しんでいる様子。
大はしやぎのエスクダルをよそにドグマは一枚のカードをめくった。

「『死』の逆位置。『挫折からの立ち直り』という意味は彼女達に
ピッタリだな。さて、帰るよ」

「えー！？まだ物足りないぜー………」

二人は人知れずライブ会場から姿を消した。

……………

そして、別れの日。

ジャッキーがエリー達の旅に同行する事となり、一行はアイドル達
に見送られていた。

「ジュピターの連中はどこいったんだ？」

「『涙の別れにライバルの立ち会いは不要』っていつて帰ってったわ。それじゃなのは、国を頼むわ。フェイト達によろしくね」

「うん！」

「しかしなのはさんが裏切った理由は分からずじまいか……あのドリスって人から聞き出しとけばよかったかな？」

なのははフォルティス・レインに戻る事になり、改めてエリーとの信頼を確認した。

「今日でジャッキー君ともお別れか。寂しくなるね」

「もし旅の途中でそっちのプロデューサーに会うような事があれば、みんな元気でやってるって伝えとくぜ、高木社長！」

「必ず戻ってきて下さいね！みんなとの約束です！」

春香と高木社長に激励されるジャッキー。

「それじゃ、最後にみんなでご挨拶………」

『ありがとうございました！』

「ああ！また会おうぜ！」

その後、一行は飛行機に乗り込み意気揚々と次なる旅路を歩むのであった。

「行っちゃったね、律子さん……………」

「ええ……………」

「やっぱりジャッキー兄ちゃんがいないとちょっと寂しいな……………あずさお姉ちゃんも……………あれ！？」

残ったアイドル達の中で、あずさだけが忽然と姿を消していた。

「……………嫌な予感しかない……………」

顔が青ざめている律子の目は一行を乗せた飛行機を見ていた。

.....

―飛行機内―

飛行機の中でゆったりする一行。

「春香ちゃん達、寂しくて泣いてへんやろな？」

「大丈夫。私が見た限りでは765プロのみんなは強さがある。私達のように戦う力がある事だけが強さじゃないって事はみんなよく知ってる筈よ」

「はい。エリー様のお言葉なら信じられます！」

「うふふ……キララちゃんは本当にエリーちゃん一筋なのね」

「!？」

どこかで聞いたような優しい声に固まる一同。

恐る恐るジャッキーが声のした方向を向くと……

「また会っちゃったわね、ジャッキー君♪」

「あれれ――――――！！？」

――とあるテレビ局の屋上――

「日本は楽しめたかい？」

「ああ！ねんがんの765プロTシャツもゲットしたしな！しかも星井美希のサイン入り！」

「ころしてうばい妥妥た訳じゃないよ？」

「よく五人分手に入ったな……………」

「大切にするわ」

「……………悪くありませんわね」

スターラルガ・ファイブナイツ五人全員と白い少年がそこに居た。因みにファイブナイツは例のTシャツを着用。

「例の件だが、765の奴らが大活躍な上にお姫様が力を使わなかったからデータ取れなかった」

「一度や二度のミスでキーキー言うほど僕は小さくはない。ところで、報告によれば一行の次の目的地は……………」

「確か、管理局とミネルヴァの施設があったような。それもなかなか規模が大きな……………」

そう言いつつドグマはカードを一枚めくる。

そのカードは『魔術師』の逆位置だった。

「なるほど、お姫様達にとって厳しい戦いが待ち構えているという事か。ドグマの占いはよく当たるからね……」

— To Be Continued —

STAGE19B 舞台（ステージ）の運命を賭けた戦い（後書き）

―次回予告―

世界を知るための次なる旅を始めようと張り切るエリー一行。
しかし、同時に新たな敵が姿を現す。

戦いの中、遂にエリーが……………

―次回、STAGE20『囚われのツバサ』―

新オリキャラ&登場兵器紹介（前書き）

本編の前に新キャラと登場兵器の設定です。

新オリキャラ&登場兵器紹介

ジャツキー・ラストイード

CV..森田成一

種族..人間とカンヘル竜のハーフ

年齢..19歳

血液型..B型

身長..171センチ

体重..63キロ

ランク..陸戦B+ 空戦B+

身体的特長..金髪、緑眼、背中の竜の翼

武装..特になし

エリー一行が日本で出会った半人半竜の青年。

エリーと同じく世界を見て回るために数ヶ月前から実家を離れて一

人旅をしており、その途中で高木社長に会い、期間限定のファン代表プロデューサーとして765プロで働いていた。働くといってもアルバイトのようなものであるが。

ツルギは彼の古い友人であり、離れた場所からたまに遊びに来ては一緒に買い物やトレーニングをしていた。

普段は所謂『チャラ男』のような印象を感じさせ、自由気ままに生きてるように見えるが、責任感は強い。

戦闘時は光を操る『サイコ・ライト』なる能力と対術が武器とする。因みに『サイコ・ライト』は希少技能などではなく、一種の超能力である。

ヴィヴィアンによれば彼の母は人間である『サーシャ・ラスティード』という名のFBI捜査官であるとの事だが、詳細は不明。

電光のエスクダル

CV..山寺宏一

種族..人間

年齢…26歳

血液型…O型

身長…184センチ

体重…74キロ

魔力光…薄い紫

ランク…陸戦A+

身体的特長…黄緑の長髪

武装…赤い籠手（後述）

スターラルガ・ファイブナイツの特攻隊長。

エリーと同じく雷の魔術が得意で、数年前からエリーとしょっちゅう一対一の戦いを申し込んでいる良きライバル。

本人いわく『天海春香と天ヶ瀬冬馬のような関係』。

力こそエリーに及ばないが、そこは戦術や技でカバーしており、総合的な実力はかなり高い。

また、右手にはめている赤い籠手は五本指の先が鋭い爪になっており、強力な武器となる。

実は星井美希のファン。

彗星のドグマ

CV..高山みなみ

種族..人間

年齢..14歳

血液型..A型

身長..148センチ

体重..37キロ

ランク..陸戦A-

魔力光..白

身体的特長..濃いピンク色の髪（ピンクグレイプフルーツぐらいの濃さ）

武装..タロットカード5組

スターラルガ・ファイブナイツの作戦参謀担当にしてプライベートルドでの暴走抑止要員。

性格は基本的に淡泊で冷静沈着。

滅多な事では感情を高ぶらせたりしないポーカーフェイス。

例の事件が起きる前はスターラルガ穏便派の両親の元で普通に暮らしていたが、事件の数ヶ月後、ミネルヴァの過激派のテロによって両親と死別。

その後はジョシユアに拾われ、のちに僅か11歳にしてファイブナイツの地位を得る程の実力をつけた。

常に持ち歩いている5色のタロットカードは投げ付いたり生き物のように操ったりと、非常に強力な武器となる。敵の返り血で汚れても明日にはなぜか綺麗になっている。

見た目だけでなく実際に探偵業をしており、下っ端の浮気調査から殺人事件の捜査まで何でもこなす。

また、彼のタロット占いはよく当たるらしい。

実は秋月律子のファンで、エリー達が旅立った後にこっそり本人からサイン入り手帳をもらった。

ドリス・エンテリア

CV…椎名へきる

種族…人間

年齢…不明

血液型…A型

身長…172センチ

体重…67キロ

ランク…不明

魔力光…青紫

身体的特長…黒の長髪

武装…ミッドチルダ式アームドデバイス『シュタインハーゲル』

時空管理局・対アナザー・アース魔導師部隊『アヴェンジャー』に所属する魔導師。

戦場では与えられた任務を忠実にこなす事を第一に考えている。そのため、任務のためなら手段は選ばず、周りへの被害などは彼女の眼中に無い。

『アヴェンジャー』は元々アナザー・アース出身の次元犯罪者を取り締まるだけの部隊だったのだが、例の事件以降にスターラルガ派の反発が強まったために、やがて部隊の9割の者がアナザー・アースの魔導師そのものに敵意を向けるようになった。

ドリス自身はかつてゼスト・グランガイツの部下として本当に心から正義のために戦っていたが、彼が姿を消してから今の性格が形成された。

―登場兵器―

シュタインハーゲル

使用者…ドリス・エンテリア

型式…ミッドチルダ式

管制人格…無し

待機状態…不明

ドリスが使う双剣型デバイス。

その切れ味はフォルトレイヤーにも引けを取らない。

ドリスがアヴェンジャーに入隊してからは多くのアナザー・アースの魔導師を葬ってきた。

ツルギの忍者道具

忍者が使う多数の道具。

戦闘用や移動・逃走用など、種類は様々。

実際に作中でツルギが使用したのはS T A G E 19終了時点では手裏剣、棒手裏剣（ラクウェルに影縫いを仕掛けた時に使った針）、大筒の三つ。

大筒は『忍者のバズーカ砲』とツルギが言うだけあって破壊力はそれなりにある。

エスクダルの簞手

エスクダル愛用の血のように真っ赤な五本指の簞手。

指先が鋭い爪になっており、そこから繰り出される攻撃はかなりの威力を持つ。

色は敵の返り血によるものとされているが、元からである。

STAGE 20 囚われのツバサ（前書き）

皆様のおかげで遂にSTAGE 20まで来ました！
これからもイブニングゼロをよろしく願います。

STAGE 20 囚われのツバサ

スターラルガの集会場と思われるとある場所。

「ク、クソッ……！」

その場に居るナイフを持った一人の男性の周りにはスターラルガの人間と思われる死体の山。

無数の刺し傷があるもの、身体のかなな傷から大量の血が流れているもの、中には首や身体の一部が無残にも切り落とされているものもある。

もはや『凄惨』などという言葉ではとても表せないような光景だった。

屍と血の臭いに埋め尽くされた大地の上で男と対峙するのは、一人の少女。

青白いツインテールに紅いロリータなドレスに身を包んだ、アンティークドールのような美しい少女だった。

「せっかく私達を倒すって言ってたけど、もう終わりなのかしら？

つまらないわあ……………」

身体中に浴びた返り血とその手に握る鎌のような武器、そしてその喋り方は男を戦慄させるには十分過ぎた。

「く、来るな……………来るなあああああ！」

刹那、男の身体から何かが飛び、大地を赤く染める。

「ファイブナイツが仕事の邪魔したからってドリスがスターラルガの奴らを殺せてムキになっちゃってるのよね、最近……………痛くしてゴメンネ？」

可愛らしく振る舞うが、他から見れば今の彼女ほど不気味なものはないだろう。

その時、通信が入る。

「あら、ドリスじゃない。遊びにもならなかったよ？」

『退屈そうね……………そうそう、もうすぐエリー王女とお仲間がそっちに来るよ。遊び相手にちょうどいいんじゃない？』

「……………うん。分かった」

ドリスからの通信を切り、少女は空を見上げる。

「そっか……………エリーがこっちに……………綺麗になってるのかな……………
…？元気かな……………？楽しみだわ……………ウフフ……………アハハハ……………
…」

可憐な少女の静かな狂気の笑い声が、血塗られた大地に響き渡った
……………

「しかし随分と広い国やなく、ロシアって」

エリー一行が次に訪れたのはロシアの首都・モスクワ。
一行はまだ飛行機を降りたばかりで、空港のロビーに居る。

「何かだんだんフォルティス・レインに近づいてきてるな」

「そうなんですか？」

「ああ。地球、アナザー・アース共にロシアの隣には三つの小さな国があったんだが、こっちでは戦争で人が住めなくなる程に荒れ果てちまったらしくてな、そこを他の世界から城ごと移住してきたフォルティス・レインの王族と民が開拓したってどっかで聞いた事があるぜ」

「そうそう。キララもエリーに仕えるメイドの一人なら国の歴史をちゃんと知っておかねばな」

「はう……………ごめんなさい……………」

キララの問いに答えたのは一行の新たな仲間、ジャッキー・ラスティード。見た目より博識である。

「さて、城ごとののがちよつと気になるんだが、今の俺らにはもつと深刻な問題がある……………」

ジャッキーが視線を向ける方向には……………

「これ、私に似てませんか？」

今頃は日本でプロデューサー（恐らく赤羽根P）の帰りを仲間達と待っている筈の三浦あずさの姿がそこにあった。その手に自分と似た顔のマトリョーシカを持って喜んでいる。

「どうしてこうなった……………」

「どうしてでしょうねえ？」

「という訳で、あずささんは今私達と一緒に居るわ」

『あ……………王女と一緒にで本当に良かったです』

「でも大丈夫かな？ パスポートとか……………」

『大丈夫です。常に財布に携帯とパスポートは持ち歩かせるようにしてありますから』

そしてエリーはジャッキーの携帯で765プロ事務所に居る律子と話していた。

この時、事務所では律子の後ろで春香が『あずさん迷子地図世界版』にまた一つピンを刺していた。

「ところでミカーサ、ロシアに行こうって言い出したのはあなただったわね？ どうしてかしら？」

「ああ、私の母さんが居る雑技団のホームページを覗いてみたら次の公演がこのモスクワで行われるみたいだね」

「ミカさんのお母さんが……………楽しみですね」

それを聞いて心躍る一行。因みに、ミカーサを『ミカさん』と呼んだのはあずさである。

他に行くあてもないので、一行は公演が開かれる場所へ向かう事になった。

それが悪夢の始まりだという事も知らずに。

.....

―とある劇場前―

「あゝらよく来たわね。ツルギ君も元気そうで良かったわ」

「チャオさんこそ.....」

「もう.....母さんったら相変わらずなんだから」

一行の目の前ではミカーサの母と思われる『チャオ』と名乗る女性がツルギとミカーサを抱きしめてじゃれている。彼女の頭にはミカーサと同じだが少し大きめの触角が揺れており、彼女が純粹な妖虫族である事を示していた。

「あのエリー・ミスト王女が私達のために来て下さるなんて……立ち話もなんですし、客席へどうぞ」

「そうさせてもらいます。さて、あずさんがまたどっか行かない内に早く……っ！」

その時、ツルギが持つ人間の4倍はある獣の聴覚が何かを聞き取った。

直後に走り出すツルギの後を追う一同。

そしてツルギが劇場の扉を開こうとした時だった。

バァン！

「ぐあっ!？」

扉を吹き飛ばしながら伸びる何かがツルギの腹を突いてその小さな身体を吹き飛ばした。

「な、ななな、何ですか今の!？」

キララがややパニックになりながら指し示したのは赤い色をした長い何か。恐らくは何かの生物の触手である。

しばらくすると触手は引っ込み、静かになる。

「……………」

ガシャーーン！！

「っ！？何あれ！？」

次の瞬間、建物の中から巨大な何かが飛び出す。

逃げ惑う人々の悲鳴と共に現れたのは、一言で言えば『肉の塊』。真っ赤な体に無数のうごめく触手に光る目玉という醜悪な怪物だった。

よく見るとフォルテイス・レインで戦ったライガーと同じような機械が所々に張り付いている。

「あれってどこからどう見ても自然に生まれた生き物じゃないよな……………」

「しかもあの機械は……………もしやミネルヴァ勢力の生物兵器か！？」「気持ち悪いのが出て来たわね……………」

「こ、恐いですう……………」

そう言いつつも一同はバッチリ戦闘体勢を取っている。

「何がどうあれ、私達のために関係のない誰かを巻き込む事は許さないわ!」

「ああ! フォワードはあずさんを頼む!」

エリーとジャッキーが先陣を切り、フォワード陣はあずさを守る体勢を取りつつ仲間達を見守る。

「ジュワイユーズ!」

フォルトレイヤーを構えながらのリーフの回転斬りが空気を斬撃の嵐へと変え、襲い掛かる触手を一瞬にしてバラバラに切り刻む。

「ツルギ!」

「おう!」

その間にミカーサがツルギの手を利用して高く飛び上がり、竜の翼を展開したジャッキーがそれに続く。

「あたしの毒針を喰らいなさい！」

「俺のみな！フラッシュランス！」

ミカーサはお尻のスズメバチの針を伸ばしながらヒップドロップを、ジャッキーはサイコ・ライトで形成した光の槍での一撃を繰り出す。針と光の槍が怪物の体に深々を突き刺さり怪物が呻き声を上げ、触手に捕まる前にジャッキーがミカーサを引き抜く。

ミカーサは一瞬気持ち悪そうな顔をしたが、すぐにまた戦い始めた。

「なんて奴なのよ!？」

「どこのB級ホラー映画やねん!？」

「ちょっと危ないかもな……!!」

「だくけくど、今時こんなグロいだけの敵って流行らないよね」

エリー、はやて、ブルース、ヴィヴィアンも迫り来る触手を捌き、なんとか身を守ろうとする。

「あんな生き物って僕達の仕事でも見た事無いよね!？」

「無い無い!絶対無いよ!」

「キュー!キュー!」

「ティアー、気持ち悪いよ」

「泣くな!」

「もう誰でもいいですからなんとかして下さい!」

落ち着きがないようだが、フォワード陣とキララは必死で触手から

あずさを守り続けていた。

その時、クロスミラージュが何かを捉えた。

『上空後方より飛行中の何らかの機体の反応が3。注意して下さい』

「な、何………きゃあ！」

「ティア！？ぎゃ！」

「うわあ！」

「あうっ！」

「キュウー！」

「ひゃああ！」

それに気を取られている内に触手が襲い掛かり、五人と一匹は弾き飛ばされてしまう。

その直後、その反応の正体がエリー達の上空に姿を現す。

それは3機の黒いヘリ。それも管理局の紋章がはっきりと塗装されている。

『大人しくエリー王女を引き渡せ。彼女には公務執行妨害の容疑がある。繰り返す、王女を引き渡せ！』

「何なんやあんた達は！」

「おーおーおー、自己防衛が犯罪行為扱いかよ？」

「このような奇っ怪なモノを引き連れておきながら勝手な事を………局の名を語る蛮族どもめ！」

「ウザいから墜としちゃっていいよね？私のケルベロスでさあ？」

少しの間エリー達とヘリの睨み合いが続く。

だがその時、1台のヘリを操縦する男が小さく笑い、何かを動かす。

「くっ………また襲ってくるか!？」

「あたしの毒針が効いてないというの………!？」

「はっ!ボッコボッコにすんぞコラァ!」

怪物が再び触手を振り上げる。

しかし、エリー達に向くと思われた触手は別の方向へと伸びる。

「エリーちゃん!？」

「あずささん、危ない!」

触手は戦う力を持たないあずさを狙っていた。

エリーはとっさにあずさを突き飛ばし、同時に触手がその手足や身体を捕らえる。

バチバチバチ……………！

「く……………あっ!？」

空中高く持ち上げられたエリーの身体が勝手に放電を始めた。力を抑えようとするも、雷はとめどなく身体から溢れ出し、エリーの意思では止められなくなっている。

さらに、放電が進むにつれてエリーは虚脱感に襲われ、身体から力が抜けていく。

雷が赤い触手を伝わって怪物の本体へ向かっているのを見てエリーは気づいた。

(嘘……………力が……………が……………吸わ……………れ……………)

怪物はエリーから破滅の雷を吸い取っていた。

必死に触手から逃れようとするが、手足、首、胴体、さらには翼までも搦め捕られたエリーは成す術もなくただ力を吸われ続ける。

「いかん!このままではエリーが!」

「今助けに……………うわっと!？」

「ぐっ…………近づけねえ…………！」

ブルース、リーフ、ジャッキーが助けに行こうとするが、別の触手が行く手を阻み、さらにヘリからのビームに狙われる。

その間にも力を吸われ続けたエリーはやがてもがく力すら失い、しっかりと握られていたエンシェントブレイバーも手を離れて地面に突き刺さっていた。

（あ…………あああ……………もう……………ダメ……………）

遂に力尽き、手足が垂れ下がる。

意識が朦朧とするエリーの上に一際大きな触手が既に怯える事すらできなくなったエリーに迫る。

そして花の蕾のような口を開き……………

バクンッ

視界が真っ暗闇になった。

そしてエリーの意識は生暖かい感触の底へと沈み、途切れた。

「あ……あ……いやあああああああああああああああああ
あああああああああああああつ！」

それを一番近くで見ていたあずさの悲鳴が辺りにこだまする。

怪物の巨大触手の先端が大きく膨らむと、その膨らみは音を立てながら移動し、本体へと消えた。

だが、仲間達はそんなものなど見えていなかった。

自分達の目の前でエリーが怪物に食われた——ただただそのショックで完全に動きが止まっていた。

「…………ぬ!？」

だが、それを吹き飛ばすかのように3機のヘリがローターの音を立て、怪物の真上へと動く。

すると先程までビームを放っていた機関砲から光が伸びる。

光は怪物を包む立方体となり、そのまま怪物ごとヘリに運ばれていく。

「そんな……エリー様が……」

「さらわれてもうた……」

「エリーちゃん……私のために……」

「あずささん……非力なあずささんを狙うなんて……」

「エリーさんが……食べられちゃった……」

「……もしあれが本当に局の連中なら、奴らはエリーの力、或いは身柄そのものを狙う筈。あの怪物の腹の中で消化される事はないだろう」

「じゃあ早くエリーを助けに……!」

「慌てる事はないわ」

リーフを除く仲間達が慌てる中、ヴィヴィアンが会話を遮る。

「奴らがエリーをさらおうとする事は予測できたからね。みんなとヘリのパイロットがあれに気をとられている隙に発信機を撃ち込んでおいたわ」

小さいモニターを見せて得意げになるヴィヴィアン。

「おお! でかしたでヴィヴィアン!」

「ならあたし達がやるべき事は一つ!」

「エリーさんを助けます!」

「キュー!」

「僕も力になります！」

「あたしだって！」

フォワード陣とはやては覚悟を決め、ヘリが飛び去った空を見る。

「どうやら大変な事に巻き込まれているようね」

「そうなんです。チャオさんの公演を見るのはまた今度に……」

「それならこれを持って行きなさい」

チャオからオレンジ色の何かが詰まった小瓶を手渡される。

「母さん、これって……」

「私の仲間と一緒に作った特製ハチミツゼリーよ。無事に生きて帰れたら王女様に食べさせてあげなさい」

チャオからハチミツゼリーの瓶を受け取ったツルギとミカーサも戦う準備をする。

「戦いが始まったら俺の後ろに隠れて下さい。あずささんは俺達が守ります」

「ありがとう、ジャッキー君。エリーちゃんを必ず助けてあげて……」

戦場を知らないあずさだが、エリーが自分を庇ってさらわれた事に責任を感じ、共に危険な場所へ行く事を決心する。

「みんな、行くで！」

エリーが落としたエンシェントブレイバーを抱え、はやてが先頭に立つ。

沈みゆく夕日に照らされる中、大切な仲間を助けるためにはやて達は走り出した。

― Bパートへ続く

STAGE 20 囚われのツバサ（後書き）

ジャッキー

「まさかのあずさんバーティイン！？」

あずさ

「よろしくお願いしますね」

キララ

「そんな事よりエリー様最大のピンチですう！」

リーフ

「刮目してBパートを待つのじゃ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8226o/>

魔導戦記リリカルなのはAnother world

2011年10月26日14時04分発行